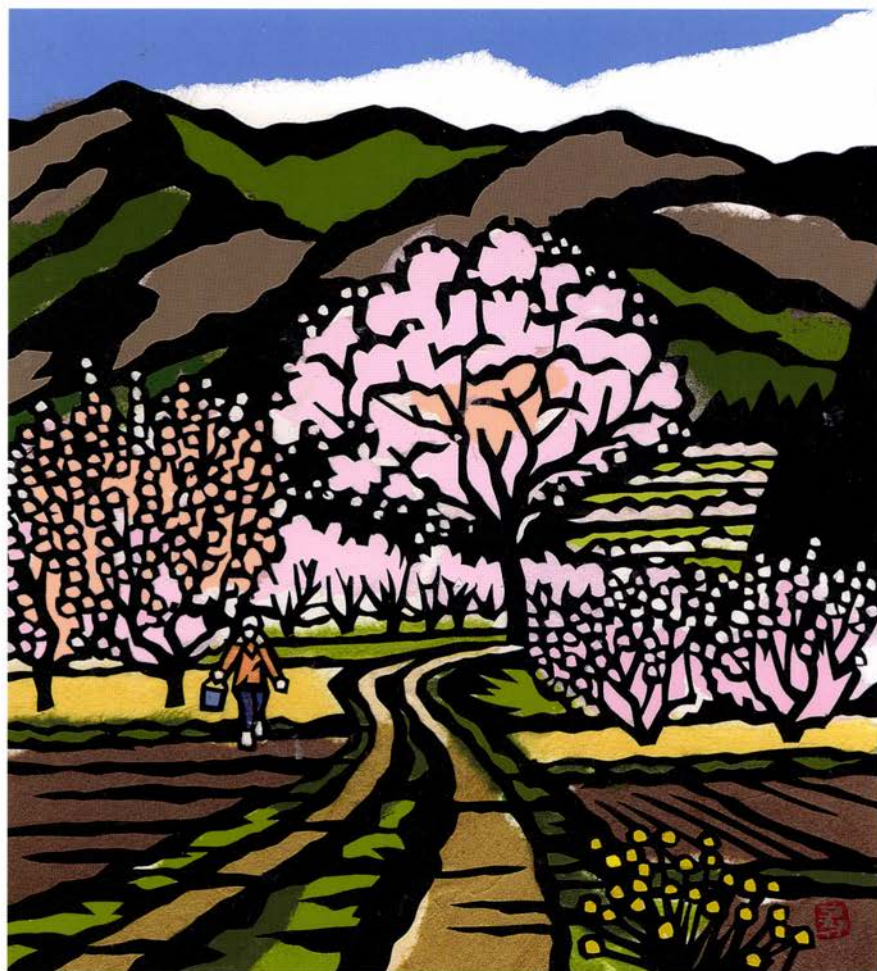


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十七年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇五四号



日川協加盟

No.1054

三月号

4月の本社句会：会場のご案内

※ 4月7日（火）の本社句会は、

《たかつガーデン》で開催します。

（会場＝8階「たかつ東・中の間」）

〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町7番11号

TEL.06-6768-3911

[会場案内図]

◇お願い

- * 開場は13時です。
時間前の開場はできません。
時間前のご来場はお控えください。
- * 会館内に、個人的に食べ物を持ち込むことはできません。
昼食を済ませてからご来場ください。
- * お茶の用意ができませんので、各自でご用意ください。

5月からは従来通りアウィーナ大阪です。



心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

岡山の風

小島 蘭 幸

昭和42年1月号の川柳塔を開くと、中島生々庵選の川柳塔巻頭に浜田久米雄、続いて服部十九平、水粉千翁、本田恵二朗、直原七面山、浜野奇童といった錚々たる川柳作家をはじめ岡山県から18名の同人が投句されておられます。

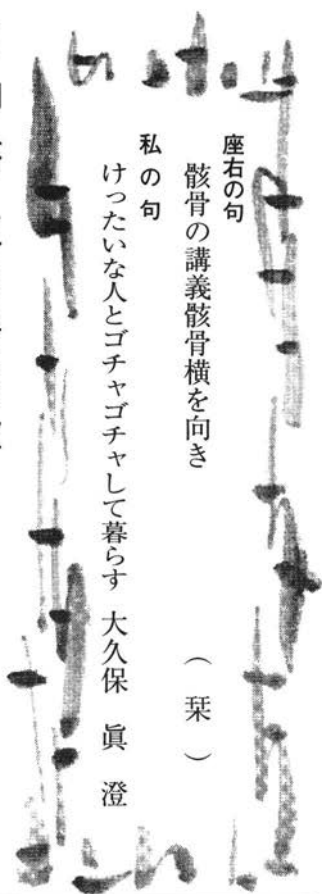
いのちある限り時計のねじを巻く	久米雄
蜘蛛の巣にかかった虫を子が救い	十九平
ネジを巻き給え素直に動くんだ	千翁
すべり込みアウト終バス無情なり	恵二朗
酔った振りして女から崩れ	七面山
遠慮なく酔うてここにも義理ができ	奇童

昭和42年4月、吉永町の公会堂で、備前川柳社20周年記念川柳大会が開催されました。当時19歳だった私も、竹原川柳会の仲間と一緒に、初めて岡山県

の川柳大会に出席しています。手に汗握りながら、ドキドキ披露を聞いたのも懐かしい思い出です。私、三才賞を受賞しました。それからというものの広島県の大会はもちろん、岡山の大会にも、山内静水竹原川柳会会長と一緒に、数多く出席しました。岡山、倉敷、弓削、玉島、児島、邑久、西大寺……。岡山の大会に出席すると、川柳塔社主幹をはじめ本社の皆さまにお会い出来るのも楽しみの一つでした。

寺尾俊平、田中好啓、杉原正吉、徳永操、長町一吠、石部明……。大会に出席する度に、岡山の川柳作家の斬新な作品に大いに刺激を受け、そして破調でありながらその美しいリズムに驚愕したのでした。寺尾俊平、田中好啓両氏は、特に私を可愛がって下さり、若かった私を選者に指名、推薦を下さいました。岡山の風は、私を大きく成長させてくれたのです。

平成27年、川柳塔2月号を開くと、西出楓楽選の水煙抄に、巻頭ページの森ふみか、藤成操江をはじめ岡山から12名の方が投句されています。嘗て、冒頭に書いたように岡山には多くの川柳塔同人が活躍していました。私は今、岡山の新しい風に大いに期待しているところです。



座右の句

骸骨の講義骸骨横を向き

私の句

けつたいな人とゴチャゴチャして暮らす 大久保 眞澄

(葉)

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「あんずの里・更埴市」

■巻頭言 岡山の風	小島 蘭 幸	(1)
モーセの十戒	前たもつ	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (12)	木津川 計	(43)
自選集		(44)
温故知新		(47)
水煙抄	西出 楓 楽 選	(48)
新川柳鑑賞 (37)	麻生 路 郎	(70)
西尾 葉句抄		(71)
俳風柳多留一二篇研究 21		(72)
『麻生路郎読本』余滴 (27)	栗原 道 夫	(74)
英語 de Senryu (39)	吉村 侑久代	(76)
民族の詩歌 (33)	三好 専 平	(77)
愛染帖	新家 完司 選	(78)
檸檬抄 「羽ばたく」	牧野 芳 光・古久保和子共選	(82)

モーセの十戒

前 たもつ

モーセはBC千四百年頃の人である。エジプトに寄留するユダヤ人の奴隷の子であり、イスラエル史上最も偉大な指導者、予言者と言われている。

モーセと言えば映画「十戒」などでご存知の方も多いと思いますが、エジプトの奴隷であったイスラエルの民を逃れさせ、一方、神の民への律法、十戒を伝えたことで知られている。

今回はモーセの十戒について述べる。

今、小磯良平の神から授かる十戒の挿絵を見ながら、聖書「出エジプト記」を読んでいる。

「モーセは雲の中に入って行き、山に登った。そして、モーセは四十日四十夜山にいた。」「こうして主は、シナイ山でモーセに語り終えたとき、あかしの板二枚、すなわち、神の指で書かれた石の板をモーセに授けられた。」

このように神はイスラエルの民がカナ

「氣 迫」
一路集「手 探り」
「トンネル」

初歩教室「占 う」

川柳塔鑑賞

水煙抄鑑賞

■句集紹介 小島蘭幸川柳句集『再会Ⅱ』

追悼 永田俊子さんを偲ぶ

追悼 近藤佳子さんを悼む

せりりゅう飛行船^⑤

■エッセー ティータイム、ことば遊び^④

インスピレーション・ナビ 印象吟

二月本社句会

句会燦燦

各地柳壇（佳句地十選／鈴木公弘・大内朝子）

三月各地句会案内

柳界展望

■編集後記

長浜美籠選 … (85)

小川てるみ選 … (86)

山野寿之選 … (87)

山口光久 … (88)

福士慕情 … (90)

江見見清 … (92)

梅崎流青 … (93)

仁部四郎 … (94)

新家完司 … (95)

新家完司 … (96)

水野黒兎 … (97)

大西泰世 … (98)

岩崎眞里子 … (104)

朱夏・まつお … (105)

朱夏・まつお … (106)

朱夏・まつお … (107)

朱夏・まつお … (108)

朱夏・まつお … (109)

朱夏・まつお … (110)

朱夏・まつお … (111)

朱夏・まつお … (112)

朱夏・まつお … (113)

朱夏・まつお … (114)

朱夏・まつお … (115)

朱夏・まつお … (116)

朱夏・まつお … (117)

朱夏・まつお … (118)

朱夏・まつお … (119)

ンの地に入るに当って、守るべき神の教えを伝えたのである。

一、神以外の神があつてはならない。

二、偶像を造つてはならない。

三、主の御名をみだりに唱えてはならない。

四、安息日を覚え、これを聖なる日とせよ。

五、あなたの父と母を敬え。

六、殺してはならない。

七、姦淫してはならない。

八、盗んではならない。

九、偽の証言をしてはならない。

十、隣人のものを欲しがってはならない。

四戒までは人の神に対する義務。五戒からは人の人に対する義務である。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷から連れ出した。あなたの神、主であ

る。」と前置きして、わたし以外に神があ

つてはならない。また、神以外の偶像を

作つてはならないと戒めている。

五戒は、両親が神の權威を代表してい

るので、父母を敬わないことは神を敬わ

ないという意味である。

この十戒は三千五百年の時代を越えて

今なお、新鮮さを感じるのは私だけであ

ろうか。

ろうか。

ろうか。

ろうか。

ろうか。

ろうか。

ろうか。



小島蘭幸選

宇部市 平田実男

娘から遠隔操作されてます
原発をやがては狙うだろうテロ
衣食住少し足りないほうがいい
スキップの足がもつれて来る八十路
プライバシー隣り近所を狭くする
うつぶんを伊勢で晴らして来た総理

橿原市 居谷真理子

貝ボタン今夜も海に守られる
冬の道17歳とすれちがう
母というせないものになった娘よ
泣ききった顔で帰ってきた心
灯が消えたチョウチンアンコウが死んだ
雨宿りこんな時間もあったいい

鳥取市 福西茶子

中立という穏やかな卑怯者
鈴鳴らしラジオ鳴らして父母の墓
亡母さんと今朝逢いました勝負の日

誉めちぎる夫の作った夕ごはん
両親とおんなじネタで子が採める
円高で値切り円安でも値切る

三田市 久保田千代

手のしわに流れた日々の重さ見る
春愁に血圧計が揺れている
すっきりと新年だけは迎えたい
ハッピーニューイヤ午前0時のEメール
エプロンはやっぱり主婦に似合うもの
耳鳴りは過去を訪ねる音だろう

岸和田市 岩佐ダン吉

ふる里が納税だけを言うてくる
傷だらけでも九条は厭わない
追い風もたくさんもらい旅続く
5・7・5命をかけた人がいる
反論はすまいわかってきている
意地悪の人だとばかり思ってた

鳥取市 岸 本 宏 章

予定表先ずカルチャーと通院日

温室の野菜は知らぬ冬の風

重いもの持つなと腰が指図する

豪快に笑うと白い歯も笑う

朝寝する罪悪感を抱きつつ

九条の土台が脆くなってきた

橿原市 安 土 理 恵

まだ暗い待合室で膝だいて

この人を置いて出ていくなんて罪

冷え切った胸に永住する気らしい鬼

りんごむく故郷は吹雪というニュース

ラジオからサッチモ旧い記憶がこぼれくる

弥生三月夢は小枝のつぼみほど

鳥取県 竹 信 照 彦

白寿の祝いして義母は大往生

白寿まで生きた母持つ妻と居る

冥界とつながる道を知る仏

テロで死ぬ人と大往生がある

テロ阻止の大デモ世界中でやろう

マララさんの叫びは子どもだけじゃない

松江市 藤 井 寿 代

ピクトリーロード突っ走る圭くん

景気より晩酌のあて何しよう

淡雪に負けじとタンポポの笑顔

カレンダー捲れば梅が匂い立つ

戦火の止まぬ国に降る赤い雪

平静でいられぬ老いという魔物

和歌山市 木 本 朱 夏

バス停のうしろ姿は母なのか

狂わない時計を父は持っていた

感情線のところどころに溜まる冬

未開地をひらくたのしみ胡桃割る

白い猫がふり向いたのでついて行く

寒風に耐える身代わり地蔵さま

鳥取県 斉 尾 くにこ

柔らかく軽くと今をふくらます

ひとり居てたのしほのほの抱きうれし

太陽のマグマが大地のマグマか

朝御飯あそぶ力がわいてくる

変つてく容姿ころは変らない

お弁当のしい今日であるように

大阪府 谷 口 義

ハハハハと笑い二月になりました

つつこみを入れたくなった昼の月

ここからはキレイゴトではすまされぬ

気を取り直す訓練は出来てます

鶴瓶に乾杯わたくしにも乾杯

思い出の賞味期限が切れました

河内長野市 山岡 富美子

ささやかなニュース重ねて家族の絵

頭陀袋包容力がお気に入り

ハイタッチ敵も味方も好きになる

お祭りが続いています物忘れ

美女ですぬ新成人のお姫様

氷雨降るテロのニュースがテロップに

堺市 村上 玄也

顔と名札見比べやあやあと握手

乾杯の音頭は出世頭だな

悪童の面影残し薄い髪

マドンナも白髪と皺のおばあちゃん

若き日のロマンス秘話が暴露され

次に会う時はあの世と別れ際

倉吉市 牧野 芳光

しきたりが守ってくれている田舎

私の舞う空狭く低くなる

節々に悲しみがあり強くなる

大切な言葉は保温して残す

私の弱いところに棲むお酒

鉄砲を持てば命が軽くなる

紀の川市 辻内 次根

一呼吸すれば変っていたドラマ

生姜湯飲んで今日は寒の入り

年齢に合わぬ未熟な顔である

その味は高倉健という役者

灯を閉じて有相無相の闇の中

抗しても今日の時間に流される

弘前市 高瀬 霜石

生き上手表も裏も使い切る

万病の元となりうる金欠病

本日も梯子支える役でいる

誰の手の中にも正義なんてない

手紙書くときどきガスを抜いている

ひーふーみーシアワセ数えしあわせに

西宮市 片山 忠

妻と飲むノンアルコールなのに酔う

にんげんも雑種のほうが味がある

いい人と錯覚させる飴ひとつ

雑踏じゃないと生きてる気がしない

運がないただそれだけで了とする

美しく痩せることだけ考える

札幌市 三浦 強一

純白の画布新しい絵を描こう

一筆箋にも筆蹟にお人柄

ジョークだと解せぬ妻と猫がいる

やれば出来る北京サミット青い空

晩成の夢捨てられずまだ生きる

自分史の終章タラレバで終る

富田林市 山野 寿之

努力した結果を呉れる自家野菜

寄せ鍋が笑い転げている絆

義理と見栄削り身軽な鬘斗袋

湧き水の両手が温い山の故郷

白よりも白大根に嘘がない

北風が味を鍛える干し大根

和歌山市 松原 寿子

勝ち進むチャンスへ運が舞い降りる

意識の底で揺れて恋しさ深くなる

廻れ右すれば暗示が風化する

政界の疑惑渦巻くまま放置

お祝いの言葉へ鞭が添えてある

ぬくもりを絵文字で閉じるダイアリー

奈良市 大久保 眞澄

ニュースニュースと妻が井戸端から戻る

仏さんの鼻の穴までお身拭い

オレオレより恐い孤独を狙う鬼女

待合室人生観が変わりそう

下手なお世辞だインプラントも浮いてくる

二礼してせんべいもらう奈良の鹿

大山市 金子 美千代

勉強になったと言えるほどの傷

年末に初めて知った流行語

迷ったがやはり手作りする御節

年賀状千秋楽という傘寿

正月の残骸ひとり平らげる

震災の爪痕美しい神戸

八尾市 村上 ミツ子

年下の義姉先に逝く年の暮れ

心もからだもバラバラにこわれる

かなしくつても生きてゆかねばならぬ

段差などないのに転びそうになる

失敗をかわいいと娘が言うてくれ

だいじようぶだよ娘このごろ頼もしい

尼崎市 長浜 美籠

初詣で近くで済ますお元日

行き暮れた賀状一枚舞い戻る

凜として生きよと寒の月が冴え

一日の疲れを解かず抱き枕

戦線離脱なんと気楽な視野の中

緩取りの長姉に冬陽あたたかい

吹田市 木下 敏子

今年こそ頑張りたいと墨を磨る

松生けて孫や子供を出迎える

卒寿過ぎまだこれからと墨の彩

力抜くことが優しい文字になり

好きになる筆が言うこと聞いてくれ

もう背伸びすることも無い土踏ます

鳥取市 有 沢 せつ子

トーストとコーヒー朝のハーモニー
まず熱いお茶飲んでからペンを持つ
美人ではないので笑顔を忘れない
薬より歩けと体の声がする
笑ったら小さな痛み消えていた

鳥取市 池 澤 大 鯨

敵味方どちらになるか今日の酒
武者震い自家発電で間に合わす
多勢に無勢反主流の旗印
逃げ道を用意してからちよつかいす
組む人が味方になるとは限らない

鳥取市 加 藤 茶 人

説明書読むより孫に聞くスマホ
ラッキーな事に彼女は未亡人
言い訳が脳裏に自分には甘い
松葉杖なんと不便な店構え
幸せを満喫玉手箱開ける

鳥取市 岸 本 孝 子

重いほどの万両の実が庭飾る
八十路坂無事に迎えて鈴を振る
二人して傘寿の初春に乾杯だ
ときどきは八十だよと言いつけ
お年玉渡す孫いて幸せだ

鳥取市 倉 益 一 瑤

雑草のDNAでしたたかだ
温度差がこんなにあつたのか父娘
本当の実力二番手が握る
歩行困難欲をいっばいぶらさげて
先にボケた方が勝ちだと夫言ひ

鳥取市 鈴 木 一 弘

走馬灯絆嬉しい温泉の香り
咲いて散るトンネルあまた抜けて喜寿
青い竹雪はねとばし広い空
地蔵様雪にうもれて目鼻だけ
こだわりの人生一途白寿呼ぶ

鳥取市 竹 口 清 信

法律を知らなんだでは済まされぬ
缶詰に詰めておきたい片思い
控え目に生きてもいずれ灰になる
人間を生かしてくれている緑
がっちりと貯めて涼しい顔をする

鳥取市 中 村 金 祥

喝入れた背なに再起を期待する
役職を解かれてからの空元気
諍いが絶えぬニュースを繰り返す
子や孫のサイン逃さぬ勘を持つ
着地点うまい所が見えて来ぬ

鳥取市 夏目 一 粹

どこまでが精一杯かわからない
宝くじ当たったあとを考える
動物も人を見る目は持っている
脳回路古い部品を探してる
日記買うこれから余白どう埋める

鳥取市 永原 昌 鼓

そこそこの腕あり今日も飯を炊く
はや傘寿雑魚から脱皮出来ぬまま
無駄づかい出来ぬ余命もへそくりも
寒風へテレビと会話して暮れる
褒めるのも叱るのも微妙さじ加減

鳥取市 西川 和 子

電話口辿り着いたらベルは切れ
尻に火が付いてもさっと動けない
終点がそこ身仕度焦らねば
高重速まっただめになりました
頭と手目覚めてもらおう写経など

鳥取市 春木 圭一 郎

あきらめぬ強い心で挑戦だ
いつだって感謝の心忘れまい
自らが強さ行動力で得る
それぞれが違う何かを持っている
プライドを捨てれば楽になれそうだ

鳥取市 平尾 菜 美

姑さんのゴマ和えプロにひけとらぬ
立ち直る決意くよくよ振り向かぬ
遠慮せずおたがい様と杖になり
趣味バネに歎もつ今日の手が弾む
精進の往く道写経終りなし

鳥取市 前田 楓 花

キツカケがつかめないまま出遅れる
もう一度逢いたい人は手に余る
お日様も月も私に向いている
春を待つ冬眠の熊もわたしも
手漉き和紙守り続けるごつい指

鳥取市 森 山 盛 桜

食べて寝るワンパターンだが飽きは来ぬ
どの時の失言なのか解らない
甲高い声で強面には合わぬ
盛り付ける身の上話なら得意
丸腰が気楽だあれも傷つけぬ

鳥取市 吉 田 孔 美 子

新聞を広げぬくぬく夕餉まで
元記者の法螺混りの楽しいこと
寄り棟だ倒れたしても横向きさ
ステーキの前でゆれてる今日一人
今も嫌いです待つ事並ぶこと

鳥取市 吉田 弘子

殊更にひと日充実する師走
通信簿開く気持の塔誌手に
どうでもいい事覚えてる脳の意地
紅を引く何があってもいい様に
味付けのレシビ通りは物足りぬ

鳥取市 両川 無限

耕やすと微笑みかけてくる大地
友達になれそう語尾が温かい
運鈍根愚直な父の背に学ぶ
子の部屋は連絡船のない孤島
物言わぬ新人類を産むスマホ

倉吉市 猪川 由美子

アンチエイジング恋するハート持ちつづけ
野党消えて自民ますますのさばるか
スタップ細胞明けては暮れた一年だ
恋文はやはり手書きがほっこりだ
断捨離でスッキリさせて黄泉へ発つ

倉吉市 山中 康子

恩に着ぬ辞書が一番うれしくて
肉食べて川柳戦と差し向かう
時どきは鬼もタジログ馬鹿笑い
年男些細なことに愚痴らない
飲み忘れ薬の効き目知りました

米子市 後藤 美恵子

大吉を結んだ枝が雪に耐え
ノンアルコール酔った振りして盛り上げる
遠い娘と写メでお節を競い合う
有りのまま楽しむ余生模索する
真四角なサイズはみ出し生きてみる

米子市 後藤 宏之

年玉をやった孫から金借りる
ほどほどにウソとホントでくらしてる
雪見酒思案しながら杯重ね
通訳を姉が受けもつ宇宙人
あれ見えぬこれが見えぬといそがしい

米子市 竹村 紀の治

思い出を寄せ鍋にして手酌酒
死ぬ本も惚けない本も借りて読む
言い放題テレビ機敷の大相撲
ひとり分無病息災初詣で
生きている証拠字忘れ物忘れ

米子市 中原 章子

平凡に新年迎えありがたい
朝風呂に入り一日動き出す
大根のとりりと旨く飽きもせず
一病に負けぬ図太い気持ち持つ
ブラン終え安らかな夜やって来る

米子市 成田 雨奇

七億では富裕層とは言われまい

料理番組おいおい酒を入れすぎだ

大晦日蕎麦屋に行けばだれかい

手招きをしてくれないか詩の女神

家じゃなくあなたのそばに來たと言う

米子市 吉田 陽子

羊年親の蓄よ子の蓄

福引きのティッシュ相変らずの運

そつとそつと咲きたいのです冬桜

老化の度そつと覗いて子が帰る

ペンと筆持てば嵐が去って行く

鳥取県 石谷 美恵子

サラメシタイム手話も楽しく咲いている

座布団を横に外して畏まり

座布団へチンマリと座す母白寿

期待せぬ金一封のありがたさ

おしどり夫婦微妙に違う温度の差

鳥取県 岩崎 和子

あたたかな雑煮の湯気にむせている

九十歳夫も元氣私も

雪が降る北のふるさと同じ雪

三人が肩寄せ猫とお正月

初売りのお店にやつと足運ぶ

鳥取県 西谷 悦子

原型を守る術なし年を越す

手鏡を斜めに見ても歳はとし

振り向けばアタックの壁遠くなる

日本の誇れる屋根が欲しいもの

これからの余生は早送りしない

鳥取県 細田 裕花

帰省客へのプレゼント雪が降る

お人柄雪がきちんとかいてある

正月のレシビへ熱い台所

冬時間活動量がどんと減る

落葉樹骨のあるところ見せる冬

鳥取県 松川 行男

早すぎた喪中ハガキに電話する

四千歩局まで年賀雪を踏み

名刺には老人会の世話とメモ

見染めたの貴方が先に言ってくれ

日なたばこ同じ場所です古女房

鳥取県 山下 節子

油切れ腑抜けになったロボットよ

マンションの灯りに温度差は見えぬ

二番手がしつかりしてる安心だ

おしゃべりは真つ平蟹の煮えるまで

競馬場腑抜けになった人人人

松江市 石橋芳山

屈辱は埋もれたままでいることだ
不甲斐ないものだ星さえ掴めない
屈辱に耐える穴なら深く掘れ
サボテンを抱いて惨めな道化師よ
惨めだと思う負け続ける闘魚

松江市 小川注湖

鼻に管食事をしたり葉飲む
管に線はすされわれは自由人
弾の下手術台まだ生かされる
わがことが出来たとトイレ座つてる
帰ったぞ畳一畳寝て叫ぶ

松江市 川本 畔

ネチャリ飴季節はずれのポケットに
天の岩戸こじ開けて出た過去がある
開き直る勇氣もなく爪を切る
末っ子が名乗りをあげて継ぐことに
愛と言う案山子の肩の夕陽かな

松江市 錦織禮子

蠟梅も寿ぐ初春の句会
ラジオからチターの音色癒やされる
とんぼ返り新成人のつけまつげ
ハードルの高さ戸惑う仲間入り
センター試験控えブラックゾーン

松江市 松本知恵子

凜として今年始める銀世界
正月気分抜けていつものダイエット
七草粥とりあえず蕪芹の汁
春夏秋冬日の出に合わせ朝始動
原発はノー電気代上がっても

松江市 松本文子

人気ない店にもたまに顔を出す
蹟いてからの世の中面白い
山のカラスよ死に場所を見つけたか
蟹ツアーあれから嫌になったカニ
故里は元氣安心して帰る

松江市 三島 崧丘

見て聞いて言つて若さを取り戻す
悔しいがライバルの背が遠くなる
地雷踏む思い傘寿へ一歩二歩
潔く夫婦喧嘩は負けておく
同情の言葉がつつく胸の傷

出雲市 石倉美佐子

朝焼け夕映え稲佐の浜は美しい
久し振りの和服帯が結べない
良い年を迎えられましたか遠い人
昨年まできれいな賀状くれた人
女子大学に入学すると電話来る

出雲市 伊藤 玲子

「爺がんばれ」曾孫の声も届かない

広島市 岸 本 清

握った手にぎり返さず逝くなんて

二人の息子あなたの生きた証です

時計眼鏡あなたが帰る気配して

想い出を抱いて暫くとどまるか

出雲市 岸 桂子

亡母の譜にあつただるうか風の海

着膨れていよいよ冬が重くなる

年金の暮らしが控え目にさせる

取りあえず生きる用意と死ぬ用意

パソコンは妥協する気はまるで無い

出雲市 小白金 房子

おめでとう揃う家族のぞうにはし(四世帯)

初鏡八十七のパフ叩く

日めぐりへ日々誕生のありがたさ

一生を誓った夫婦の朱塗はし

南天の眼やさしい雪うさぎ

島根県 伊藤 寿美

定年の翼を畳む本籍地

待ちかねた手紙にNOと書いてある

結局は独りになった墓の守り

亡夫からのメールが届く冬銀河

片翼のわたしを照らす冬の星

日々多忙惚けの割り込む隙はない

突き進むだけでお国は良くならぬ

ぼっちゃまの政治に弱者泣かされる

無になれる時間が好きで露天風呂

悪友と九条の是非ひとくさり

竹原市 石原 淑子

いそいそと今年も時代雑めぐり

コーヒーに和菓子日本の四季嬉し

ちよっぴりの贅沢こころ真円に

聞き流そ私は私君は君

寒い日いいな 風呂吹きだいこ 柚子の味噌

竹原市 岩 本 笑子

テレビにも雪が降っているコタツ

七草の三つくらいは入れて炊く

太陽を味方に畑を打ち草を抜き

早く寝る医者へ行く日は明日です

一年が早いとみんな言うけれど

東かがわ市 川崎 ひかり

身軽さと背中合せにある孤独

訃報聞き宮尾登美子の書を買いに

外は雪遠い縁の友思う

いつの間に孫がコーヒーブラックで

さざんかに少しみだらな夢を追う

松山市 古手川 光

何処行つた風揚げ羽根突き独楽回し
出て少し歩きなさいと晴れ渡る

年毎に寒さ厳しくなる老化

買うのお止しと五年日記に嘸われる

難しい事幼児に言わすコマーシャル

大洲市 中居 善 信

池上彰にやさしく習う裏話

カルチャーにエステ忙しい忙しい

七十八平均寿命そこに来た

着陸の体制だらう七十八

何をどうする積りなど無い人思う

西予市 黒田 茂 代

朝昼晩飽きずに蜜柑食べている

眼鏡掛けて顔はまじまじ見ぬ事に

よくも悪しくも忘れ上手になつてきた

古めかしい床の間古めかしい軸

神の音楽奏で続ける那智の滝

高知市 小川 てるみ

平穩無事願つて掛けるカレンダー

思考回路ゆるんだままの松の内

円安へ当てが外れるパスポート

ないないと言つて人の太っ腹

はりこんだ正月用の美酒に酔う

唐津市 坂本 蜂 朗

親馬鹿になつた子がいるまあいいか
手探りでつかんだ妻が喜寿になる

妻の意のままに過ごして波立たず

年毎に妻に領土を犯される

面外し暫しの安堵妻という

唐津市 山口 高 明

大空に不戦の誓い平和像

米麴匂う初春酒蔵の町

万全を期した心算の底が抜け

客間への出番と銚子持たされる

咲き誇るバラにも辛い過去があり

熊本県 岩 切 康 子

朝一度の薬忘れる惚けはじめ

連絡をすれば難問釣が来る

元朝に九年振りの雪が舞う

暖かくなつて近場の三社拝

顔刺りに耳は全開町ニュース

札幌市 小沢 淳

呵呵大笑生命線が伸びてくる

急成長は急没落を予感させ

人間に折りといった他人任せ

世の平和祈つて二〇一五年

とほけてる舌が急所を突いてくる

弘前市 須郷井蛙

千手観音労働力に来て欲しい
自衛権隣の境界守ってます
電子辞書眠ったままの広辞苑
交付金増やして我慢強いられる
ターザンが住める緑が消えてゆく

弘前市 高橋洋子

分水嶺線引きされた雪の嵩
手洗いもうがいもせずにいて長寿
老境やのんびり見えて日々多忙
平凡な夫も哲学ひとつ持ち
豪雪に踏み跡一人 無人駅

弘前市 福士慕情

十二月どんと根雪が腰にくる
老松へ手加減しない雪のんの
賀状書く鬼籍の友で止まる筆
雪しんしん胸の根雪が深くなる
地吹雪に耐えるしかない寒立馬

弘前市 今 愁女

家族養う息に送りやる米りんご
父の背みて素直に育て孫二人
明け三時の読書寝床が書斎です
テレビではフランスの首都物騒で
この地球何時もなにかが起きている

弘前市 稲見則彦

風を読む人差し指の先である
少年のカプセル埋めた雪津軽
路地裏の雪のトンネル抜けられず
手始めと天が贈った牡丹雪
雪国の辛さを知らぬハイヒール

弘前市 浅田隆樹

一年の早さ賀状がもう届く
新春も口ゲンカから始まりぬ
雪降ればニュースに出ますわが郷里
青い影雪は月から降ってくる
酒よみな笑い話に変えてくれ

弘前市 岡本花匠

言の端の愛たしかめる夫婦みち
松の内ユキゆき雪に励まされ
禁酒した娘の夫笑ういのちかな
剪定の夢を邪魔する雪の嵩
陽の光り居間に恵みの愛満ちる

黒石市 相馬一花

日本に生まれたことに大感謝
女房に除雪をさせて高いびき
八十の手習い全てが初体験
老年は小志を抱け恐れずに
病院が見舞い断るはやり風邪

青森県 松山芳生

明日を切り開くわたしの青春譜
青春の扉をノックする後期
急がない時計に囲まれるベツト
オスのひよこを育てたことがありました
わたしの余生を案じて啼く鴉

さいたま市 星野育子

お節とテレビにも飽きた人の波
通りにはシヨバン流れる古書の街
昭和の遺産遊園地の老朽
仲直り金平糖の角もとれ
歌の会終えて二次会もカラオケ

東京都 岸野あやめ

もうすぐにお迎え来そう九十歳
大丈夫強いわたしと言ひ聞かす
年齢おんな夜つびてひとり句を念じ
東京は風にきびしい土台あり
身長は十二センチも減ったのよ

東京都 まえで とよこ

湯たんぽのだんだんさめて朝になり
なんやかんや洗いたくなる年の暮れ
賞味期限うっかりされたなさけなさ
戦後の日いいものつる食べいなご食べ
昆虫食さきざきの世に貴重とか

調布市 伊勢田 毅

小康をまず佳しとする大晦日
妻逝きて人と目が会う年の暮れ
ある勇気もって食べてるフグの肝
合掌をしつつ遺産を思案する
妬むのはよそう心が冷えるから

横浜市 小野 句多留

長時間並び参拝済み安堵
紅白はトンチンカンで終つてた
元日のすべて狂わす子の計報(長男病死)
子にとつて人生とはを考える
浮ばない思考回路が破壊され

横浜市 菊地 政勝

無試験で得したような喜寿迎え
隠し事持った夫婦がひとつ屋根
あの女の可愛いくしゃみ見てしまひ
魔の影があると思えぬ白い山
留守録にトーンを落とすべらんめえ

富山市 島 ひかる

南天のモズの速賢はやとともに活け
ひと枝の香り老梅外は雪
宝石箱の小さな石にある想ひ
オレオレの詐欺に騙されてる不思議
負の連鎖おもいがめぐる午前二時

可児市 板山 まみ子

お屠蘇さえ飲めぬ下戸には甘い物

二日にはもうあきて来た祝い箸

おせちより普段のものが喜ばれ

元旦に日の丸揚げる家見つけ

門松の姿見かけぬ新興地

犬山市 関本 かつ子

元日の雪に日の丸赤が映え

数の子もあるスーパ一の福袋

子等を待つ幸せくれるお正月

七草も小豆の粥も碗二つ

小銭入れ満タンにして初詣で

京都市 清水 英旺

寒ざむと善意待ってる社会鍋

歌合戦一度お休みしてみたら

除夜の鐘あすもいつものあすだろう

幸せそう家族写真の年賀状

名案は貧乏ゆすりから浮かぶ

京都市 高島 啓子

栽培自然薯努力の跡がない

えらそうに言わせてあげているのです

掛け軸は読めず鹿威しが響く

クリームパンほど甘くない民意

月光を集めて銀色の線路

京都市 榎本 宏子

気がつけばタンス預金は酒に化け

しかしお邪魔捨てるの惜しいお茶道具

偉大な人を支えたもつとすごい妻

出世に夢せつせと自社の株をかう

うれしいなア空にいつぱいの洗濯もん

京都市 藤井 文代

頬に風だけで覚えた春の声

振り向けば反省ばかり積んでいる

今日も元氣日々更新とまずお酒

日に一善食事作れて丸にする

横文字と新語ばかりの辞書さがす

長岡京市 山田 葉子

復活のユズルに心驚づかみ

まっすぐに目を見て話すのが素敵

集まるとあだ名の方が先に出る

仲間だけに通じる言葉今もなお

鍋おでん粕汁そしてまた鍋に

八幡市 今井 万紗子

遺言に仲良くせよとだけ書こう

児童公園ヤギとおしゃべりして帰る

独りではないとブランコひとり漕ぐ

もう一度妻宛に書くラブレター

イクメンも公園デビュー ベビーカー

大阪市 池上清治

大阪市 榎本舞夢

卒寿翁希望溢れる富士賀状

恐るおそる再婚したと年賀状

教え子の賀状 子供の元氣満ち

えべっさん希望したほど福は来ず

百歳まで生きて行こうと賀状来る

大阪市 井丸昌紀

缶ビール一杯ほどで癒える傷

ベクトルはいつでももちよつとずらしとく

窓越しの日差しは春の色だけで

三が日作句さぼって二キロ肥え

この別れきつと再放送なんだ

大阪市 江島谷勝弘

温暖化ヒト科はなにをなすべきか

出しゃばらずはしゃぐことなく自惚れず

につこりと笑っているが淋しがり

もこみちのようにになりたい次の世は

足腰がマンション希望移り住む

大阪市 榎本日の出

モンローを好きな男が多過ぎる

愛プラス我慢がまんて長つづき

日の出より日の入りが好き会いに行く

スマホ見せしばらくこれで遊んでと

母の居る間けんかはお預けよ

八十路過ぎ思わぬ風邪のお正月

朝起きて調子良ければ出かけてる

羊のよう丸くゆつくり日を送る

孫達の成人式も無事終る

春の陽は木木も多感になって来た

大阪市 大川桃花

荒れた手に家族支えた自負がある

助手席の母は居眠りなどしない

カルチャーでリフレッシュする錆びた脳

三が日終わり始まる医者通い

気持よく好意受け取るのも礼儀

大阪市 奥村五月

後一人ブザー勝負のエレベーター

背縮みまだまだ伸びる爪と髪

世話ばかりかけて長生きしています

残高と残る命が合いかねる

迷うなよ良い道選べ交差点

大阪市 笠嶋惠美

あたご梨がきつかけられて実家行く

友の絵の藤の見事に蜂が来る

まさかの時話しておこう息子来る

納得の答え出ましたそれなりに

五十年修業終了一周忌

大阪市 熊代 菜月

米寿まで後三年の指おどり
今も目に箱根の山と君のこと
同級生喪中ハガキでやって来る
友の数みんな私の歴史です
節分の鬼も仲間の老人会

大阪市 古今堂 蕉子

レジ横でついでに買わずガム電池
値上げラッシュ輸入に頼る世相見せ
ストレスに尻尾巻かせる人と居る
今日もまた精一杯の日が暮れる
根気良くほどこか切るか思案する

大阪市 小谷 集一

日向はこ働き蜂の四コマ目
虎の子のへそくり僕の常備薬
お湯割ですぐ柔らかくなる右脳
蹠いた位置で再起の種を蒔く
生きている今をしっかりと光らせる

大阪市 近藤 正

ブレもせず九十余年党が伸び
裏話ばかり出て来る都構想
芯のある人は仲間を支えられ
火に油イスラム国が手に負えぬ
沖縄の心の襷を甘く読み

大阪市 坂 裕之

聞き役に徹して今日も穏やかに
半歩引く心配りはあるつもり
雑草の中に真つ赤な実がなった
酷評をする本当の友が居る
真冬でも真つ赤な苺並ぶ店

大阪市 佐藤 忠昭

好天氣琵琶湖見下ろす伊吹山
盆梅展近江長浜雪の中
黒壁の古い町並みガラス館
名物のふな寿司食べるも僕苦手
呑み助は梅の花よりワンカップ

大阪市 田浦 實

遺品整理やつとこ終えて父を知る
食バランス孫に教えるバイキング
混んできたら常連そつと席譲る
手の平に吸い込まれそう盧舎那仏
息子一家近所に住まう安堵感

大阪市 津村 志華子

明日は明日何とかなるさところてん
陽だまりで一息つく押し車
鍵穴はちゃんとモラルを弁える
インフルエンザ一週間の閉じこもり
散りぎわの未練は見せぬ紅つばき

大阪市 津 守 なぎさ

リムジンの送迎嬉し花の宿
夜の海幻想的な三ヶ日
車窓から田園風景見る至福
カップルが目立つ新春伊勢詣で
妹に甘えて旅行つつがなし

大阪市 寺 井 弘 子

大阪城出番待つてる梅桜
友好の輪大きくしてるおもてなし
盛りつけた器をほめている料理
クラス会ダイヤの指輪自慢顔
ありのままわたしの色に染め上げる

大阪市 栃 尾 奏 子

泣き顔も笑顔も君にあずけ春
春を待つ横顔羽化を匂わせて
忘れた人あり春の大掃除
立ちこぎのブランコ天に届くまで
女子力を試しに春がやって来る

大阪市 原 田 すみ子

強がったポーズで守る弱い自我
一年づつ老いが体に馴染んでく
絶好調何が来たって受けて立つ
わたしならさざんかのように散るだろう
寂しさを包めば風がもれてくる

大阪市 板 東 倫 子

新春を迎えて過去は悔やまない
ふる里は大雪と聞く初日かな
神妙に七草粥を祝う顔
増えるのは老人ばかりと言われても
地獄もう満員ですと言う閻魔

大阪市 平 嶋 美智子

地平線あの上あたり我が余生
地平線の先へ九条とどけたい
挑まれて応える気力湧く八十路
膝に良い貧乏揺すり日課です
所在ない時は無心にぬり絵する

大阪市 伏 見 雅 明

手のひらに悪玉のせてぐいと呑む
周到さたった一語で崩れ去り
お互いを仲間と思ひ愚痴こぼす
そのうちに花咲かせると言う卒寿
あと五分いまだ答案白いまま

大阪市 升 成 好

八十路まで歩いた脚だありがとう
泥染めの泥と思えぬ上品さ
濃淡で色まで見せる水墨画
花なんか買わない人にバラ貰う
ガイド図に真の穴場は書いてない

大阪市 松尾 柳右子

堺市 奥 時雄

若者に負けられないとウオークに

二人しておかず作るの楽しいな

お買物天気予報が気にかかる

街中を歩いた後のさわやかさ

ドリンクを飲んで若さを保つて

大阪市 山崎 君子

新しい掃除機ひとり忙しく

野球放送昔の選手懐しく

田舎より餅とかまほこ感謝して

駅伝も終り淋しい日曜日

お正月すめば忙し女衆

大阪市 山本 加お里

鍋の中つつきあつての仲直り

ハイという返事は良いが聞いてない

久しぶり友を誘つて香を焚く

終活を計報続いて開始する

いつの日か招かれて逝く弥陀浄土

大阪市 吉内 タカ子

暖かい未始めの老意欲

戴いた賀状のハイト恋萌える

ストレスを溶かすカラオケ胸軽い

河豚刺しを満腹できた嫁の腕

子と孫と乾杯交わす宝膳

日の丸の赤さは血の色に非ず

もう遠い日のこと赤いチャンチャンコ

方言になる故郷との長電話

大阪弁控える里の酒の席

佗しさが増す左遷地の国ことば

堺市 柿花 和夫

人偏に夢は儂いことと知る

平成はもはや井戸堀死語となる

終活で修正つぎはぎの自分史

電飾の街に北辰たじろがず

わたくしの昭和を連れてスター逝く

堺市 加島 由一

現実の我を見つめる風呂上がり

同居せぬ亡母の気持ちちがわかり出す

散歩だとメモを残して立ち飲み屋

お帰りと言われ入院三回目

禍も福も人並みでよい年男

堺市 源田 八千代

たらふく食べてゲームトランプカルタ取り

祝事に出席が嵩む年始め

交替で祖父ちゃん見舞う三ヶ日

古民家の風情そのままのリフォーム

孫息子お洒落に時間掛け過ぎる

堺市 齋藤 さくら

手作りの御節を誉めてくれる婿
現役の主婦だ弱音など吐かぬ
孫二十歳なるまで竹を踏む覚悟
暖冬はあくまで予報だった筈
二人きり円安ピンとして来ない

堺市 澤井 敏治

年頭に願う十年後のまつり
本当の顔が鏡で睨んでる
鳥獣戯画人に道説くファンタジー
藤村にしびれた遠き日の夜明け
慣れてきて老人会に顔なじみ

堺市 遠山 唯教

人間が古くて義理が欠かせない
かわいがり過ぎると骨が脆くなる
推薦で入試ひと足はやい春
老人が自慢をしたい骨密度
いさぎよく延命を断ち友が近く

堺市 内藤 憲彦

ニコニコと飽きずあせらず生きて行く
お正月笑顔で揃う三世代
定年後真っ赤なシャツで闊歩する
八起き目も御天道様を信じてる
汚染水喉元過ぎて再稼動

堺市 宮本 かりん

土壇場で踏ん張っている老いの足
しあわせな気分貰ったいい笑顔
楽しかったと星のきらめく帰り道
感じない振りをしているすまし顔
ゆっくりと雲が千変万化する

堺市 矢倉 五月

よう来たどハグまたおいでやと涙
B面も見せて湯割の芋焼酎
札の向き揃えて和菓子屋で払う
桜咲く頃にはギブスはずそうね
割り勘に男女差別をありがとう

池田市 栗田 久子

二十年過ぎ残響の震度七
始まりはためらいのない一である
感慨の深い区切りとして傘寿
一瞬の閃きわたしには宝
冬には冬とはいえ春を待ち望む

和泉市 横山 捷也

先送りしたツケ重くのしかかる
でこぼこの道です私の老いの道
度を一ツ上げた眼鏡を買ってくる
未練なく落ちる椿の強い意志
ひとこともしゃべらぬ日あり一人住む

茨木市 島田 誠一

等級をつけて介護の情を買う
金持ちで才色兼備好かんタコ
ともかくも元氣夫婦で祝う屠蘇
バツカスの赤い灯が呼ぶ駅の裏
栄光の昔語らぬ笑い皺

大阪狭山市 矢野 梓

添え書きの所先読む年賀状
注意して小さめを選ぶ雑煮餅
行く先は脳がよろこぶ方にする
ご近所のニュース途切れる冬籠り
国訛混ぜると丸くなる会話

交野市 森本 弘風

トソ祝う今日は特別休肝日
新成人一・一七を知らぬまま
この初夏に曾祖父になる予定
宗教が戦っているパリの街
風刺画も命をかける三色旗

河内長野市 植村 喜代

年々淋しくなるわねお正月
今この下が見えたら立っていけないよ
その内に忘れてしまう年が来る
悪い人が増えて神様知らんぶり
歩くってこんなに大変だったんだ

河内長野市 梶原 弘光

顔のシワ修羅場を踏んだ証明書
観賞用メダカもこちら眺めてる
雌伏期にページ割いてる立志伝
実直であるがフランクとは言えぬ
祝い膳囲み三代Vサイン

河内長野市 木見谷 孝代

絵に添える言葉飾らぬ方がいい
元氣ならいいと条件緩ませる
ネガティブに我慢するのは意に沿わず
微調整しながら描く明日の夢
吉凶を良きに解釈するみくじ

河内長野市 黒岩 靖博

やりくりの上手な妻で今の幸
三ツ星より馴れ親んだ妻の味
キャビアより焼き松茸に酒さかな
今年から腹八分目守りたい
異国から綱に挑んで一文字

河内長野市 坂上 淳司

熊除けの鈴がいりそうニュータウン
ニュータウンとうとう無人駅となる
ブランコが錆びたままですニュータウン
売り家の旗が取れないニュータウン
リハビリの車ずらりとニュータウン

河内長野市 谷 久美子

孫達の口に合わない節料理
窓を拭く心の曇り取れるまで
初詣で早めに済ませ寝正月
今年から無駄骨おらず無理をせず
過ぎ去った年に感謝の墓参り

河内長野市 辻 村 ヒ ロ

風邪こじれ夫が料理うまくなり
見た目では溝の深さは計れない
階段でお手をどうぞと言う手摺り
病知らず妻の食事に守られて
胃袋はすっかり妻の色になる

河内長野市 松 岡 篤

地蔵さん頭の雪で背が伸びて
便利さを金で買うから赤字出る
どん底の時代の友は今も友
頼らぬと言いつつ電話三度五度
三代目社長の椅子が大き過ぎ

河内長野市 村 上 直 樹

大企業は減税俺たち増税
妻の指示仰いで今日が動き出す
太い声ニキビ見上げる孫の背
クリームパスタちよっとお洒落に男めし
どんぐりころころ明日の暮らしは風まかせ

河内長野市 山 室 光 弘

子羊が迷ったままで古希むかえ
年輪の絵柄浮き出るいい夫婦
猫に鈴付けたと酔えば武勇伝
添いとげてやはり貴方は世界一
パソコンの賀状に添えて書く一句

岸和田市 雪 本 珠子

叶うなら生前葬をしときたい
雑然とした人生も味がある
今日も無事癌と一緒に生きている
幸運の女神我が家の庭にいた
赤のれん本音で友と語り合う

四條畷市 吉 岡 修

玉砂利にやすらぐ僕は日本人
花ことば花は知ってるのだろうか
坂に住む出るも帰るもひとしごと
ご利益ははるか百段越えてから
旅三日朝湯朝酒癖になる

吹田市 太 田 昭

物分かりいい男など止めにする
一言も言えないままの物別れ
愛犬が人の善し悪し嗅ぎ分ける
マンネリに無駄な力を入れ過ぎる
割り勘と言えば欠席多くなり

吹田市 大谷 篤子

冷蔵庫いつもビールがぎっしりと

呑気な姉妹三人揃ったお正月

長老の三人飲み屋で揃い踏み

向き合ってお茶をしても充されぬ

笑顔を見て何も言わない好きな人

吹田市 須磨 活恵

北風に負けてたまるか八十路入り

欲少し持って明日を生きんとや

空き家です向う三軒両どなり

ふるさとの海鳴りを聞く雪日より

お茶わんも湯呑みもひとつ殺風景

吹田市 野下 之男

日本の元気を見せたノーベル賞

小さくとも一家のあるじが良いらしい

言う事をきかぬ体をどうしよう

ちびっ子の大歓声に明日を見る

電話口取り仕切ります孫の声

吹田市 山本 希久子

世代の差見せて正月孫が来る

円熟に遠く作句へかたつむり

冬の耳寒いニユースを寒く聞く

笑わなくなった若さを失った

和と洋のはざまでオムレッツを極め

高石市 浅野 房子

ひとり者盆正月は苦手なり

三が日テレビ漬けでは疲れます

身内とて味方ばかりと限らない

日脚のびそろそろ春が来る予感

今年こそ笑って過したいわたし

高槻市 井上 照子

謙虚さも過ぎれば厭味湧いてくる

ライバルを嫉んだことも実はある

若者の奇抜な着衣勇氣要る

シニア会今日は元気とよく喋る

懐旧の思いに耽ける除夜の鐘

高槻市 指宿 千枝子

大吉のみくじに元気あふれ出る

うごめいて私も虫も春を待つ

しゃんとして答えはいつも傘寿です

愚痴こぼすと少し和らぐ寒さかな

今出来ることを大事にしています

高槻市 片山 かずお

夫婦仲妻の比重が増えている

何があってもこれからだよと前を向く

男は知らぬ嫁と姑の車間距離

あと一口にためらいがでるダイエット

後期の顔で忘れましたが許される

高槻市 島田 千鶴子

高槻市 富田 美義

立春と聞いて寒がり背伸びする

再会を願う賀状も十年目

現役の主婦でエプロンはずせない

春の陽にかこまれとろり猫になる

バスだけが頼りなんですニュータウン

高槻市 初代 正彦

もう少し待ってみるかと花時計

遠来の友を待ってる吊し柿

夜明け音今日もやるぞと深呼吸

失敗を糧に築いた金字塔

手作りの料理に孫の舌鼓

高槻市 杉本 義昭

手鏡で紅のバランス確かめる

舟歌の流れるたびにキユンとする

はじらいがあつて裸になれませんか

別れたくなんかないんだどの花も

日記帳つけて新年引締める

高槻市 左右田 泰雄

やわらかい心で支え合う暮らし

前向きの自信に満ちた腕の冴え

無理をせずそつと流れに身を任かす

うす笑い浮べて振り返る無口

止めとこか跳ばか思案の水溜り

脇道が好きで神さま見失う

就活で学んだ一ツ尊厳死

52円で母のお小言天こ盛り

地方紙に包まれ届く郷の味

五欲枯れスマホ相手に今を生き

高槻市 富田 保子

財産がないから続く夫婦仲

ヘソクリを出してバランス年金者

初孫に太鼓叩こか笛吹こか

腰痛の話を出して盛り上げる

診察券積んで田舎も無料バス

高槻市 原 洋志

生き下手の道にあちこち赤信号

階段の裏側見られ嘘がばれ

結果論ロングシュートは美しい

気がつけばストックみんな期限切れ

土壇場になるとくしゃみが止まらない

高槻市 安田 忠子

今あるを嬉しく思う初日の出

新雪で祝ってくれたひつじ達

幸せだなー新年迎え天仰ぐ

孫の字の大小まじり来る賀状

陶芸家に貰った器映える棚

豊中市 池田 純子

紡ぐ糸今年はどんな色になる
飾り梅のせてお節の出来上がり
型ぬきの飛行機入れて孫の腕
守護神となつて母さん七回忌
思い出を抱きしめさらば資源ゴミ

豊中市 江見 見清

終着駅へ赤信号で停まつてる
夜が明けた今日へ大きく息を吸う
終活をはじめて蒐集を止める
愚痴ひとつ吐いて見上げる空の青
艶話で友を愚んだ通夜帰り

豊中市 藤井 則彦

フリーターキングなのに好きには喋れない
べた褒めに心の隙がふと緩む
IT化時代に墨を擦る夜長
暇なほど無念無想と程遠い
昨日は昨日明日は楽しく生きてやる

豊中市 松尾 美智代

まつさらな朝に風花舞うロマン
お正月の支度去年の日記見る
生き方以後悔はない落椿
夫から誉められた事何もない
花壇にはもう春の絵が出来ている

豊中市 松村 里江

はじめまして曾孫の写真抱きしめる
太陽を味方に主婦の腕まくり
どちらにも味方の顔で話聞く
痛み分け握手をさせるいい仲間
仕舞風呂とろり私の小宇宙

豊中市 水野 黒兎

紅白のモチふつくらと春祝う
十年日記未来へ今日が始発駅
人生の節目節目に妻の知恵
ふる里はむかしむかしのとろろ汁
喜寿傘寿若やぐ呼名やがて春

富田林市 片岡 智恵子

野を活けて茶室優美な床柱
パーティー券という政治家の無心
振り向かず残して行つたい返事
大吉と出たおみくじがちと怖い
時々便利どちらも生きている

富田林市 関 よしみ

命名の文字が喜ぶ墨の香よ
あきらめぬ形に土踏まず鍛え
絵本からするする貰う子の寝息
口紅が濃い目が良いと孫が言う
人間のレール走って出る答

富田林市 中井アキ

故郷を飾る錦が未だ織れぬ

責任をとって大きな河になる

優しさが重荷になってきたピアス

いよいよに備え笑顔を磨いてる

祝い酒多弁になってゆく絆

富田林市 中村恵

明日向きの窓を大きく開け放つ

ずっしりと重い命を抱いている

転寝の天使は翼折れている

北風も時には見せる温い笑み

幸せを声には出さず祈る人

富田林市 肥山一文

輪の中に入ればみんな好きになる

酒二合やはり老いたとおもひ知る

小遣いの追加請求拒否される

とりあえず試してからで遅くない

相手思いやさしい嘘もついてみる

寝屋川市 籠島恵子

逢いたいと言ってくださる人がいる

言うだけは言った悔いなどするものか

決心ができているのに引くみくじ

久しぶり波瀾万丈聞く電話

風のたよりもうザワザワもしなくなる

寝屋川市 富山ルイ子

おだやかに自分の心声に出す

生の自分ストレートに出している

夢を抱く未来まだまだ生きられる

思う事数多くあり元気です

豪雪に被災地思い胸痛む

寝屋川市 平松かすみ

下鴨の蹴鞠り見に行く列にいる

じいちゃんに差し入れますすひなあられ

微熱ある証郵便座が冷たいよ

心配が程よくあつて生きる価値

ハイハイと受けてバトンが渡せない

寝屋川市 森田麗

はやぶさ2の土産と五輪待つ余生

雑煮材料ネットで仕入れ里の味

二十年亡夫の友から年賀状

亡夫の恩師卒寿になると賀状くる

挑戦状の如一年の計を書く

羽曳野市 安芸田泰子

欲一ぱいあつても金は貯まらない

古里で私の過去が風化する

はぐれ雲いつかは帰る古里へ

探しもの思いもかけぬ物に会う

お若いのおだてに乗った後遺症

羽曳野市 宇都宮 ちづる

米一斗土産にもらう里帰り
世界平和を祈っています初詣で
古稀を機に賀状止めると二枚来る
えべっさん参り今年を始動する
年頭の志気は二月に消えている

羽曳野市 徳山 みつこ

飾りの稲穂は雀の祝い膳
初みくじ大吉孫がとび上がる
皆居るが足りぬ夫の祝い箸
未の次男優しさは文句なし
今が一番新鮮ですわたし

羽曳野市 永田 章司

一強の道普通った道に似る
骨粗鬆長寿社会の流行病
太っ腹見せて見栄張るクラス会
夜の街虎を減らした不況風
絵馬堂にぎつしり詰まる親のエゴ

羽曳野市 藤原 大子

変わらない景色の中で安堵する
同じ言葉許せない日と許せる日
身の用心甘い言葉と甘い菓子
レットルを貼れば世間の狭くなり
新聞に退屈な日を守りされる

羽曳野市 三好 専平

旧姓にもどり五人の子を育て
差別やとそつと脅しをかけられる
マスコミが足ひっぱり合つてどないする
泥の河澄んでチャペルの鐘凍る
当選のためなら金も主義も捨て

羽曳野市 吉村 久仁雄

ちよつと鬼ちよつと仏で花咲かず
母というリングネームを持ち続け
おやじギャグ滑って転んで場がなごむ
入れ替えて適材適所妻と僕
弱点を指摘し合つて友でいる

東大阪市 北村 賢子

ピカピカにこころの鏡磨く春
地球の目覚め鳥も一氣に羽ばたいて
被災地に日の丸のごと錦鯉
沢山の印にんまりカレンダー
まだ明日へ羽ばたくつもり老いの羽根

東大阪市 佐々木 満作

新年の首途を祝う呱呱の声
飽食に溺れ戦後を忘れ勝ち
マッサンの一徹胸のすく心地
悩むよりチャレンジするという気骨
義兄逝き相談相手見失う

枚方市 海老池

洋

不戦の思新たに戦後七十年
うきうきと春のノックを待つ蕾
糸切った風よその後も幸せか
寂しさと気楽さ同居する独居
夜がきてほっとする時寂しい時

枚方市 小林わこ

これから夢見るクスリくださいな
これからというとき母がいらないのよ
これからが大事これからはじめるの
これからのことはとにかく秘密です
あなたが側にいると思えば気が強い

枚方市 伊達郁夫

故郷の川に洗いに行く挫折
恋と言う罪な言葉に酔っている
知恵の輪が解けて迷路に迷い込む
隙間風すこしずらしてミカン剥く
湯豆腐をつつくと冬が笑い出す

枚方市 丹後屋

肇

濁流下あの錦鯉気にかかる
耳に痛い亡母の饒舌な遺産
反面教師ブレーキかける賭け勝負
老々介護無性にむかつ腹が立つ
白い杖信頼してる介助犬

枚方市 寺川弘一

嬉しい時も悲しい時も涙で飾る
井戸端はニュースに磨きかけるとこ
夫婦愛傷つけあって癒やしあう
家族葬我が家で咲いた菊飾る
青空をすけすけにする罎雲

枚方市 二宮山久

手枕の孫と添寝の五七五
寝正月特急列車のように過ぎ
初春へ決意新たにペアシユーズ
七十路元気で励む趣味に燃え
門松の風情消えゆくお正月

枚方市 二宮紫鳳

孫達の笑顔が揃うお年玉
孫婦り疲れねぎらう夫婦酒
墨の香に春を運んで筆美人
あら玉の年を清める雪化粧
里帰り羽繕いして翔び立つ子

枚方市 藤村亜成

食べ過ぎた知識消化できなくて
まだ僕を照らしてくれている陽射し
しがらみを断てずに動く足である
一難去ってゆつくり傘を折りたたむ
生前死後を考える古希となり

家族みな御神酒で祝うひつじ年
年賀状届いた朝はひつじ年
伊藤 アヤ子

気合を入れ滝に打たれるひつじ年
川柳とカラオケオタクひつじ年
富士山のダイヤモンドのひつじ年

藤井寺市 太田 扶美代

デジタルにとり囲まれている不安
さざんかの垣根はいつも騒がしい
鉢植えを並べて冬眠のかたち
玉子焼好きなまふまで古稀半ば
急がねば何故か淋しいのも余生

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

寒さから逃れる駅で待ち合わせ
いそいと春の電池を買いにゆく
粹な死を本気で思うこともある
日差しやわらか水仙白い灯をともす
熱いタオルを絞って試みる脱皮

藤井寺市 鈴木 いさお

彩競う吉野の春と京の秋
餌をとる術を教えて野に放つ
ファの音の響きはどこか母に似て
ライバルに悔し涙の借りがあ
どちらも自分笑い上戸と泣き上戸

ショーウインダーの前諦めているわたし
草臥れた時計が五分遅れてる
高田 美代子

寂しいふたりだまって珈琲飲んでいる
雨予報聞いている新しい傘と
ピンと晴れて野良に赤ペラが響く

藤井寺市 増井 ヨシ枝

ろう梅の香りに遠き人想う
退院へとなりの猫もお帰りと
エレベーター隅に素敵な椅子ひとつ
落ちこんだ私へ美しい夕日
墓守る人もいなくて樹木葬

藤井寺市 吉田 喜代子

年波か何故か紅白喧しい
気楽ですだあれも来ない三箇日
炬燵抱き共に走っているつもり
おしゃべりで笑顔になれる人に会う
宮尾逝く心が折れる音がする(没 登美子)

藤井寺市 若松 雅枝

携帯に指図されたら飛んで行く
初孫のネクタイ姿惚れ惚れと
不肖の子家業を継いで華となる
風雪に耐えて開花の梅が好き
母の年我が未熟さを思い知る

松原市 森 松 まつお

期待ほど術後の酒は旨くない
少し痩せほんに寒さに弱くなる

無慈悲にもビールはダメと医者笑う

回復の為に毎日飲む練習

寒風の散歩ひたすら下向いて

箕面市 出 口 セツ子

初詣の時だけ雪が避けてくれ

アベノミクス恩恵私には無縁

一番札大吉という運強さ

わたくしの証明カラー出して生き

百様の人生だから面白い

箕面市 酒 井 紀 華

白い紙ペン一本で句が走る

千代紙に包むお菓子に母忍ぶ

公園で恋した時間セピア色

公園でロダンになって動かない

公園のベンチは過去を語らない

箕面市 広 島 巴 子

あんこ餅大きく丸め母思う

注連縄の稲穂に雀初詣

お年玉孫に渡して子に貰う

冬ごもり回覧板でごあいさつ

日向はこ干支の形の雲を追う

守口市 井 上 桂 作

としよりも論語を学び仁に生き

また一つ歳をとるだけお正月

クリスマス飾り見るだけさようなら

冬至には嫌いな南瓜よく食べる

師走いり朝の寒さも身にしみる

八尾市 内 海 幸 生

酷寒の山茶花の白目が点に

言い訳をして済みません仏様

真似したら善人さまになれるかも

暴騰をしたから暴落しただけよ

海鳴りへ満身創痍の雄叫びを

八尾市 高 杉 千 歩

梅香の人間大好き聴き上手

敗戦七十年進化ほどほどに

浮かれ過ぎテロは他人ごとじゃない

垣根ないあけくれ温い風ばかり

大阪都儲かりそうに思えない

八尾市 寺 川 はじむ

算数の苦手孫には伏せてある

STAPのナゾと去りゆく割烹着

軽い気で約束してからの大事

自信の顔で改憲するという怖さ

元旦とダブルで祝う誕生日

八尾市 宮崎 シマ子

嬉しい日鏡の顔に艶がある
煙草匂う坊主枕は亡父のもの
昨日のこと水に流しているスマホ
母の手料理野菜屑とは思えない
歌舞伎座へ着物に迷う二三日

八尾市 山根 妙子

先立ちし人皆恋し除夜ひとり
祝箸稚児の袋に匙も添え
鷹治郎親子で恋の春舞台
寒梅が脹らんでいる朝の庭
カスタード美味しいとこがぼとり落ち

大阪府 桑田 ゆきの

おみくじを結ぶ梢も恵方向き
迷い猫居付き我が家の今年運
寒波来て暗い世相に鞭を打つ
笑い袋弾けて一家悲無し
編物で脳活してゐる知恵袋

大阪府 野田 栄呼

親切を貰いっぱなしにできません
晩節を汚さず生きること願う
ナツメロの様に昨日が出て来ない
ひと言をおさえて平和三世代
賞味期限など気にしない味で見る

大阪府 初山 隆盛

神よりも仏が近くおわします
春風に向って歩く老いの幸
指折りの夢に老眼鏡磨く
BSで世界漫遊しています
梅干しがすっかり甘くなりました

大阪府 米澤 俣子

マンネリの雑煮で明けたお正月
影法師今年はどんな色になる
しあわせな自分サイズにする暮らし
無駄口を叩き本心伝わらず
ロボットに頼む介護はついそこに

神戸市 井上 じろう

酔ったふりしながら見てる品定め
日なた背に二十歳のノート読みふける
目に見えぬその優しさにはだされて
手術中黙し語らず祈るのみ
息抜きもいいかげんにと声がとぶ

神戸市 白川 淑子

ひつじ雲ふんわりまるくひらがなで
貧と鈍のらりくらりと豆の数
煌煌と電飾の街人を恋う
存らえばこの世は楽しおでん鍋
足元を照らす燭台一行詩

神戸市 能勢利子

神戸市 山崎武彦

波の音聞くといつの間に寝てる

夜明け前人恋しいと汽笛鳴る

御祝にもらったものは捨てられない

インフルエンザ流行したら投句です

シュークリーム出され困った見合い席

神戸市 福原悦子

どれほどの責めにも愛は裁けない

三つ指に日本がある白い足袋

恋と愛違いを酒が語り出す

藍染めへ亡母が残した数え唄

迷い捨て今日の絵を描いている

神戸市 松井文香

補助輪が外れ覚悟の独り立ち

楽隠居十年待てと娘が諭す

人生ゲームジョーカー上手く使いたい

満ち足りて幸せなのになぜ孤独

悲しみを乗り越えた時見る樹氷

神戸市 山口美穂

震災の傷癒えぬまま二十年

亡父母へ傘寿感謝の掌を合わす

冬の雲六甲山から下りてくる

旧友の訃報がつづく寒なかば

手袋の片方柵へ掛けておく

はっとする記事にスマホの指止まる
反省のかたちでロダン像みてる
半熟のままで後期に迎えられ
命綱夫に託す海女の笛
児に還る母を叱って詫びている

神戸市 山田婦美子

目が覚めて生命の尊さ思う日々

花に触れ土に触れると丸くなる

短命の家系に上寿の姑が居る

柚の香にふっと亡母を偲ぶ夜

胸中を見透かされそな寒の水

明石市 梶谷和郎

温度差を感じるうちはまだ夫婦

健康へカーは真つ平チャリにする

反省が過ぎて寝れない昼の月

ふわふわの綿毛に託す子の未来

逆光にめげぬ立つ位置変えてみる

芦屋市 黒田能子

ゆつくりと過ぎる独りの砂時計

すつきりとしすぎた部屋も落着かぬ

ぬけぬけと生きるのもよしマイペース

歳相応の健康体というカルテ

地図にない道へ少年行きたがる

芦屋市 竹山 千賀子

三箇日はずしじく初詣で
スランプをやつと抜け出て青い空
おみくじに不要な運が多くなる
病む人にパワーもらった帰り道
ちよつとだけ酔うと可愛い女になる

尼崎市 市坪 武臣

大掃除済ませ安堵の一人鍋
ルミナリエー・一七は忘れない
覇氣がない君はビタミン不足だよ
キャンセルをしつこく待つて粘り勝ち
術後五年捨てるに惜しい千羽鶴

尼崎市 加川 靖鬼

着地点探つてゐるから翔び立てぬ
授かつた命にもらう母の椅子
何べんも的是らずされて生かされる
ブランドーの紅茶に溶けた胸の棘
ゆつくりと眉を削つていく月夜

尼崎市 春城 年代

寒仕込み蔵の窓から洩れてくる
指折つて老いも待つてゐるお正月
むかしの風にふとすれ違ふ河原町
わが体温で癒されている朝の闇
エンディングノートころつと忘れ生きている

尼崎市 藤井 宏造

捜索隊はノーベル賞に値する
お坊さんの艶がよすぎるのもどうか
淋しがり一人はしゃいでまわつて
それからを知らないままのシャボン玉
負けるかい冬は毎年やつてくる

尼崎市 藤岡 りこ

二人三脚足半分がむずがゆい
薬飲むため食欲ないがする食事
予防注射ピークになつて慌てだす
嫌だつた亡母の生薬懐かしい
年越しにラーメンもありうどんあり

尼崎市 山田 耕治

スーツ一着戦力外を言いわたす
コンビニの明かり変わらぬお正月
年内と言う約束が残つてゐる
ぬるま湯に溺れSOSを打つ
誰からの電話かわかる今日の勘

加西市 金川 宣子

祝い金見合う分だけ飲んで食ひ
人恋し風邪でダウンの寝正月
満足げ達成感の玉の汗
メタボ腹着れない服が欠伸する
あれこれと知つたかぶりの耳年増

川西市 西内朋月

篠山市 酒井健二

大切にしているへその緒入れた箱

酒の味覚えてからの不幸せ

芋ばかり喰つてた頃の芋を喰い

茹で過ぎた玉子のような友がいる

ストレスを溜めぬ程度に飲んでいる

川西市 山口不動

あした書く礼状リスト書いて寝る

二人とも低体温のクリスマス

正月の薬もらつて年を越す

買い溜めの出来ぬ値上げの電気代

ウール着て雪の静かなお正月

川西市 米原雪子

成人式振り袖姿母の愛

いつ迄も磨けるものは心かも

小春日を逃さず散歩友誘う

おいしい物思い浮べて朝起きる

リハビリの後の余韻でこつくりこ

篠山市 北澤稠民

図書館へ本より暖を借りに行く

終りなき学びの道を朽ちる迄

熱燗が胸のつかえをときほぐす

満足は半分だけで良しとする

私より私の事を知る鏡

生きる意味問うたりしない一人旅
生き恥もカサブタと成り風と舞う
その先は知つたかぶりで酒を注ぐ
下戸あいて五時間飲んだ過去がある
病弱な友には何故か気を許す

篠山市 酒井真由

佳い年になりそうお日さまにここに
なかなかの気迫だ君に乾杯を
ほのぼのと君が生まれた日の記憶
冬木の芽ぐつとこらえている拳
ずい分と生きたいいろいろ見えてくる

三田市 石原歳子

忙しさに作り損ねた吊し柿

正月は家族で遊ぶ七並べ

新制中学机はりんご箱でした

仏壇の上で落ち着く鏡餅

ぬくい湯気立てて私をはなさない

三田市 上垣キヨミ

再会に仮面は要らぬクラス会

百態の羊に温い年賀状

プレゼント笑顔で孫のありがとう

慈しむことが温いプレゼント

忍の字のかたち春待つ冬木立

三田市 尾崎 一子

被災地の未来を担う二十歳の目
みんなが優しいよいよおばあさん
節目の厄笑顔で受ける福えびす
初夢に会いたい人に会うて吉
ブランドに心がゆれる福袋

三田市 北野 哲男

口出さず金だけ出した子の新居
初えびす諭吉に使者を頼んどく
酒好きが近所に一人居て便利
昔しか紡げぬ母を看た五年
ゆるキャラの三頭身が勢ぞろい

三田市 福田 好文

旅の宿何時ものドラマ見て眠る
逃げ道が出来て強気の唖呵切る
どうする気とことん金を貯める老い
モノリザよりもっと分からぬ妻の笑み
故郷に帰れば昭和待っている

三田市 堀 正和

それぞれの故郷にあるおらが富士
想定外後期もちゃんと金が要る
広辞苑お飾りにした電子辞書
勝つてると長いと思うロスタイム
知らぬ間に我が故郷も無人駅

宝塚市 田中 章子

ひつじ年に期するものあり としおんな
箱根路に行く神野大地を見たか
百歳まで生きる計画たててない
お小言は素通りをする耳を持ち
母さんはサマンサ指で人使う

西宮市 秋元 てる

軸足は今も故郷の黒い土
ありふれた一生だったが悔いはない
生き抜こうコトンと逝ける日のために
居るだけで主役いいね赤ちゃんは
期待過ぎず見捨てもしない母でした

西宮市 足立 茂

貸した人と記憶が違う借りた人
ケータイがなくてもたつく待ち合わせ
忘年会やった直後の新年会
寄ってたかつて追い詰めていく喫煙者
タバコ税今年も払うつもりです

西宮市 緒方 美津子

どこからでもご覧あそばせ富士の山
バラの棘触らなければ静かなり
長女です遺産分けには鬼となる
地下足袋に寄り添う母の手弁当
ただ美しいだけですカルミナリエ

西宮市 龜岡哲子

西脇市 七反田順子

明日は晴 今日の用事は明日にする

バーゲン巡りするスタミナへ子等も居た

裏返して見れば良き人善き夫

天国の手前渋滞する気配

イルミネーション星は空から苦笑い

西宮市 西口いわゑ

酌み交わし苦手な人と握手する

二十年瓦礫が今もまなうらに

笑ったらずす気持が湧いてきた

浮世とや劇中劇と思いたし

四世代の春の宴の真ん中に

西宮市 福島弘子

御嶽山春待ち遠し雪深し

九条を守る決意を新にす

あつさりとバイバイ孫が帰ってく

ヒヨだとは気付かず育て情がわく

手探りで後期の森もつき進む

西宮市 山本義子

字足らずも字余りもまた生きる術

時刻表楽しむことがとんと減る

落語聴く今夜はうどんすするとす

いい子ぶり捨てたら肩がらあく楽

掴まえた幸せ小出しして使う

原子炉の廃止決断できますか

ゆつたりと姥捨山の下見する

創生にふるさと向いて旗を振る

階段を丁寧につく感謝して

初恋の年賀しみじみ読む羊

姫路市 古川奮水

餅つきの扱い水は任せとき

箸枕付けると不思議祝い膳

ささやかな祝におろす飯茶碗

正月の娯楽チャンネル追い回す

初鏡女房は春の紅をひく

奈良市 阿部紀子

般若から恵比寿をかぶりさあ行こう

お年玉10%のせました

お雛様娘が巣立ちお蔵入り

木蓮の香漂う卒業式

卒業式ママも新調いそいそと

奈良市 岩本浩二

大股に歩き老いから遠ざかる

終章は転ばぬように一歩ずつ

メタボと言うな太っ腹だと言ってくれ

のほほんとしては居られぬロスタイム

句作りに疲れ脳干す三が日

奈良市 加門 萌子

日本にはみんな大好き桜咲く
一年に一度さくらと命確かめる
さくら見に行く楽しみに鍛えねば
客人は好きだがどっと来る疲れ
年毎に流行る病気がおそろしい

奈良市 辻内 げんえい

LED青い地球を輝かす
天変地異人知到底敵わない
テロエボラ海外旅行命がけ
奈良公園鹿より多いアジア人
ライバルを仕立て夫の尻叩く

奈良市 天正 千梢

迷える子羊迷いすぎ
両脇にカイロを張って御満悦
分量は半分値段はそのまま
鎮守の祭り町も村も大騒ぎ
本気で考えてもいたずらの様に見える

奈良市 米田 恭昌

角帽のフクちゃん駆けていた昭和
逆転の勝名乗りよぶ徳俵
三角関係今は仲良しトリオです
駄馬なりに完走をした父の自負
少子化にせめてもの玉まだ磨く

生駒市 飛永 ふりこ

葉牡丹と私のコラボで春を呼ぶ
バスディーセつかくだから歳を退く
ふかふかのくつ下ハートほくほくに
麴から寝かす甘酒母をふと
ぜんざいにつられ地域のとんど焚き

香芝市 大内 朝子

達観の花も嵐も越えた顔
絶やさない笑顔はわたくしの芯だ
柳友と笑い転げるパラダイス
辛酸を嘗めた分だけ人の味
おみくじの凶が当たった覇気が湧く

大和郡山市 坊農 柳弘

知り過ぎた恋はじっくり吟味する
火傷せぬ距離で愛を抱きしめる
例えばが多くて春がうろたえる
逆らえぬ位置で豆を撒く鬼よ
針のない時計男の座標軸

奈良県 安福 和夫

胸張れば歩調も軽いテイクオフ
歩き方変えたら見えた別世界
イヤホンにしても会釈はできた筈
楽しみはカワセミを追うウォーキング
八十九はまだ青春と快気焔

奈良県 中原 比呂志

訴えは一本のペン一冊の本
不発弾抱えた土地に建つタワー
ジャンケンで負けて先頭歩かされ
年齢は語らず一〇〇まであと何年
防犯のグッズ男物を干してあり

奈良県 渡辺 富子

ウィーンフィル新しい年の幕を開け
世界目ざす息子の熱い心意気
株高と無縁の暮し鍋つつく
木枯しへすごい気合いで立つふたり
肩の力抜いて病と立ち向かう

和歌山市 岩本 美智子

塾居安静ワンルームにて泣き笑い
成人式アルバイトして行けません
西国さんへ参拝をする娘の背
入院のストレス今ももっている
転倒し今年の厄をみな落す

和歌山市 上田 紀子

一人言りんこの気持ち聞いてみる
仮縫いのままで終らせない命
赤ちゃんが笑って南天赤あかと
人間が満足すれば病む地球
生きるとは自分への問い暦繰る

和歌山市 柏原 夕胡

羊水の中で謀反を企てる
逢うてきた余韻を抱いた昼の月
公園に私を待っているベンチ
すっぴんで逢うほど女捨ててない
義理チョコの数だけ男侍らせる

和歌山市 喜田 准一

七十路坂過ぎてオマケで生きてます
狭い部屋なのに出て来ぬ探し物
重心の低い男が登る坂
花見など無理です年金減らされて
手の内は官僚次第です政治

和歌山市 楠見 章子

盃を重ねてわたし楊貴妃に
お雑煮の後のコーヒーほっとする
三世代まだ飽きのこぬ白い皿
ピザの配達いけんだからまた頼む
背筋をびんと伸ばす私の老い支度

和歌山市 坂部 紀久子

新しい破魔矢で射たい人がいる
三ヶ日過ぎて落着く胃のあたり
咳一つ自分で病気捏ち上げ
黙々と両手で拵る鯛の粗
万歳三唱アベノミクスが始動する

和歌山市 武本 碧

三代代羊が揃い当たり年
挿絵だけ残すちひろのカレンダー
前向きの眼に降るほどの選択肢
七癖の一つ一つが生きる知恵
芽が出ると信じて愛を絶やさな

和歌山市 土屋 起世子

元旦も犬が催促する散歩
独り居へ年毎増える帰省客
お年玉渡すと毬が弾みだす
習慣で七草粥炊くひとり鍋
独りゆく墓参昭和は遠くなる

和歌山市 玉置 当代

反抗をするパソコンを持て余す
ころろひとつにつながる被災地の絆
年輪のように重ねた年の功
木枯らしに春の準備をする桜
日差し伸び土の下から春の音

和歌山市 福井 菜摘

子等巣立ち新たな地図に書き替える
新しい扉を叩く好奇心
一歩引く勇気余生に灯を点す
侘び寂に浸るわたしの理想郷
父母の背に学ぶ処世の裏表

和歌山市 福本 英子

糞虫をヒントに冬を越えてゆく
継ぎ目からかすかに漏れる良い話
痩せ細る手先へ夢を膨らます
その先のことは語らぬ老いの耳
二十歳の決意そんな時代もありました

和歌山市 古久保 和子

水仙の小道登って灯台へ
梅の蕾を起こさぬように愛でる庭
本屋閉店だれも挨拶しない街
バス停が華やぐ女子校の下校
菜を洗い終えて冬日は傾きぬ

和歌山市 堀 富美子

脚立提げ子に年の瀬を助けられ
もう一年あと一年と夫の墓
元旦はゆつくり亡夫と屠蘇交わす
心地よい声ばかり聞く老いの春
初詣でまだ慾を盛るお賽銭

和歌山市 松尾 和香

子育ても分け合っている夫婦愛
我が人生過去へ流れるお正月
お正月曾孫の動きファイト湧く
嵐去り大人ばかりの静かな日
紅白の歌ついていけないわたし

岩出市 藤原 ほのか

後悔はしたくないから読み返す

後悔の記憶を刻み歩き出す

リセットがしたくて今日も腕いてる

立ち止まり前を向くため振り返る

羽ばたけばきつと勇気がわいてくる

海門市 小谷 小雪

元朝の空気両手で割っている

かぐわしい匂いに心軽い朝

会った人お手本にして飛んでみる

石段の一往復はあったかい

神さまは催促しない善と悪

海門市 堂上 泰女

立ち上がる術考えてする叱咤

子の世代母の世代にあるギャップ

飴と鞭で育てた子から飴と鞭

空気読み黙って通る道の端

終章へ神の試練がまだ続く

紀の川市 宇野 幹子

熟成をさせて我が子を野に放つ

若松を活けて熟女の帯の位置

一輪車夕やけ雲に同化する

羽ばたいて明日はきつと風になる

お雑煮もおひとりさまを自覚する

紀の川市 北山 絹子

肩書が取れて裸で暮らしてる

遊び事覚えた妻へ湧く恐怖

突走る男が風の中にいた

時は流れて姑の眠りが浅くなる

不束者だけど相手を見分けてる

田辺市 岡本 昇

古い足にハッパをかけて初歩き

ばあちゃんとカレンダーとが知恵比べ

危い橋一度は渡るのも男

国の財政家計にたとえ背が寒い

長い間一緒に暮らし愛芽生え

橋本市 石田 隆彦

大吉を信じ一年歩き出す

吸殻を数え自分の身を案じ

大雪がとうとう心にも積る

反抗の後に寡黙の悔い一つ

感謝はしてるがことばにはならぬ

(前月分) 尼崎市 加川 靖鬼

エコーには影も形もない野心

国籍など要らぬ回遊魚の自由

モグラにはモグラの道がある迷路

がんじがらめにされて修羅場の蟹の市

抜け殻も皮も大事にされる蛇

川柳塔の

川柳讃歌^⑫

木津川 計

長生きをしそつでちよつと怖くなり

金子 美千代

「平均寿命あたりでオサラバしてれば、この苦しみはなかったろうに……」と朝日の読書欄に書いた96歳の女性がいた。

二つのことを同時に出来なくなったというのだ。手持ちのお札を財布から全部出し、駅の券売機前の狭い棚に並べてカードを買った。歩き出すことに気を取られ、目の前のお札をそのままにして立ち去る。うーん。

美千代さん、「ちよつと嬉しくなる」長生きの鑑になって希望を与えてくれませんか。

ほとんどは雑用僕のスケジュール

岸本 宏章

ある日の〈首相動勢〉を新聞で見る。

〔午前〕7時24分、官邸。25分、世耕弘成官房副長官。8時23分、閣議。55分、国会。58分、参院第1委員会室で麻生太郎副総理兼財務相。9時、参院決算委員会。

〔午後〕0時1分、官邸。56分、国会。58分、参院第1委員会室で高市早苗総務相。1時、参院決算委。5時9分、官邸。35分、米国のルービン元財務長官、以下7時21分まで追う。宏章さん、こんな毎日でなくてよかったなあ。

捜すなとメモを残して立ち飲み屋

加島 由一

「人探し」は求人、「人探し」は搜索の意と誰でもわかるが「家」の区別はなるほどそういう違いかと国語辞典で知った。「家探し」は「住むべき家」をさがすのだが、「家探し」は家じゅうくまなくさがすことだと。「家じゅう」？ すると、ある「家」を町なかでさがすのは「家探し」なのか「家探し」か。

さて、右の句の人物は「捜すな」のメモを残して立ち飲みに出たのだ。すでに徘徊を疑われている。由一さんでないことを願おう。

正直は貧しさゆえの贈り物

夏目 一粋

唱歌「花咲き爺」は「正直爺さんボチを連れ」「ここ掘れワンワン」のままだと掘ると大判小判に大当たりするのである。爺さんは驚き、手にした大金を拾得物として役所に届け出た、とは歌わない。いったいどうしたのか。懐に入れても気持ちの悪い金ではないか。だから爺さんは回りの者に触れまわり、大金を

配り歩いた、という展開でもない。「花咲か爺」は後味の悪い正直者札贅断である。一粋さんの言う通り、貧乏は正直の母胎でありたい。

人間の文字で汚れてしまつ紙

居谷 真理子

「水茎の跡うるわしい」筆跡に見とれる。「麗筆をふるう」人がうらやましい。手書きの時代、習字を励ましたのは悪筆を恥じさせるためだった。そんな長い歴史がワープロで絶たれ、メールが「人間の文字」を消した。

字は書かねば覚えられない。書く力が衰え、活字の文字で紙を埋めるのは紙に對して失礼なのだ。としたら真理子さんの言う様に麗筆の「人間の文字」で紙を汚さぬようにしたい。

厳寒の朝にキリリと志

析尾 奏子

冬の詩人、高村光太郎は冬が活力の源泉だった。「冬よ／僕に來い、僕に來い／僕は冬の力、冬は僕の餌食だ」と詩「冬が來た」でうたい、「冬の奴」では「ああ、冬の奴がおれを打つ、おれの面皮をはぐ／おれの身を棄てさせる／おれを粉粉にして雪でうづめる／冬の奴は、それから立てといふ／おれは、ようしと思ふ」。奏子さんも女の光太郎である。厳寒の朝キリリとした志、えらいなあ。

〔上方芸能〕発行人

自選集

小島 蘭 幸

淋しさのひとつ正月餅を買う
引き籠ることも大事という二月
文豪の生原稿がある硝子
赤い帽子は男黒田のためにある
泣いている隣 眠っている隣

政 岡 日枝子

新年へ愉快なはなし手繰り寄せ
旧年の袋をひとつずつ結ぶ
記憶から少し外れた道に出た
ところどころの記憶を上手く外して
正義感がざした夜は寝つかれず

三 宅 保 州

あと幾つ寝ると転生なのだろう
時々陽に当てている土踏まず
欠点も長所も真面目すぎることに
誰しもが笑い袋を持っている
人の世も円周率も割り切れぬ

宮 西 弥 生

金持ちになっても変りない素顔
賢ぶる姿は見せぬ雑魚であり
靴の底減るまで残り歩き切る
鉛筆を削るほくほく湧く何か
合鍵をささやくようにして開ける

あとしばらく

八 木 千 代

少し歩いて春の隣りに触れてくる
次に播く種も名乗りを上げている
この家で平らに老いたいと思う
待たないでね あなた 血圧までたいら
あとしばらくはご飯の艶にときめこう

両 川 洋 々

活きの良い鯛を捌いた手で折り
俺の名は閻魔帳にも載ってない
汚染水流して何んの復興だ
敵も無い男じゃ味方作れまい
臓器提供したいが酒の気が抜けぬ

板 尾 岳 人

地に落ちる迄の枯葉にあるドラマ
拉致されたことを知っていたキャベツ
太陽よ真赤なドレス着て沈む
器から海に出たがっているメダカ
大声で叱るムンクの叫び声

奥田 みつ子

ハガキにも祝う心をてんこ盛り
行儀など忘れて食べる蟹の足
参加者はみんなライバルみんな友
皆あの世恋しだけが空回り
浮かばない句想思わず天仰ぐ

河井 庸 佑

弁解がしどろもどろで行き詰まる
三世帯同居で時代思わせる
当るまで止める気のない宝くじ
体調が良いと無理したのを悔やむ
デバ地下の模様変わりでうろたえる

川 上 大 輪

また明日 今日の空気は抜いておく
酔い覚めて男小さくなっている
家庭菜園嫌いな物は植えてない
やわらかい物腰だから要注意
泥棒に入られそうな門構え

小 西 雄 々

わが頭脳核分裂はさせないよ
紅バラと幸福になる日を持つか
各駅停車しながらついに定年期
返信のメールに嫌な金のこと
百までは生きるつもりで医者に行く

斉 藤 焔

魂をしつとりと抱く冬木立
地吹雪の底で醗酵する民話
不器用で直滑降しかできません
野球帽のサイズも変わる変声期
梅一輪咲かせておこう冬の部屋

新 家 完 司

プロポーズした日と同じ鱗雲
全員が座れければ座らない
旅人の目で山陰を振り返る
目の奥でまだ暖かいカマドの火
もういちど風邪を引いたら春になる

津 守 柳 伸

日の丸に振り袖映える初詣で
九条を守り続けて子に託す
初旅は傘寿姉妹の助け合い
漁火を見つめ湯宿の三ヶ日
真っ白に干して未練は持たぬ主義

遠 山 可 住

やあ生きてる生きている年賀状
戦争は四分六でなし一〇〇と0
即席の味噌汁ひとりの朝が済み
いい雨となる玉葱を植え終り
どたん場の壱万円で年を越す

都 倉 求 芽

林 瑞 枝

消灯で窓の胡蝶蘭眠らせる
運命は一蓮托生吊るし柿
ヨイドンまた新しいライバルと
積もる雪 救急車だけ突つ走る
正月の餅が三日で硬くなる

土 橋 螢

前 たもつ

天地人愛燦々と雪が舞う
蜂の巣もつばくろの巣もある我が家
零戦の操縦桿は重かった
歩けあるけとロボットに介護され
露となり北斗七星から落ちる

西 出 楓 楽

近頃は三歩進んで五歩さがる
思い出は思い出のまままだ迷路
守秘義務は心得ている二枚舌
八白土星今年の運はまつ黒け
喜寿はそこ一人芝居が上手くなる

仁 部 四 郎

帳尻で診察券がせめぎ合う
帳尻へ本代またもなだめられ
帳尻の覚悟税金天引きだ
年金の帳尻だれを恨むべき
帳尻はともかく火葬だけは頼む

小島蘭幸川柳句集『再会Ⅱ』

頒価 千円(送料共)

ご希望の方は川柳塔事務所

TEL 06-6779-3490まで

絵にしたい心のスケッチ雲に描く
蟻たちの世論に背なは向けられぬ
あったかい良い教え子に恵まれて
平和ニッポン守る大山見て生きる
笑い袋背負うて虹を見て拍手
フランスへ傾くほどの抗議デモ
朝の日課書類を探す小一時
挨拶交すだけで落ち着く人のいる
捨てるもの少し残して生かされる
人間とや天上向いて神仰ぐ

第147回 大阪川柳の会

日時 4月1日(水) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「飾る」矢沢 和女 △「みごと」三村 舞
△「ワイド」西出 楓楽 △「男」住田英比古
会費 1000円 欠席投句 3月31日まで 会員に限る
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
本田智彦宛

柳誌「みちのく」 100号記念誌上川柳大会

課題【りんご】 2句

選者 小島 蘭幸 赤松ますみ
丸山あずさ 森中恵美子
西出 楓楽 江畑 哲男
徳永 政二 高瀬 霜石

投句方法 誌上大会用紙または便箋等に郵便
番号・住所・氏名・電話番号を明記

投句料 1000円 (切手不可)

締切 4月30日 (当日消印有効)

賞 上位30位まで 青森県産品を贈呈
また各選者の特選句の中から、川柳
塔みちのく創設者・波多野五楽庵が
大賞1名・準大賞2名を選びます

発表 「川柳塔みちのく101号」(11月21日発行予定)

投句先・問合せ 〒036-8275 弘前市城西1-3-10
川柳塔みちのく事務局 稲見 則彦 宛
電話 0172-36-8605

創立40周年 第19回 川柳展望全国大会

日時 4月19日(日) 10時30分開場

場所 ホテル アウィーナ大阪

大阪市天王寺区石ケ辻町19-12

TEL (06) 6772-1441

参加費 1500円

講演 「柳多留250周年 文芸復興の興亡と大阪」

尾藤 一泉 氏

題と選者 席題「浮く」 だんのやすし

宿題「浮く」 増田 敏夫

「遠う」 吉崎 柳歩

「手」 日野 愿

「重い」 村田 絹子

「戦」 鈴木 公宏

「自由吟」 笹田かなえ

「自由吟」 新家 完司

「自由吟」 森中恵美子

「自由吟」 天根 夢草

各題2句 出句締切 12時00分

自由吟は各選者に違う句を出してください

事務局 〒567-0009 茨木市山手台4-6-3-101

TEL (072) 649-5226 FAX (072) 649-2334

主催 川柳展望社

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

ご愛顧に応え欠陥車を発表

また来てね雨の舗道へほり出され

春闘がどうあろうとも釜ヶ崎

ハンガーへ掛ければ背広しやんとする

置くところもないのに妻と家具売場

湯豆腐がふつつ嵯峨は時雨なり

西成で社長と呼ばれバナナ買う

さい銭を手付けのように鈴をふり

観世音 一千年を笑み給い

スポニチを頭へかざす外野席

ようかんの厚さを測る目が並び

派手ですと言わずお若いですとほめ

父ありき通天閣といづもやと

出勤へ天声人語読むゆとり

落武者のように悪酔いたどりつき

吊り草の掌に啄木の詩がゆれ

正しさの通らぬ世なり石になる



西 出 楓 楽 選

豊中市 荒 木 郁 子

オブラートで包む皮肉に気付かない

健康法いろいろやるが続かない

楽しみを後回しにはできぬ歳

前向きと二人三脚好奇心

友からの絵手紙春をつれてきた

母さんの日記代りのカレンダー

神戸市 富 永 恭 子

春の芽がやる気ムクムク押し上げる

嘘のない顔天に向けふきのとう

しあわせの涙こぼれぬよう仰ぐ

ポップコーンその身軽さがうらやまし

賃上げも追いつきません消費税

花一輪食卓に置くひとりの夜

塩竈市 木 田 比呂朗

スニーカー冬眠中と重い腰

朝刊のチラシは妻の味方かも

カラフルなガイドブックに背を押され

各サイズ揃えましたと試着室

策略か妻が着メロ変えていた

カルチャーの英語が闊歩する我が家

大阪府 神 野 千恵子

雲の様想像力が爆発し

降り注ぐ太陽ハグをしたくなる

午後三時時計がのっぺらぼうになる

時間だけいっぱいあって論吉留守

ごゆっくりなどとぬるーいお茶が出る

永田町ニヨキニヨキ生える委員会

尾道市 小 畑 宣 之

神在せば我も小羊救えかし

信じてる自分に都合の良い八卦

断捨離と読書とビデオ喜寿間近

スマイルとお洒落で老後生き生きと

救急車事故起し呼ぶ救急車

好奇心あればあの世も苦にならず

豊中市 南 正代

いらっしやいませ良い声が出る今日の幸
六人の家族姦し旨い飯
家長の座守る夫のたのもしさ

藤井寺市 田付絹枝

酒煙草やめても財布軽いまま
目薬に背中叩かれ句集読む
旅行好き雨傘いらぬ晴れ女
戦時食思い出してる大根飯
米寿には大事な役目待っている
登り降りゆっくりしましよ女坂

豊中市 上出 修

夕餉膳出来た合図はよっころしよ
子等旅行吾は閑居で作句する
正月は旅行しますと子のメール
ハロウィンも冬至も過ぎてカボチャ買う
マンネリのメニューにピリリ黒コショウ
春一番道真公は超多忙

今治市 渡邊伊津志

絶不調飛んで跳ねてる今日の脈
病み上がり暖かい朝ほっとする
下手な字が前略のまま筆を止め
株高に心にんまり紐緩み
星明かり眠らぬ街が奪い取る
エピソード人間臭さ滲み出る

田辺市 大峠可動

目標は十人十色の道がある
文明の利器に潜んだ闇サイト
諺で説くと言葉が楽になる
苦しみの数が幸せ深く知り
聞く耳のなかった頃の悔い一つ
街の灯が点き肩書きが薄くなり

岡山県 池田たか子

雑踏の風大胆に臆病に
雪が舞う短い生の一粒よ
海峡を渡る怒濤だ寒の月
生きのびて遺書には書けぬ情を抱く
ほんとうに深い祈りは虚の世界
分裂の悲劇が国家裏返す

三次市 伊藤寿子

今年こそ今年こそはと日記帖
一期一会大切にして日日を生き
まだまだと鏡を見ては背をただす

ソプラノの第九チャレンジする八十路
生きている証賀状が出せる幸
冬ざれに万両明かりぶらさげる
草笛を競った子等の昭和いく
霜解けのスマレけなげにこんにちば
元旦もスーパ―開いてぐうたらに

奈良市 尾畑 なを江

和歌山県 森下 よりこ

欲しいものあれこれあって生き生きと

内緒ごとひとつやふたつあっていい

人生に波乱万丈まといつき

クシャミ二度運転中のいち大事

シンブルをめざした暮しすっきりと

奈良県 谷川 憲

周平にどっぷりつかり日が暮れる

五年後のはやぶさ帰還せひ見たい

勝ち力士ハアハゼーゼのインタビュー

方言がすらすらと出るクラス会

立前にひそむ本音を聞き分ける

和歌山市 北原 昭枝

凍え来し孫へとつくるうどん鍋

風花が舞って父の忌梅の花

節太い手に人生を握りしめ

面白い夢かも知れぬ笑つてる

冬の陽に白いシーツの日向ぼこ

紀の川市 楠原 富香

自分史の中に輝く忍一字

世渡りが下手で渡れぬ川の幅

合格を目指す夜毎の窓明り

プライドが邪魔して座る椅子がない

私の辞書欲と言う字が小さすぎ

寂しいと思う間もない忙しさ

千の風歌って今日も畑仕事

今日の風に合わせて生きる老いの知恵

耐えて今ちよつとやそつとでは萎えぬ

ところどころ嘘で繕い見栄えよく

鳥取市 近藤 秋星

いつ見てもいいな餅つき風景は

前代未聞万歳三唱やり直し

救急車角で霊柩車に出会い

寝たきりでないのがせめて幸せだ

あれだけの器量で良縁ない不思議

鳥取市 谷口 回春子

孫の背は伸びるが婆は縮こまる

ぼたん雪落ちるゆき先追って見る

頑固ほど心の迷い持ち続け

考えて考え抜いて迷う道

絵手紙の春の便りは今が旬

倉吉市 中村 毅

住所録追加はなくて削除だけ

運不運神に任せていいものか

今の世じゃ七十歳は稀でなし

黄信号ちよつと前まで渡ってた

引き受けるより難しいお断り

米子市 永井 三津子

手術よりオベ説明の恐怖かな（鳥取医大病室にて）

家族皆無言で聞いた後遺症

医者信じ成功信じオベ室へ

板前はドクター私魚です

杖だけど一歩に咲いた生きる夢

米子市 野川 宣子

眠れぬとひつじもかずを数えてる

食べて寝てひつじごろんと三ヶ日

こっそりについて来たのは老いだった

新法に臆病になる老い暮らし

御節にも新しい波洋風に

米子市 見山 温子

温度差を孫が上手にかき混ぜる

餅をつき娘等にも送り安堵する

出雲路に雪がちらつく初詣

今年こそ明るい年に神だのみ

娘の喜ぶ声が聞きたく荷を作る

鳥取県 下田 茂登子

過ちの一つふたつはあった仲

好みではなかった妻が今宝

肩書きが取れて議員も只の人

温度差を何とか出来た夫婦愛

老人と言われたくないまだ八十路

鳥取県 田口 清帆

好奇心とともに道を切り開く

老いてなお若さを保つ好奇心

師走です誰がアクセル踏んでいる

お互いに心寄せあい笑顔です

じいちゃんと呼ばれ段段小さくなり

松江市 武島 千代枝

悠長な気持は松の内三日

賀状来ぬ相手案じて電話ベル

絆とて突然切れることもあり

目で愛でるだけで和ます花の鉢

あと一句出て来ないまま寝てしまい

松江市 山根 邦代

手書きから温もり伝うおめでとう

無理するな友の文には程ほどと

逢い度いと書いてる友は元氣なり

嫌がらず食事作りが出来る幸

つくづくと元氣一番言う歳に

出雲市 黒目 英男

影と僕二人三脚貫いて

恩返し夢を叶えて応えたい

つぶやきが餌となつて世を渡る

投票率下がるばかりの総選挙

古稀すぎてやっと社会が分かりだす

岡山市 藤 成 操 江

竹原市 若 年 幸 子

コーヒーを足して宴を引き止める
ふる里にたまに戻してみる心
とほとほと歩けば道が細くなる
頑張れと朝の鏡に言い聞かす
ウォーキング錠剤減らすものとして

岡山市 前 田 恵美子

三原市 鴨 田 昭 紀

美容院若くしてよと無理を言う
姿より心だよねと痩せ我慢
札束で買えない物がいとおいしい
見栄はって生きてはいけず自然体
足跡がくい込むほどに大地踏む

瀬戸内市 東 横 ますみ

山口市 中 前 幸 子

平凡に生きて尻尾がじやまになる
しつとりと愛そそがれて花になる
ブラウスをふわり一日蝶になる
朱の花弁散らしたい夢みる造花
手作りの味が恋しいカップ麺

岡山市 田 中 恵

山口市 増 田 めだか

水仙が咲いて小島のおもてなし
惚け防止学んで当たることばかり
叫んでも夕陽静かに落ちて行く
お洒落してたまには笑顔買いに行く
春うらら大地が誘う重い足

元旦は雪の羊の群れで明け
銀世界赤ナンテンの自己主張
リモコンから世界旅した寝正月
コタツでミカン文化遺産だと思ふ
ほどほどに忘れて笑う生き上手
下積みの石に三年ほど座る
大吉を毎日引いている不安
険悪な空気とます負け上手
型枠にはめ才能を閉じ込める
季節感知らぬ造花の自閉症
通りゃんせ羊の群れを横切って
プラス思考の構図へ飛ばすしゃぼん玉
渴いたところにすんと月落ちる
人を斬った痛みが枯れ野まで続く
煩惱を抱く生臭い手を洗う

ドミノ倒し家族全員インフルに
野仏に野花をあげるもみじの手
妻の敷く線路に乗った定年後
靴だって嫌いな時はけつまずく
朝の靴今日一日のパートナーに

宇部市 高山清子

筆書きの賀状なつかし老いの友
見本にはなるが手本にならぬ人
出る杭も打たれなくなり年齢を識り
捨てられた椅子にもあつた過去の夢
退くことをおぼえてからの嫁姑

防府市 坂本加代

一年の成果数える大晦日
見返りは不要親子のおもいやり
細胞がピンクに変わるストレッチ
冬ごもりしていた口が春になる
座右の銘むずかしくないことばかり

松山市 栗田忠士

ウサギ小屋の隅で拾った福の種
節分の豆が食べ切れなくなつた
無農薬青虫様のお墨付き
肝心要はへその高さで決めている
まだ登る楽しみがある喜寿の坂

松山市 神野きつこ

貧しいと余計に響く除夜の鐘
軒下で初日の出見る吊るし柿
やってみなはれと息子の尻を蹴る
マッサンとグラスを交わすウイスキー
手の中に勝負の駒を持っている

大洲市 花岡順子

コート着て節約をする暖房費
初仕事庭の雪かきから始め
雪三日誰にも会わぬ日が過ぎる
瞬きほどの人生胸を張って生き
空回りばかりしている僕の脳

北九州市 小松紀子

父母が逝きふる里の水甘くない
湯タンポに感謝かんしゃの心地よさ
なるようになるさ雑念切り捨て
隣とはつかず離れず踏みこまず
そのほどほどが難しいバイキング

佐賀県 真島久美子

シンデレラではなかったか鐘の音
補った強さが足枷になつた
母の声だけを拾っている夕陽
頬杖は解こうそろそろ春になる
振り向けば少年だった頃の青

山鹿市 三谷直男

明日からは禁煙と決めた大晦日
除夜の鐘最後のいづく吸い収め
雑煮食いつかり忘れ初けむり
くだらない禁煙の誓い反省す
禁煙をきっぱりやめたさわかさ

シドニー 坂上のり子

つくば市 嶋本 喬

おせち料理三日もあると食べ飽きて

豪華船へ寂しさ逃れクリスマス

昨夜の悪夢カギ掛け忘れ眠ってた

ペンに怒りをぶつけガンぶっ飛ばすバリ

ペンにはペンでやり合う戦やつてみる

札幌市 斉藤 宏子

デイ仲間あれこれそれで通じ合う

鮮度落ちでも女です紅つける

楚々とした香りが残る九十歳

物価高老人力で耐え忍ぶ

雪雪で一人遊びも上手くなる

登別市 小林 碧水

地吹雪とフルラウンドのボクシング

雪の野に立てば一人の被告人

雪掻いてかいて真冬の底に着く

年金の箱に入らぬ夢ばかり

錠剤で命の指と指切りを

弘前市 肥後 和香子

嫌われる覚悟舞い散るぼたん雪

熱い冬再構成のニューファミリ

月青く雪の迷路はあったかい

父母の記憶を刻み赤ワイン

賞味期限ある言葉撒く三歳児

安倍川餅取巻きだけに撒いている

どんよりと心も晴れぬ投票日

通リゃんせいつか来た道秘密法

いつの間にか税と福祉が分離する

冷凍の御節も美味くなったなあ

東京都 高岡 弥生

五十でも全力投球遅くない

お年玉なければ来ない孫たちよ

たまにはねお呼ばれしたいお正月

何よりも働けるだけありがたい

強風でお墓の中も寒いかな

佐渡市 高野 不二

税抜きの表示腹立つ消費税

通帖の残高やつと五桁か

外出しない日が続く雪三日

捨てるのは惜しい使うはやっ介だ

病室に先輩ぶった奴がいる

豊橋市 藤田 千休

竹とんぼ都の空へ消えたまま

冬山へ踏み出す勇氣退く勇氣

スッピンへお見舞い行つていいのやら

混浴が好きで長湯をするおでん

ビザ無しでこっそり居着く外来種

長岡京市 日置 みどり

悲しい程二歳の君に恋してる
ジニ係数上げる政治はごめんです
第九から不思議な力いただいて
雪世界ハワイアン聴き緩和する
川柳塔「ひとこと」読んで勇気わく

大阪市 浅井 公平

起居動作エリーと学ぶ連ドラで
去る時はどんな理由も寂しいね
我が妻に理屈詰めても勝負なし
冷蔵庫整理でメニユーちぐはぐだ
傷付けた心の傷は今もある

大阪市 磯 島 福貴子

谷町に春呼ぶ香り大銀杏
バレンタイン期待を込める倍返し
新米ママ赤子と共に泣き笑い
呼ばれた犬孫とおんなじ名前だわ
五輪リニア孫二十歳迄命乞い

大阪市 宇 都 満知子

上澄みは歳を重ねて澄んでいる
伸びすれば心のひだも伸びをする
お仏飯毎朝供えリンふたつ
席譲る思案する間に先越され
寒風にも春の囁き待つ蕾

大阪市 太 田 としお

まあええか明日もあると信じてる
新聞を読むなストレス溜まるから
金金は万能薬になつている
来年も等身大でいきましよう
努力の人に神はたいがい味方する

大阪市 柴 本 ばつは

卒論より卒業旅行先にする
トーンあげよう少しおいしくなる空気
ほしいもんなんにも無いと母の無理
極楽へゴールできたというメール
愛してるだからやっぱりかくしごと

大阪市 高 杉 力

アンケートちょっと見栄張る年収欄
元氣過ぎ苦情処理には向かぬ奴
トイレ借りコーラ一本買つて出る
本体は壊れ取説だけ残り
料理には使うべからず大吟醸

大阪市 平 賀 国 和

初夢は茜の富士に羊雲
青い鳥探し続けて今がある
戦せぬ新日本の古稀祝う
大仏を異国の人と拝みけり
楽しみは本屋へ散歩知の刺激

大阪市 若 本 安 代

貝塚市 石 田 ひろ子

婿孫の優しい誘い東京へ

人で湧く東京駅に立ち竦む

子や孫のテンポに乗れず老いを知る

麗富士の姿を飾る雪化粧

元氣だと老前整理まだ惜しい

大阪府 畑 中 節 子

初春のそらに大きく描く夢

温かい言葉一つで治る風邪

遠連山雪見て弾むバスの旅

かけ声でようやく動く老いの腰

竹藪が鳥籠となる冬雀

池田市 上 山 堅 坊

うなぎ屋の客寄せしてる換気扇

連れ合いに逝かれた隙間埋める趣味

やり残しぴょんと跳び越えお正月

べべたでもひたすら前へ行くつもり

正月に今年も描いた大きな絵

泉大津市 助 川 和 美

百均へいつも寄り道年金日

渋滞を承知で帰るお正月

好きな彼出来てキッチン邪魔する娘

当選すれば聞こえぬらしい民の声

近いうちに言うて来た事なく疎遠

太陽を奪い合ってる冬木立

千両の実を椋鳥と半分こ

ジャム作る家中みかん色にして

単線の人情貰う忘れ物

賀正来ぬ友に電話の躊躇いて

貝塚市 吉 道 あかね

春に咲く花は厳しい冬を知る

皮下脂肪たつぷり溜めて生き残る

バントヒットぐらいがたまにあるのです

大腿で背筋伸ばして若返る

美しい思い出でした桜貝

河内長野市 大 島 友 子

山谷を超えた秘訣はケセラセラ

心弾むオニユウのベダル風を切る

度胸だけで修羅場潜った顔のしわ

老いらくの恋舐めないでドッキドキ

人はパンのために生きてもいい筈だ

河内長野市 藤 塚 克 三

決断が固まりました冬朝

ありのままのどれが自分か判らない

煩惱の夢見てちよつと若くなる

溜め息をついて財布の論吉出す

雪が舞う意見が一致湯豆腐ね

河内長野市 森 田 ひろこ

足腰が弱り埃に目をつむる

挑戦の前にハードル妻の許可

姑のお節自慢も耳にタコ

スキップを自慢げにする三歳児

孫自慢夫自慢も聞くランチ

堺市 近 藤 治子

しぶとさが光っていますアスリート

揃った父が張り切る鍋奉行

雨上がり双葉出揃うプランター

ときたまに当たるから買う宝くじ

コンピニをたよっています母代わり

堺市 高 田 智子

野の花をこぼれるように籠に生け

校庭の隅には風の通りみち

紅葉の名残りに気付く年の暮れ

年末の景気づけかも総選挙

文字裏をたどりつつ見る年賀状

堺市 羽田野 洋介

根も葉もない噂話に羽が生え

広い世間自分で狭くしてただけ

メタボじゃない太っ腹だと胸を張る

無理をせず三步進んで二歩下がる

賞金はいつも三桁の宝くじ

堺市 大 和 峯 二

増税後財布早々軽くなる

元気です幸せそつと感謝する

働ける幸せやはり平和から

ああ言えばこういう元氣欲しいもの

反省はしても改善できぬ歳

高槻市 三 谷 白 黒

孫達に負けてうれしい正月だ

何げないその一言が傷つける

妻居ると甘えてしまう悪い癖

サンタさん年寄宅にも来て欲しい

政治家は出来ないことをやると言う

豊中市 荒 巻 夢

人生が少しわかって八十歳

持ち時間知らずのんきに生きている

死の後にほんとの世界あるかもね

しなければならぬことのない虚ろ

逝った子と会話している冬夜長

寝屋川市 岡 本 勲

お互いを立てて笑顔の老夫婦

いい苦労したんでしょうねいい顔ね

くやくして通天閣が背伸びする

会議より縄ノレンでは弁が立ち

はろばろにされても通す俺の意地

東大阪市 織田登子

神戸市 木村忠義

大掃除孫の応援高くつき

黒豆が今年も届き初春を待つ

祝箸同じ人数書ける幸

10年を止めて5年にする旅券

憧れた音楽葬で送ってね

枚方市 河田洋子

昼過ぎの電車居眠り乗り過ぐす

うちの子に限り信じていた油断

最近は二つの事が出来ません

うちの犬飼主よりもでかい顔

油断してもうけ話に大火傷

神戸市 井上忠貞

冬空にチャルメラの音が澄みわたる

天の句に口笛吹いて帰る道

竹灯明鎮魂照らし二十年

喜寿近し終活の道ひたすらに

一杯では足りず二杯は多すぎる

神戸市 長川哲夫

三日目に独楽は勝負と起き上がる

ライトアップ小心者の影が揺れ

角度1ずらせば見える腹の底

祝い船鯨は沖で泣くばかり

捨蚕さえ世界遺産の糸を吐く

おもてなしするとなかなか帰らない

好物の違う夫婦が五十年

百六の伯母の根性学ばねば

夫婦とは持ちつ持たれつ生きること

始末するのを貧乏性といわれ

神戸市 玄番美恵子

故郷の亡父の記憶を辿る笛

リハビリの甲斐があったと光る汗

光りにも陰にもなつて母の愛

屠蘇気分抜けないままに早十日

ひつじ雲やさしい風にふあふあと

神戸市 山根弘子

止まりそう脳の振子に油さす

反省の海で私は溺れそう

骨惜しみしない老母の背が温い

寝不足の脳に作句のボタン押す

三次会いつもの顔が欠けている

小野市 田中辰夫

噛み合わせ会話も絆老夫婦

入社式済めばライバルヨイドン

親に借る金に利子無し小言あり

耳栓をしても聞こえる隙間風

どんとんと若さ吸い取る除夜の鐘

小野市 藤原泰宏

曖昧に生きれないから苦勞する

福耳の割に金策忙しい

餅つきの音は素朴で温かい

大晦日除夜の鐘聞き氣を洗う

年賀状添え書きだけを読んでいる

篠山市 藤井美智子

新年のスタート老いも夢を追う

般若心経亡夫が毎朝聴いてくれ

名前出ず地名も出ない脳の皸

ウエストへ氣を揉んでいるカギホック

心配をしてくれる子が居ればこそ

三田市 今西廣子

春になりエコの湯たんぽ猫に遣る

暖簾分け腕がなければ只の布

腕よりも甘い主治医が繁盛する

長生きの秘薬があれば大儲け

人間になりきっているペット犬

三田市 上田ひとみ

変わらないお正月ですのどかです

きらきらと光ったままでそのままで

ありがたいいつも笑顔でいてくれて

それだけは守っています頑固です

ゆうべ見た私の夢を大切に

三田市 九村義徳

本年もお世話かけます聴診器

古希の坂越えて喜寿へと四股を踏む

何事も妻がルールの我が家です

腹時計時間ですよと鳴り止まず

ルールなどどこ吹く風のサンゴ漁

宝塚市 丸山孔一

延命は嫌と言つてもその時は

終末は何時どの様にまた何処で

反戦は良いが国防如何せん

体重計器機故障と理解する

出演者だけが楽しむ画面消す

三木市 山口久子

米寿なり年賀ハガキもへるばかり

湯舟にてとつくり浮べ父笑顔

やせてくる母の背流し達者でね

初夢に富士鷹なすびなにもなし

米寿でも心機一転張り切って

南あわじ市 萩原狸月

物価高庶民に欲しいいくもの糸

許されよ命のリレーだけはした

失業をするのに万歳する議員

歳月がデフォルメしてもまだ美人

東京は息子拉致した憎いところ

和歌山市 平田元三

来る年へ農事した日を書き留める

達成感欲しくて無理な朝歩き

舌火傷しなきゃ嘘だろ甘い汁

朝ドラの情に絆され待つ八時

和歌山市 磯部義雄

一年の計画表は腹八分

何よりも一番欲しいのは時間

軌を一にした家族には福を呼ぶ

尻餅をついた地面を手で叩く

岩出市 村中悦男

後悔を捨てる気になる春の夜

体温計平熱ですと励まされ

賀礼会年相応の友が出来

五〇〇枚やつと五枚の切手貰

鳥取市 大前安子

年重ね多忙な日ほど楽しがる

からかいもいたずらも好きみんな来て

好奇心いつも背中音頭とる

初化粧ばあちゃん見てと声弾む

鳥取市 奥田由美

六文銭携え母も黄泉の国

親が逝く悲しみなのに腹が減る

病んで知る夫の優しさ有り難さ

一晩で白髪と変わる事故の報

鳥取市 坂本とも湖

空想の島で人魚になって待つ

川柳初心暇さえあれば指を折り

いさぎよい散りざわ椿見て学ぶ

未熟児が運命線をにぎり締め

鳥取市 田中天翔

半額のチラシに上がる重い腰

重い荷を背負った頃が花でした

座布団が出てくる席は落ち着かぬ

ステーキよりも大根煮付け口に合う

鳥取市 津村義昭

三ヶ日駅伝のように駆け抜ける

「あっ」という月日流れて五十年

別れよう思ったこともあり月日

好き勝手してます自由きく範囲

鳥取市 山下凱柳

口達者さらに輪をかけ筆がたつ

ああうんで心が通う老夫婦

女房に顎で使われ大掃除

もがいても老いは必ずやってくる

倉吉市 岡崎美知江

ここだけの話はずむ酒の席

叛くかも知れぬ火の種掌の中に

不揃いの背丈進まぬ馬の足

頬杖をついて話は上の空

倉吉市 田中 紀美恵

終の日はちゃんと云いますありがとうございます
頑丈な五臓六腑に感謝する

成人式若さみなぎる湯気に酔う
お国訛都会の空で涙ふく

倉吉市 堀 かずこ

弁当を開く楽しみ妻の愛

今年こそ預金しようと家計簿見

年末に投句を整理没の山

イライラがペン一本ですつきりだ

境港市 中井 虎尾

おめでとう気分には遠い院の中

歯車がくるって私整備中

人は皆秘密かくして生きている

齢の歌手お願いアッブしないでネ

米子市 池岡 たけし

年重ね元朝の酒喉が待ち

暖かい方へ我が身は走り出す

雨や風天の定めに悩まされ

冬の空部厚いふとん息が邪魔

米子市 生田 和之

戦後史がはじまる日からある記憶

古稀過ぎし妻の賀状がうんと増え

賀状減り投句葉書へ転用す

女房の予定ばかりを書く暦

米子市 小野 鶴子

クラクシヨン昼寝の猫に遠回り

歌い初め下手な演歌で若返り

舞う雪に散り際見てと寒椿

庭先の七草摘みて春を食う

米子市 加藤 正二

ロボットに老後を頼みるんなんだ

これ限りなるかも知らず賀状かく

年重ね鉛筆の字が踊り出す

背丈まで老いた老いたと縮こまる

米子市 田村 周子

元旦は息子夫婦と猫一匹

鳥取は正月毎然大雪だ

孫娘デートで親は落ちつかぬ

正月の箱根駅伝かもしれ走る

鳥取県 飯野 菖子

はっきりと空いた心に秋の風

若者に生きた証の知恵を貸す

まだ元気老いの腕でも貸しますよ

激しさも厳しさも知り生きて来た

鳥取県 橋谷 静江

先ず誉めて嫁を上手に使つて

それからと続く話に熱がある

太陽が昇る朝には足軽い

飼いだ犬が旅の日取りを決めさせぬ

松江市 相見柳歩

本当に優しい木々は太くなる
本物のおとな楽しむことを知る
巢立つ時わざと足跡置いて出る
頂いた言葉は来世まで残る

松江市 中筋弘充

穏やかに介護してよと無理言われ
性善説を疑うときがある介護
「すまないね」を義母に言わせる嫌な俺
腹立てて逃げ出したいと思う俺

雲南市 菅田かつ子

逢いたくてちよつとしました回り道
一目ぼれ若いあの日の物語
大掃除けんかしながらやつと済み
聞かされて聞かなかつたにせよと言う

雲南市 松本昌

残り火が消え行くように老いの道
鳥インフル過疎地に走る恐怖感
亀万年無駄な動きのない暮し
アメリカも日本も同じエサの牛

安来市 原 煩惱児

活花に思うことあり花の命
孫に夢出雲大社へ初詣
お正月三日の温味また独り
吾が輩は猫であるかな漱石忌

岡山市 丹下凱夫

誤作動のクセついていた前頭葉
銀漢や男はみんな淋しがり
見栄っぱり捨てたところに八手咲く
元日を迎えるために髭を剃る

岡山市 永見心咲

取り込みのシート冷たい冬落暉
ガラス窓手垢は右の側ばかり
単純な問いに戸惑うかくし味
ぽっかりと池だけ残す雪白布

笠岡市 藤井智史

できるなら一生簪を使いたい
成功の暁に咲く花もある
満開の桜咲かせた島おこし
周りなど気にせず君を愛します

玉野市 片岡富子

初恋の人も一緒に老いている
毎日が当たり外れの冬模様
「大吉」の言葉素直に飲み込める
ゆでたまご剥くように一句ほら出来た

備前市 森 ふみか

病んだ手を握れば解けるもつれ糸
名をあげて礼を言わねばならぬ人
星ひとつ増えて禊はもう要らぬ
忍び音も嗚咽も闇は凍てつかせ

岡山県 紫 しめの

女房は泣かない女演じきる
朽ちるまで空気読んでる風見鶏
ペンを買うさて誰にあて恋を詠む
あふれ出すマグマ地球はやわらかい

尾道市 日谷 寛

春の風恋が芽生えてくる予感
恋がめばえて白梅も紅梅も
さわやかな恋さながらに朝桜
めくるめく素敵な恋の花時計

竹原市 土井 輝 恵

政治への批判は夫婦一致する
家中の音にアンテナ張って主婦
兄妹介護の役を決めて去ぬ
充分に生きたと言つて逝きたいな

竹原市 六田 半 徳

山茶花がきれいに咲いて見事散る
しだれ梅白い蕾で春を待つ
今年こそ笑顔の自画像描きたい
赤ヘルの戦力アップで景気良く

高知市 三谷 待太郎

不器用でウラオモテなく女人好き
夫人には言えぬ青春三つ四つ
カクカクと楷書文体書いていた
娘には結婚しろと言わず逝き

福岡県 本田 さくら

ありがたや白菜漬のおすそ分け
猫の手も借りたいタマは邪魔をする
七草がゆうちの七菜ありあわせ
ハラハラと落葉は誰に逢いに行く

佐賀市 清水 園 實

息子来て風呂場とトイレ清掃し
夜中起き水一杯でまた眠り
玄関のおかざりひとり飾るわれ
中三の孫と将棋し負け笑い

唐津市 岩崎 實

四苦八苦菩提と涅槃知慧と慈悲
脳回路かくも弱りし昼の月
投票はみんなの話を聞いた上
小寒を過ぎて愈々寒四郎

唐津市 吉富 節子

眼が弱く爪のつもりが指を切る
カレンダー赤丸曾孫誕生日
いたずらを何処かに残し孫帰る
親友の手紙誤字あり安堵する

佐賀県 門井 孝

升酒になみなみ注いでおめでとう
暮れて酒明けても酒で元氣よし
年老いて生きる世の中ありのまま
青学の栄光の裏努力あり

また一つ年を頂き浪花節

熊本市 杉野羅天

だらしない僕だからこそ出来る無駄

無駄を追求し無駄に見放される

一曲で疲れが取れた音紀行

山鹿市 前田幸子

一年を心でつなぐ年賀状

あれこれと値上る新春苦痛です

ころんだら労るよりもおこられた

若いネー年に似合わぬ赤い服

山鹿市 柳田白沙

ひと肌が恋しい母のひざ枕

ひき出しの記憶細胞あなたから

女子会は一度に皆がしゃべりだす

羊らも運命の出会い予測する

沖縄市 森山文切

みぞおちの辺りに羞恥心がある

べき論に身を委ねては瘦せて行く

中心を外して妻が立っている

流れ着くだろう助けるまでもない

札幌市 富永恵子

凍る道凍としてます靴の位置

無位無冠私に似合う路がある

冴えわたる雪の大地で深呼吸吸

本心の蓋をあけると雨模様

またひとつ又ひとつ消え雪が降る

弘前市 高森一吞

被災地の海が知ってる蟹気楼

二度寝する妻に朝食抜きにする

豪雪に隣と口はききません

弘前市 吉川ひとし

裸木に春一番が引つ掛かる

平凡な暮しとつても難しい

直球で勝負するから嫌われる

どん底の風を見殺しには出来ぬ

東京都 川本真理子

少子化に子の泣き声がめずらしく

赤ちゃんの泣き声に町あたたまる

うらやむのは木とか鳥とか空の雲

さしさわりないように生き影失くす

横浜市 巖田かず枝

子等が来て湿布ベタベタ古い二人

指差して薬菌磨き確認す

格好などつけず素直な蟻になる

円が言うどうすりゃいいの輸出入

横浜市 川島良子

ポジティブに生きる貴方の背中追う

嫌なこと削除削除で生きていく

年賀状家族写真は今が旬

まっすぐに老いているのは確かです

横浜市 長 島 亜希子

大吉に気分良くしてよくしゃべる
階段は手すり持つよう子に言われ
孫と勝負本気になって策を練る
こんなことで健保使ってごめんなさい

伊勢原市 小 田 幸 子

カマキリは小さな鎌をふりかざす
まな板の上で問われる人の味
風吹いて師走に落葉疾走す
寒風に桜こらえて花芽抱く

川崎市 成 田 せいじ

望まぬが今年も一つ歳を取る
里帰り土産のエビでタイを釣る
年頭の願いもむなし大晦日
リタイア後手強くなった古女房

静岡市 渡 辺 芳 子

もどせないこの人生がうらめしい
過ぎし年月がまんしすぎた戦中派
生まれるの戦後だったらどんな私
今が幸私の人生これでいい

江南市 脇 田 雅 美

冗談が長く続くと本音でる
金持ちにじわりじわりとにじり寄る
居酒屋にこの世の話聞きに行く
どん底に落ちて初めて目を覚ます

愛知県 樺 嶺 志

年賀状総理の気概で書いてある
賀状では僕もなれるさ大臣に
賀状では国政論者になりたがる
一年に一度の便り年賀状

京都市 櫻 崎 篤 子

愚痴言いに月に一度の墓参り
よし僕が受けよう母の変化球
番号で待つて胃の中診てもらう
神様にまだ十円が利くかしら

大阪市 内 田 志津子

年賀状印刷文字が寒そうな
子が三人器量に合ったくらしぶり
平凡に今年も終り良しとする
たんたんと前を向いてる晩年も

大阪市 大 治 重 信

八十歳消化試合が尚続く
老いて尚多情多恨の日を過し
春画みた蔵で遊んだ家の跡
良い人に違いはないが刺がある

大阪市 寺 本 実

怒ってはいないと妻は黙り込む
下心あつさり君に躲される
ゆっくりとしとくなはれと簪立て
泣きなさい涙は心軽くする

大阪市 梅里南天

年賀状出せば計報の返書あり
食べさしのみかんがひとつ雪が降る
セキレイの群がる夕日おそろしく
羽根生やし論吉師匠が飛んでいく

大阪市 藤田武人

君にならずべて任せてみたくなる
泣き声の違いが解る母の耳
ど忘れも愛嬌にして誕生日
如月の根雪の下に眠る春

大阪市 前川善之

母が言うテレビ見てると阿房になる
波に乗り風に乗れば大儲け
普通にと生きる人程すばらしい
生きてこそ何時か幸せ来ると言う

大阪市 松田聰

見逃すな目の前にある福の神
二年後は一円玉が邪魔になる
新年の番組何故につまらない
傷ついた心に刺さるとどめの矢

大阪市 宮村満寿恵

春近し気分はすでに旅に出る
足腰が丈夫な胃腸にあきればて
失恋を思い出すたび茶は苦く
体力は減って体重が重い

大阪市 吉田知之

叱るのは優しくするより難しい
苦勞するのも反省に良いチャンス
一銭の紙芝居飴夢にでる
我がままが言える幸せ気がつかず

河内長野市 穂口正子

チャレンジに疲れて今は孫の守り
風呂上がり無駄を承知でバックする
キヤッチする稀に良い句が降って来る
同じ事また自慢した恥ずかしい

岸和田市 松崎大輔

三十路まで賞味期限を保ちたい
貧乏はしたくはないが味がある
やりますと熱意の言葉人動く
一本の相合傘で情が湧き

堺市 梅木澄空

お相撲さん塩撒く作法にも個性
歳取れば痩せると母の呑気節
お遍路のゴールの証掛け軸に
回転すし勝手つかめずまたも去り

堺市 山崎早苗

子の巣立ち書斎と呼べる部屋ができ
免許証でやっとわかった母親似
体重計眺め顔上げ遠く見る
子を叱る後ろで着信ドラえもん

高槻市 松岡重子

風雪に耐えて白寿の父の背な
母の愚痴聞いてあげるとかるい息
家計簿に痛み残して孫帰る
ヨチヨチの先には温いママの胸

豊中市 貝塚正子

山野草カメラに収め持ち帰る
若いつて桃色なんだ吐息まで
好きなものばかりで楽し一人鍋
お水取り終って奈良に春が来る

豊中市 源田啓生

八十路来て心の骨は未だ折れず
時と言う光速に乗る我がいのち
焼いたなら炭素繊維と言う未来
シャンゼリゼにカラシニコフは似合わない

富田林市 小出修三

年賀には干支に因んで羊筆
妻素顔金剛山は雪化粧
笑いましよ皆が元気になるよう
大根にも妻の骨にも鬆が入り

寝屋川市 荒川鈍甲

今年またどんな出会いが八十路坂
ためらわす心の澱のようなもの
妖怪と言われようと百めざす
「資本主義の限界」本が売れにうれ

羽曳野市 磯本洋一

墓参り終えて地酒の酔い心地
口角を飛ばしている間てっさ無く
てっぺんで烏が騒ぐ冬の朝
直筆の祖父の年賀が七草に

羽曳野市 安本美喜

ペン止めて大阪優勝共に泣き
警官を見るとアクセル緩めます
寒稽古親子共ども必死なり
シクラメン水のかけ過ぎしよばれる

枚方市 坂本ミヨノ

来年の抱負多くて笑う鬼
遺産と税頭痛で悩む日々細る
初日之出四方の神々吉か凶
顔見世に招き看板呼んでいる

枚方市 松原保

修行には終りは無しと知名人
しつこいぞ繰り返されるコマーシャル
気まぐれな右か左の浮動票
イエスマンばかり集めた与党派

箕面市 寺井柳童

羽ばたいて錦織世界ランク五位
町あげてダンジリ愛し勇ましい
火の色をみて陶芸の技みがく
信号機今や青色LED

八尾市 前田 紀雄

金婚の夫婦の絆蝶結び

私の病名早期胃癌です

文太さん見直しました座右の銘

オペ前のオーバーホール身と心

大阪府 小栢 こずえ

花愛でて沈む気持を持ち上げる

ぬるま湯に浸り自分を見失う

する事は数多あるけど齢の壁

田畑荒す猪の仇討はたん鍋

大阪府 高木 道子

降って止む時雨に虹の自棄っぱち

健忘を得意技にし歳かさね

ほどほどの笑みで遺影に見詰められ

強かに神と対座すワンコイン

大阪府 西川 冷子

照る陽差し暖房切ってエコ暮らし

北国の空七変化また雪に

大雪をハワイの友へ写メールで

旅談義花が咲く咲く思いでの

河内長野市 渡邊 修

実験の記録の重さ滲みた年

政務費は一円たりと無駄ません

ナフタリンブンブンさせる初詣で

薬づけ何が効いたか分からない

神戸市 上田 和宏

心では自画像のまま若いまま

生きてゆく終わりよければそれでよし

この先はずっと留年していたい

残高に加えてほしいゼロ一つ

神戸市 興水 弘

禿白髪大言壮語古希の宴

母と入る足湯で心ほっこりと

予定欄医者へ行く日は花マーク

細い影連れて100までエンヤコラ

伊丹市 平井 富夫

酒やめた一週間で体へん

風邪ひいた回復遅い年のせい

村芝居代官役が板につき

何事も健康第一金第二

川西市 日野岡 和之

木曾節に怒った山は不釣合

火の国に安全神話の山は無い

運不運無差別噴火鎮魂歌

流されて帰らぬ子等に花は咲く

篠山市 永井 かほる

長生きし友が亡くなるわびしさよ

お正月家族もふえて三ヶ日

長生きしあれもこれもとしたい事

こんなにも欲があるから長生きす

三田市 足立つな子

西宮市 株元玲子

腹を割り憎まれ役を買って出る
はじめは誘いにのった喫茶店
欧米へ二度目のチャンス今の内
小豆がゆ冬至カボチャで厄払い

三田市 多田雅尚

七草の名前も知らず粥する
注連飾り有り難いのはどこまで
成人の日に着る晴れ着親の膳
ロボットで握った寿司が回って来

三田市 辻開子

行列の出来てる店についてられ
白銀が外食止めた年の明け
恒例の帰省客おえほつとする
嫌みかもレシート点検許してね

三田市 野口晶子

勇者のチャンスは裸足でやってくる
保険かけセカンドライフ歩き出す
横着な人です笑顔憎めない
火遊びも流儀があると妻の声

宝塚市 井上風花

初笑い目尻の皺も気にならず
預金額少ないけれど健康だ
株人気安倍さんよりも黒田さん
店じまい広告あるが人まばら

節電節約に身の縮む寒さ

節税の名かたり虎の子奪い去る

年明けてメエーメエーと賑やかだ

不自由さ我慢の出来る戦中派

第14回 宿場町やかげ川柳大会

とき 5月9日(土)

開場 9時 投句締切 11時30分
開会 13時 開会予定 16時

ところ 矢掛町農村環境改善センター 多目的ホール

岡山県小田郡矢掛町矢掛 3016-11

TEL 0866-821-0848

会費

矢掛町役場南側・井原線矢掛駅より南西へ徒歩5分
2000円(発表誌・記念品・お弁当)

※ご祝儀等はご辞退致します

兼題と選者

「煙」 丸橋 野蒜 選 「果」 目賀 和子 選

「鯛」 田辺与志魚 選 「粒」 遠藤 哲平 選

「麵」 黒田るみ子 選 「袋」 北川 拓治 選

「壇」 木本 朱夏 選 「席題」 江尻 容子 選

出句 各題2句 欠席投句締切 4月30日(木)

欠席投句の方は、投句用紙または A4程度の用紙に各題2句と

郵便番号・住所・氏名・電話番号を明記の上、投句料(1000

円/定額小為替)を添え左記宛にお送りください

投句先 〒714-1222 岡山県小田郡矢掛町西川面2556

間合せ先 矢掛川柳会 紫しめの 田中 道博 宛

TEL 090-7136-8807

TEL 0866-821-1256 田中 恵 主 催 矢掛川柳会

新川柳鑑賞 (37)

麻生 路郎

医学会載医者同志のむ話

(ゆずる)

「学会でネ」

と載も筈も、忙しそに、得意そうにいう。その癖、驚天動地の学説を発表したという声は聴いたことがない。公費で旅行することだけは間違いないが、この句のように載医者は載医者同志で大いに呑んで、小唄の一つも發表して来るのがオチであろう。お医者さんに叱られそうな句であるが、ワシは載医者であると名乗って出るような人は先ず先ずあるまい。

診察室こけしも置いて女医若し

(杜 的)

強度の近眼鏡をかけ、白い手術着に豊富な肉体を包んだ女医さん。医者稼業はしても、診察室にこけしを飾っているところを見ると、女らしさと言うだけでなく若さを放散していることに気付くのである。多少の穿ち味もあるが、どっちかと言えば感じの写生句である。

お百姓さんにたまわる広い天

(太郎丸)

常にビルの谷間にうごめいている人間が、たまたま郊外に出た時に、ああ、ひろびろとした天、ああおとした天、果てしなき天、平和を表徴する天、これこそ百姓にたまわった天恵である、つくづく思われたのである。これは都会人にとって一つの発見に違いない。

百姓でなけりや故里よいところ

(旭 童)

山はわが寒村を抱きかかえているし、河は流れ流れて海にそいでいるし、山紫水明の美しくしさは誇るに足ると云えようが、猫の額のような土地柄だけに私達を養うに足る収穫はのぞむべくもないと云うのである。「百姓でなけりや」が暗にそれを指摘しているではないか。一百姓として生を享けた人間が古さに対する述懐の句である。

囲われたままで小鳥のように死に

(薫風子)

二号夫人も、囲われて幾歳月となると、平々凡々たる日が過ぎるに過ぎない。寵愛されたあの頃の甘さも、色褪せた花のように何の変哲もないものとなって散つてゆくのである。その死を鳥籠のせまい天

地で死んでゆく小鳥の姿にたとえたところに哀れな美しさがある。

三号になって洋裁通いなり

(七面山)

三号にとつては豊富な肉体と若さの提供以外に捧げるものはない。その代償としては物質的に不自由のない生活そのものでしかない訳であるが時に将来を考えると、身につけておきたい慾望アタマを上げて来る。それが洋裁通いとなったのに外ならない。

今日あたり来て呉れそうな髪を梳き

(ひさみ)

愛人ともとれるが、二号生活を詠んだものとうけとるのが、より適切なような気がする。なんとなくしみじみとしたものを感じさせられる。髪を梳き、頬紅をさして見たが、鏡に映る顔は少しも晴々とはしていないのである。若しかしたらこのまま棄てられるのではなからうかという不安をどうすることも出来ないからである。そうした女性心理を実に巧みにとらえている。

終電車さつきの媚がツンと居る

(修 三)

キャバレーでの痴態も彼女の営業用の媚だったことをハッキリ認識させられた訳である。「さつきの媚」とは巧い表現である。

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

原稿紙の白さに耐えている夜半

やさしい声の電話油断なりませぬ

ライバルの祝電もよし披露宴

お知恵拝借とは格好の良い言葉

空蟬や我七十の掌に

炎の如き言葉を吐いて淋しけれ

友だちが寄ると会の名が出来る

夕ざくら我七十の血が騒ぎ

元旦や七十年の猿芝居

日本人軍艦マーチでよく遊び

秀才の家系に生れクリスチャン

潮騒の今はきこえぬ晶子の碑

七つ目の判で止まっている役所

血圧にわるい女といわれてる

金魚掬う金魚の柄の浴衣着て

忘れることが幸福とはみじめ

古本屋の棚のほこりに意地があり

落語家の崩れた顔が今佳境

落語家の真面目な顔の死亡記事

古都の隅先祖ゆずりの職に生き

戎橋一寸そこまでの人に遭い

てっちりや路郎門下の生き残り

大丸で逢い福寿司で遭う女連れ

誹風柳多留一二篇研究 21

石川道子・小栗清吾

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫

清 博 美

161 なんのくも無く上下で武士あるき

石川 町人にとって何かの儀式のときだけに着る袴は窮屈で行動もままにならないが、さすがに武士は着慣れていて別段のこともなく歩いている。

清 ユニホームと礼服の差。
上下ハ我俣に着るものでなし
不届な男上下はじめたり
初 31
八 29

162 初かつほ客も台所のぞくなり

石川 お客様もあり、初鰯を奮発すると、客までが台所を覗きにきた。

はつかつは人ン間ンわつかなぞと買

明五天 2

小栗 賛。丸のままのを一目見ようと。
清 賛。
れい年の事にたまける初かつほ 一七 31

163 あご斗のきに残ると人ハちり

石川 アンコウは調理するとき吊るし切りにしたという。身をさばき終えて顎ばかりになると見物人もいなくなる。

大ぜいに見せてあんこう喰ふさかな

清 賛。
あんこうハ口ひる斗りのこる也 一七 30
安九松 2

164 国の色せなあの分に成て来る

石川 下女の恋人であろう。国元から江戸

に出て彼女に合いに来るときは兄だと呼ばれて訪ねて来る

下女が色兄さんよバりにくい事 一二 42
江戸へ出てせなあをきらふい、なつて 天四義 2

清 賛。「国の色」の呼び方が面白い。

165 三たて目にやりてへくくく outcomes

石川 三立目は、芝居で除幕の次の幕のこと。本来は二立目だが、除幕の前に下級役者による一幕があったので二立目を三立目といった。第二儀として、遊里における三立目のこと（『新編川柳大辞典』）。吉原であろう。初回、裏と終わり、三回目から馴染みとなる。三立目にはいろいろ作法があり遣手にも心付けを渡すので、遣手も笑って罷り出る。

三立目ば、あも見せをはりに出る

清 賛。
安八信 4

166 医書にもれた事紅葉がしやくのたね

石川 癩（胃瘰癧のようなものか）についての発症理由や対処法はいろいろ医学書に

みえるが、紅葉が癩の種になるということは書かれていない。亭主が紅葉見物だと家を出、実は吉原に行ったのを知った女房が癩を起こしたのである。

紅葉見と聞て内儀ハ子をさつて 宝12種1

よし原ハもみぢふみ分ケ行所 七36

小栗 賛。「癩の種」は「腹の立つ原因」という意の成句になっていて、主題句でももちろんそういう意味。本当に癩になる場合があるよ、と詠んだわけではない。「癩の種」を文字通り、「癩」と「種」にばらして「医書」を持ちだした技巧が手柄という句なので、解釈文もその辺を汲んだニュアンスが要求される。

伊吹 賛。小栗氏補説にも。

清 同。

167 わらわせに自賛の禿つゝき出し

石川 自賛は自分で結った髪。おしやまな禿が自分で髪を結ったが、うまく結えたとはいえない。しかし座興にはなるとそのまま座敷へ出し、笑いの種にしたのであろう。大わらひ禿羽おりをづうるづる 安七智2 清 賛。

168 来たはんに笑つた姫をさつてやり

石川 嫁して来たその晩に嫁を返したのは、来たばかりで笑つたから。世間ずれしている、はしたないということなのだろう。

花姫のぶすいで無イのにくらしさ 初18

大それた事花姫のいろはなし 安六智4

山田 賛。でもきびしいですね。今ならほとんどでしょう。

清 賛。現代と雲泥の差というのでしょう。

169 おとり子ハころぶとはくを付て遣り

石川 箔をつけるは、値打ちをつけるくらの意。箔は金箔・銀箔など金属を薄く平らに延べたもので、金箔は傷の薬としても用いた。踊り子を転ばせ（売色をさせ）て花代を多く与えた。

ころぶ度ひろひハせぬが貰ふ也 末四19

おとり子ハやまふき色にけつまつき 安二松4

清 賛。

170 ふさつのおんをかうむつて五両出し

石川 布薩は、仏教教団で半月毎に互いに

自己の罪科を懺悔する儀式（「広辞苑」）。

女房の密通。密夫が、確かに私が悪うございましたと亭主にあやまり、五両の示談金で決着したのであろう。どうも美人局の匂いがする。

そのつミをゆるしていいしゆ五両取り

いけて置クやつでハ無イと五両とり 明六梅1

伊吹 賛。「布薩の恩を蒙つて」が文句取ではないかと思ひ調べたがわからず。

清 賛。文句取の可能性ありますね。

171 寝たふりをして居りや禿何か喰イ

石川 まだ年端も行かない子供であらうと禿は禿、花魁予備軍としての職業である。接客の作法は躰けられているので、それなりに一生懸命行儀よくしているが、見てないところでは盗み食いくらいはする。

明キ座敷禿か炭を喰ふ所 明三松4

きのじ屋の枯野に禿寄りたかり 五36

小栗 賛。寝たふりをしているのは客。まだ片付けてない台の物の残りか。

寐たふりで見りやひじき迄取くらひ 傍三27

清 賛。

『麻生路郎読本』余滴 (27)

「矢車」と路郎作品 ⑨

葉原道夫

明治44年8月に東上した路郎の下宿先を森井荷十が斡旋したのは、「矢車」での付き合いがあったからである。

森井荷十は、明治18年1月3日、東京に生まれ、昭和23年7月27日、満63歳で死去。本名・森井嘉十郎。前号・六疊坊。明治39年から窪田而笑子の門下となり「川柳とへなぶり」「滑稽文学」同人を経て、明治41年末に「綾志野」を主宰し、翌年「矢車」を創刊した。明治44年11月「矢車」廃刊後、剣花坊の「大正川柳」に数年参加したのち川柳から遠ざかるが、「矢車」同人であった中島紫痴郎が昭和7年7月に創刊した「湯の村」に参加した。(「川柳総合事典」及び「湯の村」一八号参照。「湯の村」については、別の回で紹介する)

路郎の下宿先の息子が高野京雨だった。

「湯の村」七〇号(昭和13年4月)の「矢車即荷十」(路郎)に、(私が明治四十四年の夏に東上した時には、荷十君の世話で下谷の下宿屋に落付いたが、その息子が一時川柳を作った高野京雨だった。京雨は三太郎君と従兄弟だと云ふやうなことを耳にしたやうに思ふが、うちでブラ／＼してゐた文學青年だった。こんな關係で一番懐しい川柳家と云へば荷十君である)とある。

高野京雨の句を、「矢車」二七、二八、二九号から一句ずつ挙げておく。

口笛の頭にしてみて悲しかり

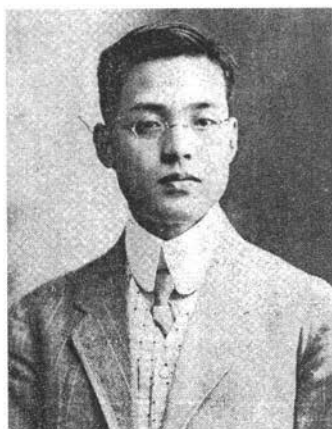
二七号

六月の蓄音機やの赤喇叭

二八号

行く犬のゆるき毛並のかなしさよ

二九号



森井荷十・「矢車」一六号の口絵より

明治43年3月、路郎は大阪高商を卒業して測量機械屋に勤めた(昭和31年7月8日、川柳まつりでの柳話による)が、退社して日本橋区にあった樋口金屏風店に勤めるために東上した。樋口金屏風店は、大阪高商同窓生の樋口鴻治郎の実家である。東上した当初は、下谷区に下宿したが、二箇月後には日本橋にあった樋口方に転居した。

「矢車」二九号(明治44年9月)で、筆者がチェックした句を挙げておく。

投げ出せしおのれの足のおそろしや 一

道頓堀川の水の黒さに泣かされぬ 同

もぎとりし檜の一葉よ朝ご、ち 破魔杖

おそろしき顔ありしかな街の醫者 龍郎

寝さめの口にバインアツブルの舌さわり 黙葉

日曜を秋となり行く日のさびし 五葉

人間を淋しく思ひ植木見る 同

倦みごち金魚の水をかへてやる 荷十

路郎作品「東京」を挙げておく。

東京

畏友淺井五葉兄に捧ぐ

放たれし上野に我は沈み居ぬ

石と石と鳴らすさびの淋しかり

すくすくと立つ電柱にたゞれし落日

泣け鴉ベンチの我も淋しいぞ
煙草さへ喫はぬベンチを去りも得ず

又鐘が鳴るぞ上野は暮るゝかや
葬よ、我も谷中へ連れてゆけ

あれも金持か自動車で走つて
言葉にも淋しさの湧く秋のくれ

言葉にも淋しさの湧く秋のくれ
黯すみし空よ、まなこの底が泣く

浅草の残像に次ぐ欠伸かな
陶物の白きに觸れて秋を知る

三味線がはたと鳴りやむ秋の夕ぐれ
弱きかないふべかりしを捨てゝきぬ

* スツバリバを引きずる刹那、弱き身よ
* 「スツバリバ」はスリッパか。

課題吟での入選作も挙げておく。
「夏の心」藤村一選

「夏の心」藤村一選

移り香を悲しむ晝をひとりかな
こゝろなき女と夏の夜をあゆみ

寝轉んで昨夜のをんな思ひ居る
天井を睨めて居れば涙わく

短夜を悲し暗きに潮の鳴る
油じみた枕にこゝろおちつかず

廣き蟬にいつまで續くわだかまり
「都會の感觸」三輪破魔杖選

「都會の感觸」三輪破魔杖選

道頓堀を歩いて來れば心濟む
偶と思ふ難波新地の去年の夏

八月の都會の隅に生きてあり
流れ来て住む大阪の*

(1) 十五年
*(2) 友が住む九條の町の黒き泥

*(1) 路郎が広島から上阪したのは、明治31年なので、正確には14年目になる。

*(2) 当時九条に住んでいたのは、青明と水府である。

「郊外の感觸」岸本龍郎選

眼に遠く稻ののびしがこちよし
けつまつく石にも弱き病む日ころ

露を踏む足の痛さよ白き砂利
郊外のきらめき夏の深呼吸吸

郊外よ死したる如き夜のいき

堀口塊人が、「昭和前期の関西柳界(2)

関西柳界の潮流」(「ふあうすと」昭和48年6月)で、当時の日車と路郎の句を取りあげて、次のように評価している。路郎の作品の下に、「矢車」での発表号を記す。引用の誤りは訂正しておく。日車作品の出版は未調査。

色彩の白きも恋の一つなり
恋人は暗きにあつて語りけり

散る桜散らぬ桜は淋しかり
人は皆煤を払ふて明日を呼び

何見てる車掌募集の公告さ

このような日車の作品に対し、同時代の

路郎は次のような作品を示した。

淋しけれ落葉の上に上に散る 三二号

秋の葉が銅像の肩すべり落つ 三二号

浅草の残像に次ぐ欠伸かな 二九号

* 夏を病む牛の如くに日は沈む

友が住む九条の町の黒き泥 二九号

これ等二つの作品の共通性は、明治時代の川柳概念とはおよそかけはなれた異色性である。現代川柳人の眼をもつてすればさ

して問題とするに足りない句風であるが、それより後、大正時代に流行した谷脇素文

の川柳漫画の作品と比較してみれば、日車や路郎が如何に川柳界の異端者であつた

か、明らかであろう。それは試みであつた。探求であつた。川柳による表現の可能性の追求であつた。詩性川柳の習作であつた。不安定であつたが未来性があつた。後

年、路郎の主筆した「川柳雑誌」からは、幾多の異色ある好作家が輩出したが、それはあくまで路郎の習作を愛するという精神

によつて育てられた人々であつた。

* 「矢車」三〇号に掲載された水府の句。

(次回に続く)

英語 de Senryu ③

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

いつまでも 肉と 葱との 仲であれ

friends forever

like meat and onions

in Sukiyaki

仲直り 口の軽さを封じられ

reconciliation---

but she is sealed

her loosing tongue

～リバーウィローのため息～ (R.H.ブライスによる古川柳の英訳③)

ブライスは自著 SENRYU で俳句と川柳のそれぞれの特徴を実例を引きながら記述しました。今号ではブライスが *the truth* (真実) と、*the whole truth* (真実のすべて) に焦点を合わせて比較した作品を紹介しましょう。彼は「俳句は理想主義的でロマンティックなところがある。俳句は真実を語るが、真実のすべてを語ることはない」と述べます。それに対して、「川柳は真実のすべてを語るが、語ることによって、何か繊細なもの、はかない生命が萎縮してしまうことがある」と述べます。

一例として、正岡子規に俳句を学んだ日本派の重鎮である内藤鳴雪の(古御所の蓬にまぢる牡丹かな)の俳句を取り上げ、「古の栄華を失くした御所の地に、雑草の蓬と絢爛豪華な牡丹が一緒に咲いている。時と場は一つとなり、現在の中に過去の時を見る。人は自然と一体化する。牡丹と蓬の生える廃墟に、人の歴史の営みがある」と解説しています。*In the old palace grounds/Peonies grow/Among the mugwort.* と英訳し、廃墟の中で華麗に屹立して咲く牡丹に目を注ぎます。また一方、古川柳の(琴止めて薪の大きべ引き給ふ)を取り上げ、*She stops playing the harp./And takes away/Some of the fire-wood.* と英訳しています。そして「上流階級の暮らしで、暇にまかせて琵琶や琴などを弾いていた女性が、弾くことを止めて厨へ直行し、かまどの下に大量の薪を運ぶ。この川柳は少し悲観的だ。最初は中国の詩歌や日本の和歌のように始まり、そして現実の世界に引き入れる」と述べています。ブライスは、真実を語る俳句と真実のすべてを語る川柳という見解を示しました。

参考文献: R.H.Blyth, SENRYU (北星堂書店 1949)

民族の詩歌 (33)

いのち 生命のうた ②

三好 專平

「ハンセン病文学全集」(全10巻)は、大岡信、大谷藤郎、加賀乙彦、鶴見俊輔が編集にあたっている。一〜三は小説。四と五は随筆・評論。七〜九は詩・短歌・川柳・俳句。十が児童文学。

一冊約500ページ、一九二〇年代から二〇〇〇年まで約八〇年間の作品を収録する。

一九二〇年と言えば、国際連盟が発足した年である。日本では、平塚らいてうや市川房枝らが新婦人協会を結成し、また資本論が初めて邦訳されるなど、新しい息吹の感じられる年であったが、一九三四年には

日中戦争が、さらに一九四一年に大東亜戦争が起き四十五年に終結する。

差別の渦巻く中でハンセン病の人たちは次のような詩を詠んでいた。最初の一部のみの抜粋。

・力が！力がすべてを引っぱって

／地軸は回転る／薄倖な詩人が／

その運行に逆行して身を投げた(麓花冷)

・身も冷えた心も冷えた冬の夜／

隙ま漏る風の心も恨めしい(坂井新一)

・軒端を打つ／氷雨の／吐息が／

灰白く消えて／更けゆく夜。／

じりじりじり：

(河口杏二)

・くづされても又積み上げる／

打たれても尚沈黙す／半生の削塗／

ふつくら盛られた／彼の自画像よ

(坂井新一の御霊に「玉木玲児」)

・炎禍の鞭に叱咤され／病苦とたたかい／

死のベッドに転がる／このまま死ぬなん

てあまりにも惨めだ

(溝淵真澄)

・存在価値をなくした耳は／

退化し始めた／強い近視眼は／

遠景に焦点合わなくなった(島村静明)

・曲折した指に／ペンダコが出来た／

この頃／つとめて幸せであることを／

書きとめようと努力するのだが(森春樹)

・懸命に噛みしめなければ／そこには何も

ない生命もない／冷たい麦飯／これより

ほかに食べるものはない(志樹逸馬)

・あなたは バカね 針だけびつたり合わ

せて／螺子をくれなきゃあ／

私ははたらきませんよ(大和たけし)

・五月／山々を／緑にした／

山の緑が心をはずました(福島正美)

・小川の水は／なぜか哀しいほど／

わたしの手にしみる／おまえは青空を透

かし流れるからなの／

固い小石に研かれるからなの(同)

・わたしはこのときとてもうれしい／

懐かしい

(同)

愛染帖

新家 完司 選

(投句) 280名

紀の川市 辻内 次根

ゴム紐の点検をした三が日

(評)下着のゴム紐だろう。気になっていたのを取り替えてシャキッと気分一新。寝正月よりもかなり有効な三が日であった。

豊中市 南 正代

初雪でおにぎりほどの雪だるま

(評)「寒いな」と縮こまるのは老いた心。「わー雪だ!」と弾むのは若い心。雪だるまではしゃぐ童心は残しておきたいものだ。

寝屋川市 岡本 勲

行列のできない店で一人食う

(評)行列をしてまで食べたいとは思わない。「行列のできない店」でも不味いわけではない。ゆっくり出来て上等ではないか。

尼崎市 長浜 美籠

底冷えにこれぞ幸せ一人鍋

(評)鍋は大勢でやるのが最高」とは言うが、一人でのんびりも乙なもの。前向きの姿勢であれば「幸せ!」はあちこちにある。

豊中市 水野 黒兎
時間割の隙間に育つ子供たち
(評)授業中には心身共に縮こまっているが、休み時間になるとのびのび。仲間の輪の中で採まれてルールや生きる知恵がつくのだ。

米子市 見山 温子
離農する決断できず愚痴ばかり
(評)長時間労働の割には残業手当もつかず、下手すれば赤字になることもある厳しい農業。「地方創生」で活路が拓けるのだろうか。

三田市 堀 正和
どの医者も僕より若く頼りない
(評)先代の先生はあれこれ訊いてくれたが、若先生はパソコンの画面と睨めっこ。「だいたいようぶなのか?」と不安になってくる。

和歌山市 福井 菜摘
鉛筆を尖らせたまま日が暮れる
(評)ヤル気だけはあつてウォーミングアップまではOKだが。大会が迫っているのに、納得できる作品は一句も出ていない。

堺市 澤井 敏治
あれどこやこれでつしやるか それやそれ
(評)誰しも、歳をとると固有名詞が出てこなくなる。しかし、「あれ」「これ」「それ」で通じるのは長年連れ添ったおかげだ。

大阪市 笠嶋 恵美
夫逝きあの世がぐんと近くなる
(評)あの世へ行くなど真つ平御免と思つて

京都府 都倉 求芽
いたが、大切な人がそこで待っているとなれば少しも怖くない。早く行きたいぐらいだ。

鳥取市 岸本 孝子
大掃除しなくても来たお正月
元旦に合わせたように雪景色

和歌山市 楠見 章子
あれもこれも省く楽しいお正月
吹田市 太田 昭
血糖値忘れたふりの三が日
大阪府 小柏こずえ

堺市 村上 玄也
新年も去年と同じ薬飲む
きまり文句の賀状見ているお元日
寝屋川市 籠島 恵子
ああこの人も逢つておきたい年賀状
川西市 山口 不動

三田市 久保田千代
年賀状添え書きだけが口を効き
今年こそと引いたみくじが凶と出る
富田林市 片岡智恵子
おみくじを夫婦で吉と凶を引き
岡山県 池田たか子

和歌山市 磯部 義雄
三が日過ぎてカズノコ鯛を買う
堺省客客ではないよお前達
箕面市 廣島 巴子
七草を言えてほっこりお粥炊く

富田林市 山野 寿之
笹竹に欲ぶら下げてえべっさん

弘前市 高森 一吞
掘り炬燵リングのうまさ噛みしめる

青森市 守田 啓子
短日のマクドナルドの隅の席

長野県 丸山 健三
マニキュアがはみ出している花畑

芦屋市 黒田 能子
見学はもう少し後ケアホーム

河内長野市 坂上 淳司
基敵の長考鼻をほじり待つ

和歌山市 古久保和子
矯めつ眇めつクリーム舐める長い舌

冬眠の耳をくすぐる飲む誘い
ハンバーガーに鼻の低さを笑われる

米子市 竹村紀の治
湯豆腐と湯割りでひとりクリスマス

佐賀県 真島久美子
駅伝をツマミに三が日の酒

声出して笑おうこれが正解だ
コンビニの隅少年は深海魚

岡山市 丹下 凱夫
柚子湯にも入ったこれで大丈夫

十分間湯舟につかるようにする
京都府 榎本 宏子

イケメンの栄養不良気味の腰
火の用心カチカチ道の地蔵にも

長岡京市 山田 葉子
傘帽子マフラー忘れそうになる

高槻市 片山かずお
言い過ぎてお前がやれと任される

大阪市 栃尾 奏子
妥協点探してシーソーが続く

堺市 奥 時雄
外面が良すぎと妻に叱られる

奈良市 大久保眞澄
職業欄そうだおばあさんと書こう

大阪市 平井美智子
美辞麗句もらった方へ傾ぐ耳

新しい石鹸がある旅の宿
お賽銭少しはずんでいい気分

岡山市 藤成 操江
私には誰もくれないお年玉

弘前市 高瀬 霜石
ママさんは美人でなくちゃ小料理屋

町内のご隠居さんに憧れる
米子市 後藤美恵子

真の友同じサイズのハート持つ
早食いと鍋を囲むと忙しない

豊橋市 藤田 千休
プライドと恥を消し去る麻酔薬

前を見せ後ろも見せてオベ終る
大阪市 谷口 義

歳を取るとこんなことになるのか
家の前に立つてはったからご挨拶

熊本市 杉野 羅天
山越えの古道がヤブになつてゐる

鳥取市 前田 楓花
頼られてみても私は頼りない

広島市 岸本 清
妻が言うほど貧乏はしていない

三田市 上垣キヨミ
固い肉親の仇のように噛む

岸和田市 松崎 大輔
なぜ負けた形状記憶してたのに

橿原市 居谷真理子
日本人ですお辞儀は下手ですが

倉吉市 牧野 芳光
始祖鳥の末裔らしきサギの声

シドニー 坂上のり子
ぼろぼろの私の辞書に泣いた姉

奈良県 安福 和夫
その内にメールで香り届くかも

堺市 矢倉 五月
もう処分しますバジヤマのペアルック

大阪府 藤田 武人
シャンパンが似合う老後を目指します

大阪市 あまのこーな
目に毒なCMばかり血糖値

松江市 石橋 芳山
どす黒い私を隠せないでいる

人間はゴミ製造機だと思ふ
大阪市 大川 桃花

尼崎市 市坪 武臣
両隣マドンナが居る古稀の宴

堺市 加島 由一
ほろ酔いに着物姿はみな美人

羽曳野市 宇都宮ちづる
雪の宿古稀の女子会蟹三昧

大阪府 畑中 節子
宿浴衣心も口も軽くなり

弘前市 稲見 則彦
雪の嵩酒の量との相関図

三田市 福田 好文
羞恥心徐々に薄める酒二合

札幌市 三浦 強一
熱爛とビールで対処寒暖差

大阪市 佐藤 忠昭
初詣串にたこ焼おでん冷

松江市 中筋 弘充
お神酒には絶対向いてないビール

大阪市 江島谷勝弘
忙しいときほど酒とメシ旨い

大阪市 奥村 五月
酒止めて長生きなんてしたくない

藤井寺市 鈴木いさお
僕の肝臓休肝日など喜ばぬ

大阪市 井丸 昌紀
一生分決まってるとか酒の量

八王子市 川名 洋子
くらくらすするイケメンにまだ会えぬ

寝屋川市 富山ルイ子
本社句会八十年代が皆元氣

松江市 三島 淞丘
雅号八分本名二分で生きている

河内長野市 黒岩 靖博
お前もか俺も没だと握手する

鳥取市 永原 昌鼓
ストレスの種は没句の山にある

河内長野市 梶原 弘光
川柳で磨き倒せば脳に艶

大洲市 花岡 順子
手探りで深夜の句想ミズ文字

鳥取市 岸本 宏章
遺産分け手作り句集だけ遺す

東かがわ市 川崎ひかり
我家にも国旗たしかにあった筈

三原市 鴨田 昭紀
オギヤーから始まるサバイバルゲーム

長岡京市 日置みどり
シワシワの手にご褒美の保湿剤

明石市 桃谷 和郎
タコヤキを食う時タコの顔になる

海都市 小谷 小雪
反射テープ小粋でないが身に付ける

香芝市 大内 朝子
さらさらもピカピカも好き淋しがり

鳥取市 池澤 大鯨
足腰が背伸びはじめる春を待つ

京都市 櫻崎 篤子
神々のたわむれ春が遅く来る

河内長野市 松岡 篤
歌聞いて怖い部長に親しみが

鳥取県 斉尾くにこ
団塊で混みあつてます再検査

安来市 原 煩悩児
白い息砂丘の駱駝冬に入る

和歌山市 柏原 夕胡
正月太り着ぶくれですと言つておく

池田市 上山 堅坊
うすうすと感じながらも言えぬ愛

藤井寺市 太田扶美代
ホッカイロ袍に入れて冬の旅

唐津市 山口 高明
平和産業だけでは伸びぬGDP

貝塚市 吉道あかね
お互いに歳を取ったね同じだけ

和歌山市 喜田 准一
これという用もないのに腹は空く

鳥取市 田中 天翔
鍋焦がしそつと水入れ隅つこに

高槻市 左右田康雄
なるようになるさ気ままな共白髪

高知市 小川てるみ
年明けの値上げラッシュに身が細る

河内長野市 渡邊 修
聴診器たまに当てられ動悸鳴る

米子市 吉田 陽子
タコ焼き器捨てたら作りたくなった

大阪市 田浦 實
日中韓くぐってほしい罫り口

島取市 大前 安子
歯を磨くあなたに笑顔見せたくて

芦屋市 竹山千賀子
前後左右確認をして出遅れる

高槻市 富田 美義
嫌なことパスし余生は好きなこと

大阪市 柴本ばつは
働き者口もまめだが胃も腸も

沖縄県 森山 文切
僕ばかり止める改札口のバー

尼崎市 春城 年代
寝そびれて恋のドラマを見せしもう

八尾市 高杉 千歩
戦死した兄の無念を生きている

松山市 栗田 忠士
ネクタイも三本あれば済む老後

島取市 奥田 由美
散歩中お札も拾うポチの鼻

堺市 大和 峯二
ウォーキング良い知恵めぐる時間帯

橿原市 安土 理恵
一割負担おくすりだけは貰っとく

大阪市 坂 裕之
譲りますでも此処までと線は引く

豊中市 松尾美智代
きつねうどん我が家の昼の匂いです

豊中市 藤井 則彦
禁煙をしてもお金は溜まらない

唐津市 吉富 節子
つり銭で買ったくじです米五キロ

神戸市 松井 文香
片恋の炎も消えて日日空虚

青森県 松山 芳生
新しい嘘つきにおうこの時世

尼崎市 藤岡 りこ
小犬ほど大型犬に吠えかかる

大阪市 太田としお
一年を感謝感謝で締めくくる

八幡市 今井万紗子
もう二度と打つ事のないラブメール

倉吉市 中村 綾
使い道探しています体脂肪

奈良県 渡辺 富子
思い出の引き出し整理できません

大洲市 中居 善信
軽トラが一台あればすむ田舎

八尾市 宮崎シマ子
味噌仕立ての雑煮こつり生きてやる

堺市 遠山 唯教
冬型の気圧配置がいやになる

大阪府 米澤 俣子
おいしいね言える相手がいてくれる

島取市 谷口回春子
心の中が寒くなったり熱くなったり

松山市 神野きっこ
忙しい時ほど頭よく回る

橋本市 石田 隆彦
真剣に叱った母の名演技

貝塚市 石田ひろ子
柏汁の湯気から亡母が滲み出る

小野市 藤原 泰宏
どの顔もちよつと崩れた同窓会

鳥取県 山下 節子
温度差の読めない席で畏まる

奈良市 辻内げんえい
ノーベル賞祝い我が家もLED

防府市 坂本 加代
猫族は小さな音にも飛び上がる

神戸市 奥澤洋次郎
梅一輪今伸び盛り七十四

紀の川市 楠原 富香
たわなに実る柿は隣の敷地内

高槻市 原 洋志
恥じらいの減った分だけ肉がつき

和歌山市 松尾 和香
知恵くらべ曾孫と遊ぶお正月

枚方市 松原 保
事始め背筋伸ばして歩きます

島取市 吉田 弘子
アイウエオ順ビリで良いとき悪いとき

共選欄

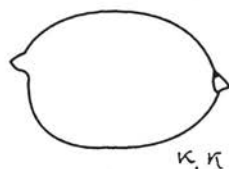
檸檬

檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 368名)



「羽ばたく」

牧野 芳光 選

明日からとんで行きなと言う証書
もう一度羽ばたいてみる新任地
しがらみを捨てて六十路のストレッチ
羽ばたいて意外と軽い古稀の靴
定年後は町内で羽ばたく夫
子が巣立ち妻も羽ばたき日向ぼこ
羽ばたく日涙は見せぬ鬼コーチ
村中で羽ばたき守るここの鳥
羽ばたいて子らも諭吉も東京へ
羽ばたいてスワンになった私です
よれよれの翼ひろげて羽ばたこう
羽ばたいたって動物園の檻の中
老い二人スカイツリーで鳥になる
酒断つと羽ばたく夢も見なくなる
今日こそを繰り返して羽繕い

佐渡市	高野	不二
横浜市	菊地	政勝
貝塚市	吉道あかね	
備前市	森 ふみか	
京都市	榎本 宏子	
八王子市	川名 洋子	
調布市	伊勢田 毅	
藤井寺市	田付 絹枝	
弘前市	浅田 隆樹	
高石市	浅野 房子	
藤井寺市	増井ヨシ枝	
枚方市	寺川 弘一	
札幌市	三浦 強一	
西宮市	片山 忠	
富田林市	中村 恵	

「羽ばたく」

古久保 和子 選

羊にも羽ばたく気概持つている
羽ばたく子の空の青さよ無限大
羽ばたきは運命線を探すため
一呼吸おいてはばたく老いの羽根
空高くはばたけ子等よ恋をしろ
羽ばたけと子供の背をぐつと押す
レジエンドを目指し羽ばたくジャンプ台
娘の部屋で羽ばたく準備する気配
日本はどこへ羽ばたくべきなのか
酒断つと羽ばたく夢も見なくなる
羽ばたいた途端ぎっくり腰になる
羽ばたけば明日という日が見えてくる
翔ぶ妻に置いてけぼりの退職後
羽ばたけばきつと追い風向かい風
羽ばたきを促すように春の風

大阪市	近藤 正
島根県	伊藤 寿美
長野県	丸山 健三
吹田市	木下 敏子
河内長野市	村上 直樹
高槻市	片山かずお
箕面市	寺井 柳童
八王子市	川名 洋子
唐津市	仁部 四郎
西宮市	片山 忠
堺市	村上 玄也
狭山市	矢野 梓
加西市	金川 宣子
和歌山市	玉置 当代
芦屋市	黒田 能子

羽ばたけと巢立つ背中に里の風
 乱気流抜けて羽ばたく夢あまた
 羽ばたきへそつと促す向い風
 羽ばたいた記憶探っているあひる
 合併をしても羽ばたけない過疎地
 上昇志向外野は野心などと言う
 花丸を貰い羽ばたくランドセル
 転んでも自転車に羽根生えてくる
 ストレッチ皺の数だけ羽ばたこう
 妻の手の上で羽ばたく伝書鳩
 大空へわが子を送りたい駝鳥
 羽ばたいた筈の息子が家に居る
 羽ばたいたはずの娘がブーメラン
 羽ばたいたはずが毎日里がえり
 ポケットの石を握って羽ばたくぞ
 本心は空を羽ばたきたい駝鳥
 羽搏きの息潜めてる戦力外
 負けん気がまだ残ってる羽繕い
 羽ばたけと推した元部下見上げてる
 酒二合羽ばたくボクの必需品
 羽ばたき続けて胡蝶蘭になった
 羽ばたこう六法全書など捨てて
 悔しさを胸に羽ばたく日へ挑む

三田市	九村	義徳
奈良県	渡辺	富子
高知市	小川	てるみ
大阪市	古今堂	蕉子
宇部市	平田	実男
弘前市	高瀬	漱石
枚方市	伊達	郁夫
海南市	小谷	小雪
羽曳野市	徳山	みつこ
大阪市	大西	晴雄
豊橋市	藤田	千休
神戸市	山崎	武彦
和歌山市	磯部	義雄
米子市	後藤	宏之
西宮市	緒方	美津子
藤井寺市	鈴木	いさお
大阪府	初山	隆盛
大山市	金子	美千代
奈良市	辻内	げんえい
松原市	森松	まつお
富田林市	中井	アキ
青森市	守田	啓子
香芝市	大内	朝子

懇ろにされて羽ばたく津軽風
 震災を超えて羽ばたくフェニックス
 寝苦しい闇に羽ばたくムシクの絵
 羽ばたけばきつと希望のドアが開く
 羽ばたいて失うものの多かりき
 羽ばたいた記憶探っているあひる
 羽ばたいて悩み事など吹き飛ばす
 羽ばたいて境界線を越えてみる
 合併をしても羽ばたけない過疎地
 合格で羽ばたく明日を切り拓く
 羽ばたいて老いの呼吸を整える
 悔しさを胸に羽ばたく日へ挑む
 羽ばたいてみた日もあった背番号
 羽ばたきを教えた子らが戻らない
 負けん気がまだ残ってる羽繕い
 羽ばたいてホームシックを知らない子
 シャガールの羽ばたくような女の子
 羽ばたきの少し手前にある動悸
 ばたばたと羽ばたく孫の両手足
 家族みな好きに羽ばたく日曜日
 ルーキーの羽ばたく音を聞いている
 飛ぶために肉を魚に変えました
 一冊の本が羽ばたくヒントくれ

弘前市	吉川	ひとし
川西市	西内	朋月
橋本市	石田	隆彦
岩出市	藤原	はのか
佐賀県	真島	久美子
大阪市	古今堂	蕉子
和歌山市	柏原	夕胡
吹田市	大谷	篤子
宇部市	平田	実男
和歌山市	喜田	准一
高槻市	松岡	重子
香芝市	大内	朝子
岡山県	田中	恵
鳥取県	細田	裕花
大山市	金子	美千代
南あわじ市	萩原	狸月
羽曳野市	三好	専平
大和郡山市	坊農	柳弘
奈良市	米田	恭昌
高槻市	原	洋志
大洲市	花岡	順子
貝塚市	吉道	あかね
枚方市	小林	わこ

ハローワーク羽ばたく空を模索する
 シャガールの羽ばたくような女の子
 からかいが羽ばたく種になりました
 羽ばたいてみよう指輪を抜いておく
 大空を思い切り蹴る呱呱の声
 この橋を渡ればいつか羽ばたける
 羽ばたいて辿り着く掌の上
 イカロスの羽は隠したUターン
 羽ばたいてジタバタ僕の虚栄心
 羽ばたけと解いてやりたい千羽鶴
 家族みな好きに羽ばたく日曜日
 羽ばたきを恐れはじめたナッツたち
 屋台から料亭までの立志伝
 図書館へ直行鳥になるために
 カルテから羽ばたく鶴を今日も折る
 羽根生えた妻が今夜も戻らない
 羽ばたけば風も優しく向きを変え
 羽ばたきは遠いが看とる手は止めぬ
 羽ばたけともずっと手元にもと思う

秀句

尾道市	大本	和子
羽曳野市	三好	専平
鳥取市	大前	安子
和泉市	横山	捷也
大阪市	江島谷勝弘	
大阪市	榎本日の出	
大阪市	井丸	昌紀
茨木市	島田	誠一
大阪市	栃尾	奏子
堺市	梅木	澄空
高槻市	原	洋志
松江市	相見	柳歩
三田市	堀	正和
青森県	松山	芳生
大阪市	升成	好
大阪市	平井美智子	
大阪市	若本	安代
西宮市	秋元	てる
高槻市	片山かずお	
岡山県	田中	恵
奈良市	大久保眞澄	
弘前市	福士	慕情

あさってへ羽ばたいているランドセル
 エネルギー溜めて羽ばたく時を待つ
 猛禽の雛は猛禽の羽ばたき
 年金が羽ばたいていく忙しい
 ホップステップ何がひとつ足りません
 若者の羽ばたく春だ頼母しい
 まだ翔べる紙と鉛筆離さない
 千代紙は亀より鶴に折られたい
 羽ばたいてみるとボキボキ骨がなる
 羽ばたいて飛べるか腕を振ってみる
 古い二人スカイツリーで鳥になる
 羽ばたいて分かるこの世のあれやこれ
 ハローワーク羽ばたく空を模索する
 まだ二十世間は甘くない羽音
 羽ばたいて今日一日を塗りかえる
 羽ばたいたつもり小川が飛べました
 子の巣立ちちよつと嫉妬の目で送る
 羽ばたいて地球丸ごと俯瞰する
 放たれた朱鷺を見送る輝く目

秀句

堺市	柿花	和夫
米子市	中原	章子
紀の川市	辻内	次根
米子市	後藤	宏之
松江市	石橋	芳山
四條畷市	吉岡	修
岡山県	池田たか子	
弘前市	高瀬	霜石
松原市	森松まつお	
鳥取県	竹信	照彦
札幌市	三浦	強一
奈良市	岩本	浩二
尾道市	大本	和子
雲南市	松本	昌
田辺市	大峠	可動
鳥取市	福西	茶子
奈良市	大久保眞澄	
東大阪市	佐々木満作	
大阪市	伏見	雅明
鳥取市	竹口	清信
備前市	森	ふみか
奈良県	渡辺	富子

「氣 迫」

(投句 200名)

長 浜 美 籠 選



柏手に氣迫を込める初詣
モンゴルの氣迫に庄されてる和製
詰め放題主婦の氣迫も袋詰め
仕切り線氣迫がこもる時間前
だんじりの辻の回しにある氣迫
まだ生きる氣迫あり要介護
新年の意氣込みあつた松の内
「打つてみる」と氣迫で投げるド真ん中
負けたけど勝者に勝っていた氣迫
面接で目だけ見ていた試験官
負ける氣がしない私の竹刀ダコ
孫叱る氣力応戦する氣力
身を捨てた覚悟は湧いてくる氣迫
老木の芯へ氣迫はまだ確か
生まれ落ち仔馬氣迫で立ち上がる
二番手の氣迫背中を押しくくる
肩書きに負けるものかと体当り
生きたいと思う氣迫のスクワット
マラちゃん教典読めとよく言った
どこへ行つたか探すわたしの氣迫

三田市	上垣キヨミ	東大阪市	佐々木満作
河内長野市	谷 久美子	弘前市	高森 一吞
池田市	上山 堅坊	鳥取市	土橋 螢
三田市	北野 哲男	西宮市	足立 茂
奈良市	米田 恭昌	三田市	多田 雅尚
佐賀県	真島久美子	鳥取市	福西 茶子
神戸市	奥澤洋次郎	鳥取県	石谷美恵子
弘前市	福士 慕情	大洲市	花岡 順子
大阪市	坂 裕之	豊中市	松尾美智代
三田市	堀 正和	八尾市	村上ミツ子

イエスマン初めてノーと言う氣迫
大人しい人だが語尾にある氣迫
太陽に負けぬ氣迫で花は咲く
筆太の賀状に満ちている氣迫
復興の現場氣迫のシヨベルカー
D51の氣迫の汽笛懐かしい
父さんがボクを柱に縛つた日
アンカーの氣迫見事なごぼう抜き
負けるなよ私と付けるイヤリング
職辞する覚悟で主張まくし立て
限界の壁破るまで生きてやる
わたくしの氣迫で春が匂い出す

佳 句

昭和一桁立派な小骨持っている
壁ドンの氣迫が欲しいプロボーズ
喜寿の坂嫁です姑です介護中
コンバクト氣迫の眉が出来上がる
喝一字父が一氣に書いた軸

人

技術なら負けてなると町工場

地

朝稽古寒い辛い口にせぬ

天

黒々と氣迫を込めて書く断酒

軸

スタミナは充分氣迫枯れるまで

三田市	福田 好文	三原市	鴨田 昭紀
松原市	森松まつお	堺市	居谷真理子
長野県	丸山 健三	青森県	村上 玄也
松江市	三島 淞丘	生駒市	飛永ふりこ
貝塚市	石田ひろ子	弘前市	高瀬 霜石
枚方市	寺川 弘一	大阪市	高杉 力
岡山県	紫 しめの	神戸市	山田婦美子
三原市	居谷真理子	鳥取市	大前 安子
橋本市	村上 玄也	富田林市	関 よしみ
橋本市	石田 隆彦		
大阪市	板東 倫子		
和泉市	横山 捷也		

「手探り」

小 川 てるみ 選

(投句 176名)



二〇一五また手探りの幕が開く
瓦礫から手探りで出た震災忌
震災のあの朝真の闇だった
手探りの中で灯りを見た安堵
手探りの愛を求めて雪こんこ
手探りで恋もしました春ラララ
手探りの冒険だった若かった
手探りでやっとみつけた自分流
二人なら出口探しも厭わない
手探りで覚えた技は忘れない
山のものともまだ手探りの医の卵
手探りで太く育った樹の根っこ
手探りは母を亡くしてから闇
手探りで感触を得た試作品
手探りの苦勞を語る創業者
笑顔ない握手だったが第一歩
少しづつ押してまとめる打開策
終章を飾る美学を模索する
手探りの農に馴染んで五十年
リスキーを恐れず手探りで進む

松江市	三島	浜丘
三田市	北野	哲男
大阪市	古今堂	蕉子
大洲市	花岡	順子
鳥取市	土橋	螢
八幡市	今井万紗子	
鳥取市	吉田	弘子
神戸市	松井	文香
八王子市	川名	洋子
鳥取市	岸本	宏章
西予市	黒田	茂代
堺市	矢倉	五月
八尾市	宮崎シマ子	
東大阪市	佐々木満作	
堺市	村上	玄也
四條畷市	吉岡	修
西宮市	足立	茂
鳥取市	福西	茶子
鳥取県	西谷	悦子
三原市	鴨田	昭紀

どこまでも続く福祉の置きどころ
晩学へまず手探りの入門書
難病にまだ手探りの治療法
手さぐりで生きた昭和の混乱期
手探りで来いとつれない闇魔さま
暗闇で触れた温みを信じよう
生きがいへ老いの模索がまだ続く
手探りで生きたひとりの長い道
手探りの廃炉作業にもう四年
勘だけが頼りの杖と二人連れ
手探りの明日に夢をふくらませ
平均寿命越えて明日への白い地図

佳 句

手探りで道切り開くパイオニア
ポケットを探れば想い出の欠片
手探りの明日を掴む始発駅
手探りで確と掴んだ赤い糸
八起き目を奈落の底で模索する

人

予言者の靴の中にあるダイス

地

手探りでつかんだ藁があつたかい

天

手探りで掴んだ運が走り出す

軸

手探りで来た人生の着地点

青森県	松山	芳生
弘前市	福士	慕情
南あわじ市	萩原	狸月
大洲市	中居	善信
香南市	桑名	孝雄
榎原市	居谷真理子	
奈良県	渡辺	富子
和歌山市	松尾	和香
河内長野市	坂上	淳司
豊橋市	藤田	千休
和歌山市	福井	菜摘
神戸市	山田婦美子	
大阪市	伏見	雅明
藤井寺市	太田扶美代	
紀の川市	宇野	幹子
吹田市	木下	敏子
弘前市	今	愁女
弘前市	高瀬	霜石
和歌山市	北原	昭枝
和歌山市	武本	碧

「トンネル」

(投句 195名)

山 野 寿 之 選



トンネルの車窓に踊る宇宙人
トンネルの出口が見えぬ拉致家族
トンネルを早く抜きたい被災の地
トンネルの出口を信じ汗をかく
昭和史のトンネル抜けて生きのびる
トンネルの窓の鏡で身繕い
地下街を出たら電飾御堂筋
トンネルが山の誇りに穴を開け
サヨナラ打は名手の股間抜けたゴロ
抜け穴の中にあつたのは横道
知り過ぎた恋のトンネル抜けられぬ
溜息を吐くたびトンネルが伸びる
不祥事が甲子園への道阻む
トンネルを抜ければきつとある希望
トンネルの向こうはきつと新天地
トンネルをやつと抜け出たニートの子
トンネルに入ると過去が話しかけ
トンネルを抜けるとあららつ黄泉のくに
トンネルを掘られマグマがくしゃみする
トンネルを抜ける汗なら惜しまない

富田林市 中村 恵
米子市 中原 章子
池田市 上山 堅坊
唐津市 坂本 蜂朗
大阪市 柴本ばつは
大阪府 米澤 俣子
三田市 北野 哲男
南あわじ市 萩原 狸月
東大阪市 佐々木満作
富田林市 関 よしみ
大和郡山市 坊農 柳弘
松江市 石橋 芳山
大阪市 古今堂蕉子
奈良県 渡辺 富子
藤井寺市 鈴木いさお
奈良市 米田 恭昌
羽曳野市 吉村久仁雄
富田林市 中井 アキ
堺市 澤井 敏治
札幌市 三浦 強一

トンネルを抜けたデツカクなった君
トンネルを抜け出たバネはよく弾む
被災者に長いトンネル仮設の日
トンネルに都会を脱いでイターン
トンネルを抜けるとカニが待っている
トンネルで父との絆知る砂場
トンネルを抜けると春のドア開く
紅葉トンネルくぐれば夫の手が温い
トンネルの中でもしやを身構える
島と陸繋いだ海底の握手
トンネルのアラ暴き出す内視鏡
幾つめのトンネル雨期はまだ続く
佳 句
愛の球トンネルしないハート持つ
トンネルを抜けたら春が飛んでくる
免疫力アップ トンネルを抜ける
洞門の始めは独り鑿一つ
トンネルの中で蹴いたのが堆肥
人
廃線のトンネル酒を眠らせる
地
トンネルの長さ知らないままに春
天
トンネルを抜けて歩幅が広くなる
軸
青春のトンネルパツとサクラ咲く

横浜市 川島 良子
鳥取市 大前 安子
東大阪市 北村 賢子
明石市 梶谷 和郎
三田市 堀 正和
西宮市 足立 茂
八尾市 宮西 弥生
八幡市 今井万紗子
河内長野市 木見谷孝代
青森県 松山 芳生
奈良市 大久保真澄
藤井寺市 太田扶美代
米子市 後藤美恵子
鳥取市 土橋 螢
弘前市 高瀬 霜石
横原市 居谷真理子
鳥取市 福西 茶子
弘前市 福士 慕情
佐賀県 真島久美子
和歌山市 福井 菜摘

初より教の室

題一 占う

山口 光久

川柳塔誌に一月号から印象吟のコーナーが設けられました。各地の句会の一部にこの印象吟（またはイメージ吟）の課題を設けているところがあります。

印象吟は課題吟の一種で、前もって図形や絵画、写真などを提示し、これから得られるイメージや感想をもとに作句するのです。

名所旧跡、名園などへ行き、その場で目に触れたすべての物を句材として作句する、これが囑目吟です。課題は定めず、視界に入っただけの事象を詠むのです。これを目的とする句会を吟行会といっています。

最近の吟行会は本来のものと違い、現地で目の触れた事象を詠むのではなく、前もって課題が知らされています。句会場での課題吟と変わりません。単に句会場が変わるだけになります。私が行った吟行会は遊園地や保養地、ゴルフ場がありました。

古川柳から一句拾ってみました。

本ぶりになって出て行く雨やどり

〔添削〕

原 茶柱立つ嬉しい予感香り来る 福貴子

ばつんばつんと句が切れた感じがします。

自然とリズムも悪くなります。それに、結語が気になります。座五とも言われ、句の

座りを良くする結語（下五）を大切にしましょう。

添 茶柱が立つて嬉しい子の門出

原 初踊り卒寿占うまだ元氣 ミヨノ

卒寿で踊りとは素晴らしいです。勿論、元

氣だから踊りができるのです。占いの結果

が欲しいですね。

添 踊り初め卒寿占い吉と出る

原 占いに支配をされるナマケモノ 智史

下五がびつたりかどうか、外に適切な言葉

はないか探してみましよう。

添 占いに支配をされる思考力

次の三句は中八の句です。破調になるとり

ズムも悪くなります。

原 ビリケンの足裏を撫でる今日の運 高道子

添 ビリケンの足裏撫でる今日の運

原 頼つても占い通りに進まない 高弥生

添 頼つても占い通り進まない

原 占いで宝くじ買に大当り

添 占いで買ったクジだがやはり駄目

原 明日の空下駄で占う昭和の日 孔一

昔、下駄を飛ばして天気を取ったものです。

明日天気になって欲しいのは何か行事があるからでしょう。「昭和の日」では物足り

ない感じがします。

添 明日の天気下駄で占う花見酒

原 占いで決めてよいのかこの大事 狸月

添 占いで決めてはならぬこの大事

原 シュレッター出来ずに残すくじの紙 宏子

添 シュレッター出来ずに残す外れ籤

原 占いを信じ入り込む孫の縁 節子

添 占いを信じて頼る孫の縁

原 外れても責任はない占い師 忠士

添 外れても責任持たぬ占い師

原 星占い信じる質で自重する 国和

添 星占い信じる質で臆縮く

原 占えば膨らむだけの迷い種 元三

添 占えば迷いの種が膨らんで

原 念押しが欲しくて並ぶ占い屋 恭子

添 念押しが欲しく占いやってみる

原 占いに儲かりますか聞くと野暮 喬

添 儲かりますと決して言わない占い師

山久子

添占い師自分自身は占えぬ

原夢ばかり書いたアミタを引いている 安子

添夢いっぱい描いて占いかぶれてる

原おみくじは毎年同じ吉が出る 開子

添おみくじは毎年吉と出る不思議

原占なつて就活したが家を継ぐ 洋一

添占いを信じ就活したが駄目

原大吉が出るまでおみくじ買う習性 和香子

添大吉が出るまで買っている神籤

原事始め大安選び決めている (見)温子

添事始め大安選びゲン担ぐ

【少しの修正でよくなる句】

原占いは信じてないが気にはなる 満知子

添占いは信じてないが気にかかる

原初詣大吉引いて気持ち晴れ モモ

添初詣大吉引いてるんるんと

原占いで嫁のお腹に福の神 紀美恵

添占いで嫁のお腹に福宿る

原朝刊の今日の運勢たしかめる 治子

添朝刊の今日の運勢信じてる

原占いはほんろうされる時もある 登子

添占いに翻弄される情けなさ

原おみくじで占う今年きつと吉 英男

添おみくじで占う今年信じてる

原初詣で吉が出るまでみくじ引き まさる

添初詣で吉が出るまで引く神籤

原占いを信じすぎでは怪我をする

添占いを信じ込んだら怪我をする

原占いも頼る迷った日のころ

添占いに頼る迷った日のころ

【入選句】

ひつじ年きつと穏和な日が続く

新年の運勢如何に初詣

大吉が出るまで通う宮詣り

大吉に後押しされて逢いに行く

占師やんわり濁す言葉尻

大吉を手にするまでは何度でも

トランプの恋占いで彼チェック

運勢を神に委ねてマイウェイ

占いに夢を託した青年期

早世の相と言われて喜寿を越え

吉が出た今年良い事ある予感

初詣中吉引いて安堵する

占い師笹竹束ね景気祝る

占いを信じて買った宝くじ

占い師靈感よりものせ上手

あみだ籤はずれも楽しいタイム

どん底ですがつてみたい占い師

仕事一途恋占いもせず老いる

占いは信じぬ夫が神籤引く

忠貞

のり子

つな子

晶子

和宏

洋子

純子

絹枝

弘子

友子

こずえ

紀雄

勝治

義雄

風花

ひろこ

天翔

和之

心咲

占いを信じて息子まだ一人

大凶を笑えるほどの度量なく

生命線長く通帳気にしてる

花びらに恋を占う浅き春

手相では早婚なのに縁がない

外れても裁判沙汰は未だ無い

大吉が出るまで引いたお正月

【佳句】

占うたびに煩惱行き場見失う

たかが寿司されど幸せ呼ぶ恵方

大凶と聞いて保てた夫婦仲

アミダくじ角を曲がれば晴になる

星占いはつこり夢をふくらます

【今月の推せん句】

占いが迷う心に輪をかける

決断を下さねばならない時、迷いが生じる

のは誰しも同じこと。占いにより迷いが更

に深くなることもあるでしょう。

占いで朝の会話が弾み出す

占いが話題となり朝の夫婦の会話を弾むで

しょう。普段と違った楽しい一時かも。

将来の日本占う選挙戦 神野きつこ

日本の将来を占うのは矢張り総選挙です。

【私の句】

占いにことさらそっぽ向いている

ひとし

(川)真理子

亜希子

昭枝

武人

泰宏

加代

回春子

律子

由美

(富)恵子

富香

山下 凱柳

川柳塔鑑賞

同人吟 福士慕情

— 2月号から —

新しい年の川柳大会や誌上大会がスタートを切った。大会でいい結果を残そうとする人、大会に関係なく自分の句を楽しんでいる人、いずれにしても私たちは「川柳は人間陶冶の詩である、一句を遺せ」を目指したいものである。

詳しくはホームページという手抜き

高瀬霜石

チラシやテレビのコマーシャルを見ても確かにホームページをご覧下さいとある。しかし、IT音痴でパソコンもスマホも持たない私はホームページを開示、検索することも出来ず諦めるしかない。

何もせず文句が言えるのが凄

片山かずお

良くても悪くても結果だけを見て騒ぐ人がある。ならば自分でその一端を担えばいいのにそれはない。体制の尻尾にぶら下がり、ただ吠えている輩は政治家の中にも見受けられる。

りんご剥くテレビの中は吹雪いている

古今堂 蕉子

作者が剥いているりんごは青森産に違いない。ふとテレビを観ると例年に無い青森の豪雪のニュースが流れている。りんごを送ってくれた知人の難儀を思い浮かべている。

点と線結ぶと語りだす星座

両川無限

一つひとつの星は各々自己主張するように光を放っている。人や動物、楽器などに神話の世界が広がる星空に、自分なりに星を繋いで楽しむのも一興である。

矢印に助言が欲しい曲り角

小谷集一

方向を示すだけ何の変哲もない矢印、迷わないように目的地へ行きたいのだが、矢印の通りで良いのか不安になることがある、そんな時に目的地へのちよつとしたコメントがあれば嬉しい。

頼みごとやんわり言葉化粧する

升成 好

言葉を化粧するという発想が素晴らしい。採み手をしながら酒を注ぎに来るよりも、ずっと効果があるように思う。川柳も五七五に化粧している。

宮仕え集大成の家一軒

梶原弘光

定年退職まで恙無く勤め上げ、退職金を元に念願のマイホームを手に入れる。一国一城の主になって身の振り方を考える。再就職が年金暮らしか。

手は打った汗は流した今は待つ

岩佐ダン吉

やるべき事は総てやった。爽快感に浸りながら。今は結果を待つしかない。自分にとって不本意な結果であつても何の後悔もない。

医者よりも妻が知ってる僕のこと

肥山一文

主人の事を思っている奥さんが居ることは幸せである。体調管理は勿論、衣食住に気を配り、医者から貰う処方薬も妻が管理してくれる。医者は病気だけは診てくれるが妻は僕の全てを把握している。

ゆつくりと朽ちて変化に気がつかず

吉村久仁雄

時間が掛ければ掛かるほど変化には気づかない。長年連れ添った妻もあの頃とは似ても似つかぬ容貌になっているが、何時も側に居て見ているので過程が見えて来ない、妻も多分そう思っている。

生き字引ひとりよがりの百年史

高杉千歩

米寿を越えられた千歩さん、絵を描き、川柳を詠み、パソコンを使いこなす女傑である。周囲から頼りにされているのは周知の通りである。百歳に向かって自分史を編集集中である。

見たような顔やと頭下げておく

矢倉五月

曖昧な記憶の中で、向こうから来る人は、何処かで会っているような気がする。人違いであつても軽く会釈をする作者、律儀な温かい人柄が偲ばれる。

いい年であつたと風呂の湯が溢れ

長浜美龍

溢れるお風呂に身を沈めて、一年を回顧すると、悪いことより良い事のほうが多かったと、笑みが零れる。

抜くために釘の頭はついている

藤井宏造

釘の頭は抜くためにあつたとは言いて妙である。抜いて打ち直し出来た釘。近頃は頭が十字に刻まれた螺旋状の釘をドリルで打ち付ける。抜くのが一苦労。

十人も寄れば御の字クラス会

西内朋月

後期高齢者になると、亡くなられた方、施設に入居されていたり、病氣療養中の方とか年々クラス会の参加者が減ってくる。クラス会も健康でなければ行けないのである。

過去帳の最長老になりそうだ

北野哲男

仏壇に置かれてある過去帳、減多に取り出して見る事も無いが代を遡って先祖の死亡年月日など記されている。代々の最年長を是非抜いて欲しいと思う。

校名が変わる最後のクラス会

松尾和香

朋月さんの句も寂しいが、このクラス会もまた身につまされる。町内合併か少子化のせいかな、いずれにしてもかつて通った母校の名称が変わるのである。

詩や歌になる雪命まで奪う

竹信照彦

新雪を初めて見た人が、「メルヘンの世界」と喜んでいた。雪の怖さを知る人は苦笑いするしかない。屋根雪の下敷きや冬山の遭難、雪女という怖い妖怪もいる。

高齢の町葬儀屋がいそがしい

西谷悦子

私の住んでいる団地も四十年を過ぎて、働き盛りだった人達も殆んどが高齢者となり、一人暮らしが多くなっている。救急車が頻繁に走り。亡くなる方も多い。

水加減火加減とゆうかくし味

平田実男

ご飯を炊くのに「始めチヨロチヨロ中パツパ 赤子泣いても蓋とるな」と美味しいご飯の炊き方を言っている。まさに水加減火加減なのである。煮るにしても焼くにしても、隠し味の基本がここにある。

愛憎のはさまを洗う介護の掌

岡本花匠

きれいな事だけでは介護は出来ない。素直に言うことを聞いているうちはいいがそうもいかず介護を放棄したくなる事もある。これも自分への試練と掌を見る。

水煙抄鑑賞

— 2月号から

江 見 清

晩酌のあては対座の妻の声

藤 田 武 人

奥さんの話はいつも似ているようでも違ふ。ご近所話、身内の事、タレントの話にまでネタは尽きない。相槌を打ち、決して逆らわず、それで?と時々合いの手も入れて晩酌は終わる。夫婦善哉

鮎色の玉葱に見る処世術

石 田 ひろ子

みじん切りにされ煮詰められ、わが身を崩して主役を引き立たす玉葱。処世術としての着眼点に脱帽、涙が出る。

老母と乗る夜汽車過去へと走り出す

森 ふみか

夜汽車は車内も静かで乗客も少なくなってくる。老いた母は娘に戦前戦中の苦勞話を語り出す。以前に聞いた話でも聞いて上げる。母は語部だ。

その昔恋した人の句に出会う

藤 後 卓 也

昔の恋人の名を思いもかけず句報で見つけた。名前と句を何度も読み返しながら当時の思い出を辿り、今の自分に無理に繋げようとしている自分に気付く。

枯葉でも煌きながら散っていく

安 福 和 夫

枯葉は赤、紅、茶褐色他、様々な色のまま最後の輝きを見せてくれる。煌めきながら散る事のできる高齢者でありたいと思う。

体重計先ずは片足乗せてみる

坂 本 とも湖

太ってしまったかな?と気にしている人はサツとは乗らない。片足を置いて一呼吸、意味のない秤の目盛を見て、そつともう一つの脚を載せる。人の氣も知らず体重計は容赦をしない。

道草が好きで尻尾の位置にいる

東 横 ますみ

人生は短い。してみたい事は多い。道草の多さが、人や物事との出会いを多くし、人生を豊かにしてくれていると、作者は密かに尻尾にも満足をしている。

不器用に暮らしてますかあの世でも

中 村 毅

「前略 頑固一徹で要領の悪いあなたの方が好きでした。しかし心配もしました。あの世での暮らしは長いので氣を大きく持ってお過ごし下さい。草々」

死んでも尚氣遣ってくれる人がいる。

リニアには乗りたいけれどけれどな

源 田 啓 生

リニアカーは殆どがトンネルらしいが、それで速さが実感できるのかなあ、乗車時間も短いし、運賃も高そうだし。「けれどなあ」の氣持ちはこ尤も。

じゃあまたねマフラー空に振っている

神 野 きつこ

ハンカチ、防止よりも、いつまでも立つマフラーは良い。「じゃあまたね」は、卒業、就職など青春での希望に満ちた若者達の明るい別れを思わせる。

そっけない言葉に欲しい接続詞

高 木 道 子

鍵の音ここから先は異空間

真 島 久美子

色々あつて無言を決めている

藤 原 大 子

小島蘭幸川柳句集

『再会Ⅱ』

梅崎流青

大好きな人と芒が原にいる

やがて父親になるポケットのあたたかさ

みどりの中で仁王立ちする一歳よ

葦揺れる十七歳の葦揺れる

いのちふたつあれば悪人にもなろう

むかしむかしのやさしさがある葦の灰

羊の瞳の中の炎を見ましたか

少年が走るとコスモスが揺れた

父の貌して蠅螂が振り向いた

雪合戦をしたのは貧しかった頃

机の上にレモンがひとつ合掌す

晩年の父の隙だらけを愛す

人は誰もが、自分の持ちえない能力を持った人に、強い魅力や憧れを抱く。私にとって小島蘭幸さんは紛れもなくその中の一人である。

一昨年、島根県松江市での川柳大会の翌朝、ホテルで朝食を共にしながら、「蘭幸さんはどうしてそんなに優しいのか」と問うた。「やさしい」とは、言葉遣い、動作などの立ち居振舞い、文章、そして川柳作品を含めたまるで冬の日溜りのような「人間としての温かみ」を含めての問いかけでもあった。

それに対して、十五歳から川柳を始めたこと、家族、仕事のことなどを話してもらった。

もう随分昔からの知り合いではあったが二人きりで話し込んだのは初めての松江の朝だった。

句集序文には、橘高薫風氏が「川柳塔の旗手」として一文を寄せている。これは「川柳木馬」から昭和63年に刊行された「次代を担う昭和2桁生まれの作家群像」から転載されたもの。

これでも分るようにどちらかといえば、「川柳塔」という伝統川柳の王道を歩き、若い頃から将来を嘱望されていたことを改めて再認識した。

伝統とは、古いものを現代、将来にわたって守り抜くということだけではなく、常に新しい風を取り入れながら後世へ伝えていく、という気概が「再会Ⅱ」の川柳作品から伝わる。

〔葦群〕第32号より転載



追悼

永田俊子さんを偲ぶ

仁部 四郎

「あのころの華やかな時代に会いたかった」と紙（十二月十四日聞きとり）を絶詠として、永田俊子さんが、平成二十六年十二月十四日永眠された。享年百二歳であった。

平成十四年ごろまでは、川柳塔唐津もメンバーが揃っていて毎年の秋の唐津市民文化祭句会には、川柳塔や番傘の人々も多く参加してもらっていた。平成十五年には永田俊子さんに、「軽い」の選をしていただいている。特選は、山本義子さんの「神さまの軽いタッチで独楽まわる」であった。

平成十七年ごろから、私は、熊本で一人暮らしをしていた叔母の後見人みたいな立場になって、熊本へよく出かけることになった。句会に参加する機会ができて、永田俊子さんとお会いすることがにわかにふえたのであった。

平成十八年の檸檬賞の選評を私が書くことになった。受賞者は永田俊子さんで「命抱く土はほんのりと暖かい」であり、私は次のように書いた。

『命抱く』は、修辭的には、饒舌のむきもあるかも知れぬ。視点もまあ普通かも知れぬ。そうだとにしても、作者の全人生の稔りが、ゆるぎない貫禄とでもいうべきものを、泰然として発露させている句と私には思えた。」

ここに永田俊子さんからの葉書がある。
「小冊子を作りますのに御迷惑をおかけしまして反省してます。早速役に立てさせて頂きましてありがとうございます。」とある。「小冊子」は、『野菊』のことで、『野菊』については、川柳塔No. 一〇五二（平成二十七年一月号）に、水野黒兎さんのていねいな書評がある。

川柳塔No. 一〇〇七（平成二十三年四月号）には、「熊本川柳会を語る」という高野宵草さんのエッセーがあり、永田俊子さんが詳しく紹介されている。

いま私の手もとに、永田俊子さんからの書信が五通ある。私の、ちよっとしたお手伝いなどへの礼状だが、更めて読み返すと、永田俊子さんは、まことに節度をよく知る人だったと思う。百歳をこえてからの句の瑞瑞しさに感心している人は多いと思うが、節度をよく知ればものごとを公正に看ることができて、静謐でしかもさい利な表現ができるということ、永田俊子さんの川柳は示していると私は思う。

『野菊』には入っていない、川柳塔No. 一〇四三（平成二十六年四月号）からNo. 一〇五二（平成二十七年一月号）までに出ている句を紹介してお別れとしたい。

出し切った力はこれだけノラの唄

鯉の一本釣り政界の一本釣り

花見酒に花びらが落ちてくる平和

テレビの馬鹿笑い見ているロスタイム

研究をし過ぎると怖いブーメラン
昔は太陽だった女性よ叩け太鼓を



追悼

近藤佳子^{よしこ}さんを悼む

新家 完司

近藤佳子さんが亡くなられたことは、

昨年末、娘さんの奥田由美さんからのご丁寧なお便りで知った。十二月六日、夜の十時過ぎに「す」と眠るように旅立たれたということだった。年齢を感じさせない張りのある声で、ときどき電話を頂戴していたのでちょっと驚いた。大正十二年二月生まれ。満九一歳と十ヶ月とのこと。

鳥取県川柳作家協会が平成七年に発行した会員名簿を見ると、佳子さんは「川柳塔おとり」の会員に名を連ねておられる。その後「おとり」を退会されてからは、川柳塔誌のみの投句になったが、頑張った数々の秀句を発表されている。

平成十一年、私が地元のメンバーを中心に「大山滝句座」を立ち上げたとき、「私も出席したいが遠方にて叶いません。欠席投句で参加できないでしょうか?」という

連絡を頂戴した。しかし、当初から欠席投句は辞退する方針だったので、その旨申し上げて了解していただいた。そのようなことをきっかけに、月に一度か二度ほど電話をいただくようになり、世間話や川柳談義を交わしたことも懐かしい。

平成十四年に大腸癌を患われ、その直後に句集発刊の依頼を受けて、これまでに発表された数多の作品を拝見。平成十五年八月、上梓にこぎつけた。表題は佳子さんが大好きな「曼殊沙華」に決定。題字はご自身が毛筆で書かれ、表紙の絵は「映雲」の雅号で日本画をたしなまれていた岩美川柳会会長（当時）の石谷忠良さんに私から依頼して描いていただいた。その朱色も鮮やかな曼殊沙華の表紙絵を佳子さんがとても喜ばれたこと、私も自分のことのように嬉しかったことを思い出す。

由美さんによれば、佳子さんは常々「この句集のお陰で癌を克服できた」とか「句集を作る力によって病魔からの攻撃をかわすことができた」と言っておられたとのこと。確かに、「これだけは完成させたい」という意欲や執念のようなものが生命力を強くしたのかもしれない。

その句集「曼殊沙華」には、百八十二句収録されているが、左はその内の十句。

雪を踏む音やわらかく春がくる

大臣にも仔犬にも吹く春の風

春愁か離れ寂しい顔なざる

黄砂来る兄の遺骨の埋まる国

パスポートいはい日本もよく知らぬ

以下同文それぞれえ貰うことがない

保険証魔除けのように持ち歩く

楽しいね充分生きてまだ余生

うつむいたままで終わってなるものか

不死鳥のようにこれから生きてゆく

なお、佳子さん亡きあと、娘さんである奥田由美さんが川柳塔の誌友となつて縁を繋いでくれることになった。泉下の佳子さんもさぞ喜んでおられることだろう。佳子さんのご冥福をお祈りすると共に、由美さんの今後の活躍を期待したい。



風に想う

私たちの国には美しい山河があり、四季の変化にも富んでいますので「風」だけでも様々な言葉が生み出されています。

「かぜ」と読ませる例では、朝風・磯風・潮風・浜風・松風・夜風・春風・秋風・北風・大風・隙間風・ビル風など。

また「ふう」と読ませるものでも、緑風・薫風・疾風・突風・暴風・台風・逆風・強風・微風・涼風・季節風など。

他にも「木枯らし」や「春一番」「野分」など、風という文字を使わなくて「風」を表現している言葉があります。

No.47の冒頭でも述べていますが、花鳥風月は俳句の得意分野ですが、川柳ではそれぞれを「自分から求めて」自分の想いを詠っているのが特徴です。

師の句碑は師のかたちして風という

春風が吹いてきたのに痛い足

春風にふわり理性も油断する

風みどり自己採点は七十点

風の囁き生きるべし生きるべし

ほほなでる優しい風はおかさん

句碑を見詰めることによって「風」というのを見つけた。

待ちに待った春だというのに足が痛いとは残念。春風に心がウキウキ弾むことを「理性も油断する」とはまた理性的な表現。そして、自身を振り返って「合格点すれすれ」の厳しい判定には「同感」の人も多いだろう。風の囁きに耳を傾けることができるのも、優しかった母を思い出すのも心の余裕。

小島 蘭幸

小柏こずえ

大内 朝子

高杉 千歩

津村志華子

上田ひとみ

春一番駄馬の鼓動もそれなりに
春一番まだスカーフは離せない

台風が他県にそれてほっとする

台風に傘を差しても無駄やのに

台風は室戸岬に惚れている

春一番とは、立春の頃その年に初めて吹く強い南風のこと。この強風が吹くと「いよいよ春の到来」と心が弾みますが、それは一瞬のこと。まだしばらくは寒い日が続きます。

台風が日本に接近や上陸するのは、だいたい七月から九月の間。その度に大きな被害をもたらすので「他県にそれてほっとする」のは当然。まことに身勝手であり、被害を受けた皆さんには申し訳ないが、誰しも「同感！」でしょう。

秋風がパン屋の前で立ち止まる

秋風が小さな部屋に迷い込む

違う水飲んでみてはと秋の風

北風へ洗濯物がフラダンス

散髪をしたら木枯らし吹きだした

大陸の風にくしゃみを二つ三つ

猛暑に疲れた心身へ喝を入れてくれるのが秋風。詩心も復活して風の語りかける言葉まで受け止めることができます。

しかし、絶好の季節は束の間。散髪屋を出ると薄くなった頭にいきなりの木枯らし。そして、ハックション！

次の三句は「風」を暗喩（メタファー）とした好例。

順風に浸り祈りが雑になる

船頭が代わりやさしい風に会う

回れ右してもやっぱり向かい風

新地 正守
有沢せつ子

鹿田まさお

米澤 徹子

金築 雨学

三澤 放舟

市川 雄太

小林 わこ

森 茜

藤田 武人

岡田 史郎

矢倉 五月

森田 麗

種艸ゆたか

ティータイム、言葉遊び その4

対句法など

水野黒兎

今回はことば遊びではなく薫風先生の句について若干考察してみることになります。偉大な先生の句の考察とはおこがましいのですが、鑑賞の一種とお考えただければ幸いです。

薫風先生の句には修辭法で言うところの対句法、反復法の句が多い事に気がつきました。対句法とは似通った言葉や対になることばを並べるにより文章や句にリズムカルな調子を与え印象付ける方法とでも言えましょうか。反復法は全く同じ言葉を繰り返すことと理解して話を進めます。今回は対句法に集中します。

平家物語の冒頭の有名な文章

祇園精舎の鐘の聲、

諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色、

盛者必衰の理をあらはす。

これは対句の見事な例であります。慣用句や童謡などにも対句の好例があります。例えば、

☆百聞は一見にしかず

☆一寸の虫にも五分の魂

☆黒やギさんからお手紙ついた

白やギさんたら読まずに食べた

など多くの例があります。

ではさっそく薫風先生の句から対句の例を探してみます。

ああ五十妻が悔る子が叛く

生きさまも縞馬のしま虎の縞

犬と住む都会の底の夜の底

胃半分 肺半分の湯呑みかな

この句は単なる修辭の句ではなく文字通り命を削った結果の句であり、壮絶な魂の句であります。仮に同じような境遇に自分になった場合、そして仮に胃半分肺半分とまで言うことができたとしても下の句を「影法師」とか「やせ蛙」といった程度しか思ひ浮かばぬところを「湯呑みかな」と締め括られたのはさすがの名

人芸と感嘆するばかりです。

オーバーの襟立て更に破魔矢立て

男の嘘 女の嘘にしてやられ

男を磨く女を磨くやや違い

風薫る鯛美しく人やさし

この甘露堂新しく仏古り

先手打つおんな奥の手持つおとこ

目冴えてくる酒冴えてくる独り

薫風先生の川柳講座に参加したある先輩によれば、対立する言葉、つまり黒と白、高いと安い、暑いと寒いといった対句による川柳はことば遊びに墮するから川柳と言えないと、厳しく指導されたとのこととで、対句法による川柳を創る場合はこの点に注意すべしと自戒しています。

灯籠三千 祈願三千 尽くや神

女人高野石楠花浄土塔浄土

まだまだ対句の例句は多いのですが数が尽きました。最後に2句で一对の句を紹介いたします。

恋なれや汝れに羽交のあるごとし

恋なれやわれに鞆あるごとし



(投句173名)

今回の図柄は、一見、イメージが広がりそうに思えるのですが、その実、なかなか手強かったようです。

それではインスピレーションの世界へご一緒しましょう。



(評) 科学の進歩に恩恵を被っている私たち、だが、往々にしてそれに振り回されることがある。(ああ)に滲む悲哀。

大阪市 立蔵 信子

キミのことでんでわかつていない僕

(評) すべて知っているとと思ったキミのこと、でも、そうではないと気付き愕然とする僕、ここからホントの始まり。

富田林市 山野 寿之

ひまわりの迷路彷徨う葱坊主

(評) 花も背丈も大きなひまわりと、小さな葱坊主、探しに来てくれても見つけるのは大変。人生の試練のようです。

豊中市 水野 黒兎

ポアロより妻の推理は的を射る

(評) 名探偵よりも鋭い妻の勘、でしょうか。とかく女はスゴイ嗅覚で男の隠していることをあっけなく見付けます。

西宮市 緒方美津子

尖った心図書館へおいできた

(評) 図書館を出ると心がまあるくなっていたのですね。こんな清々しい気持ちにさせてくれる図書館、本の力はすごい。

松山市 神野きつこ

友達の微妙なニュアンスに悩む

(評) まるでこちらを試しているかのような友、言葉の言い回しだったり表情だったり、すこし面倒に思ったりして。

インプットしてある僕の夜の地図 西宮市 足立 茂

(評) 昼間とまったく違う夜の地図、行きつけの店も何軒か載っている、それは僕の頭の中にだけあって誰も知らない。

奈良市 阿部 紀子

世界中閉塞感に揺れている

(評) 紛争やら経済破壊やら、世界中あまり楽しくないニュースばかりで息苦しい。良くないことは伝染しやすい……。

沖縄市 森山 文切

机上では確かに抜けた迷路だが

(評) 机上の空論と言われるが、実社会では図面通りに行かないことばかり。そのギャップにしばしお手上げの様子。

大阪府 米澤 俣子

テッペン秘密知りたい蝸牛

(評) 大樹のテッペンまで登りきれない蝸牛のあせりか、それとも頂上に居る人への妬みか、謎は魅力でもあります。

熊本市 杉野 羅天

そうなのよ私誰にも解けません

(評) 私が何を考えているか知りたいですって？ お生憎さま、そんなに単純な人間ではございませんのよ、ですって。

米子市 生田 和之

百態の網をめぐらし蜘蛛にらむ

(評) さまざまな網を用意して獲物がかかるのを待っている蜘蛛、世間にもこんな落とし穴のような危険がいっぱい。

失った実印やと見いつけた
(評) あれこれと記憶の糸をたぐっていつて、確かあそこに仕舞ったはず、あったあったと大切な実印見つかりました。
河内長野市 坂上 淳司
三田市 北野 哲男
ああヒト科 化学科学で進歩する

鳥取市 福西 茶子
進入禁止そこは地球の紛争地

(評)進入禁止は平面的だが、地球の、
なると地球儀をクルクル回しながら見て
いるような三次元になる不思議さ。

神戸市 松井 文香
一びきの迷う小羊出ておいで

弘前市 高瀬 霜石
聡明なひとのただっぴろいおでこ

神戸市 山崎 武彦
黄ばむ街隠しカメラが僕を追う

八王子市 川名 洋子
雑念を追いついてさあ寝るとする

大阪市 江島谷勝弘
この先は樹海ですよと注意書き

和歌山市 古久保和子
回覧板が行方不明になるのです

堺市 内藤 憲彦
断捨離が僕をじわじわ追いつめる

大阪市 高杉 力
人生に近道なんてありません

大阪市 石橋 直子
露地の奥ひよいと曲るとある居場所

東京都 川本真理子
ウェルテルの悩みをこえる老いの坂

池田市 上山 堅坊
消防車いつも困っている迷路

三田市 尾崎 一子
いい繁みここが私の秘密基地

鳥取市 西川 和子
まあだだよ目玉おやじのかくれんぼ

倉吉市 山中 康子
気掛かりな人間ドックふっ切れた

神戸市 奥澤洋次郎
迷うのはもう嫌だから帰ろうか

佐賀県 真島久美子
妖怪がいます大人の脳みそに

長野県 丸山 健三
知恵の輪が一つ解けたよおかあさん

堺市 村上 玄也
かくれんぼ目だけは鬼を追っている

鳥取市 吉田孔美子
誰かしら私の過去を覗いたの

弘前市 肥後和香子
数学者愛の迷路をもてあます

三原市 鴨田 昭紀
空気読みながら咲き時を窺う

高槻市 安田 忠子
どうしたのこっちへおいで遊びましょ

弘前市 吉川ひとし
生きてさえいけば聖火は見られます

箕面市 出口セツ子
お帰りといつも大地のような母

大山市 関本かつ子
本当は親を試している家出

篠山市 酒井 真由
とりのこされてひとり遊びをしています

高槻市 片山かずお
引き出しが多くて探すのに困る

寝屋川市 籠島 恵子
妄想を追っているのは内緒です

大阪市 原田すみ子
真っ直ぐな道が正解とは言えぬ

大阪市 坂 裕之
裏通り夢と期待が溢れだす

海南市 三宅 保州
天国へ迷路が続く樹木葬

四条畷市 吉岡 修
ヘッヘッへSTAP細胞とはわたし

橿原市 居谷真理子
未使用の脳は静かに淨らかに

豊中市 藤井 則彦
来世逢う人をじっくり選んでいる

高知市 小川てるみ
LEDいっぱい部屋を春にする

5月号発表 (3月15日締切)



柳箋に2句

本社二月句会

◇二月五日(木)午後一時
アウイーナ大阪

立春も過ぎた五日、二月句会は百十五名(投句十二名)の参加で開催。句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人、土橋はるおさん(鳥取市)に黙祷を捧げた。

今月のお話は、三宅保州さん「にはをくずしてのにする、一字の重み」と長い題。

タイトルで人を引きつける。これは、保州さんが住民向けの広報誌担当の時代に教え込まれたとの事。また、お話をするとき必ず資料を用意することが大切、という事で参加者全員に「保州の柳話集十八」が配られた。

「にはをくずしてのにする」は「庭を崩して野にせよ」に当てはめて、助詞の効果的な使い方を江戸時代の俳諧で言われたもの、との説明に感嘆の声しきり・・・てにをはの大切さを痛感するお話でした。(まつお)

月間賞は、たむらあきこさん(和歌山市)(司会―蕉子・真理子)(脇取―奏子・まつお)

(受付―隆彦・わこ)(清記―勝弘)

席題「便利」 村上直樹選

便利さにかいたあぐらが崩せない
オーイお茶オーイめしやと五十年
炬燵から顎で便利に使う妻
便利屋と言われちよんちよん人の世話
テロリスト便利屋として散つてゆく
派遣社員便利に使う経営者

便利だと言う原発で地獄みる

どこまでも便利な黒子です日本
便利さに慣れて感謝を忘れかけ
クレジットという便利な罫がある
よろずやが消えコンビニに様変わり
片時ももう手放せぬ電子辞書

便利さを横目にいまだアナログ派
菜の花や便利になったお葬式
便利さに不意をつかれる電池切れ
コンビニとレンジ頼りにまだ独り
ロボットが僕より愛想良く迎え

百均の便利グッズに目を見張る
お掃除はルンパ食事はデバ地下で
母代わり便利な姉で嫁き遅れ
蛇口からお湯母さんが肥えてきた
まんじゅうも酒も付き合う二刀流
出世には無縁宴会部長です

日々の暮らし重宝してるタブレット

奏子 蕉子 則彦 淳司 宏造 堅坊 美智子 誠一 洋

扶美代 寿子 敏治 弘光 宏造 好

セツ子 和夫

わこ 良子 克己 月子 進

和夫 美智代

和夫 美智代

和夫 美智代

和夫 美智代

和夫 美智代

I Hに囲まれタワシ生残り

消しゴムは便利人間でも消せる

口は便利好きでなくても好きと言う

父さんに聞いたら分かる生き字引

わが夫をアツシー代わり使う母

便利やな掃除洗濯みんな俺

病院の裏に葬儀社から墓地も

便利屋にされてるうちが華と知る

都合よく便利屋にされ捨てられて

便利さに慣れたヒト科に不遜

風向きへとても便利な二枚舌

どこ押してよいかわからぬ全自動

便利だなあ車不自由だな車

住

内と外女は歳をふたつ持つ

金ですむ世相は便利でも不便

便利さに負けた五体の軋む音

誰にでも合やす物差し持っている

過疎の村便利に勝る四季があり

人

ツーと言えばカーと答える妻という

地

ゆずれない便利へ自分色を足す

天

はこべ

岳人

アキ

進

ひろ子

勝弘

保州

朝子

まつお

蕉子

朝子

保州

扶美代

好

富美子

宏子

朱夏

はこべ

富子

あきこ

桃花

桃花

桃花

兼題「散步」 出口セツ子 選

散歩道風のささやき春の音

いい話朝の散歩で拾ってくる

祖母との散歩よもやま話楽しくて

四季の移ろい楽しんでる散歩

妻のグチはじまったからプチ散歩

目礼の仲間が増える万歩計

白い杖開花の様子聞く散歩

粗大ゴミ止むにやまれず出る散歩

あの人に逢えそうだから散歩する

散歩する妻の視野には冬の薔薇

初散歩先ずは畑にごあいさつ

散歩道ついでに医院はしごする

徘徊の人の散歩はエンドレス

尋問をされた深夜の散歩道

バスポート持ってお散歩ですオホホ

気晴らしへ母に寄り添う車イス

自分史の余白を埋める散歩道

雨の日も主人を散歩させるポチ

頭の散歩あさる話題の新聞書

散歩にも名札ぶら下げナビもつけ

格好つけ監視カメラの中散歩

宇宙散歩もう漫画ではない時代

乳母車戦車を避けてゆく散歩

魂が散歩たのしむ一行詩

言い過ぎの自問自答をする散歩
台風の日でも散歩に行く男
散歩道旁わりあって両陛下
遊歩道杖で鍛える車椅子
子も放つてスマホ大事な散歩中
織田作の風と散歩の坂の街
末席に馴れたか言葉散歩する
連れ合いの顔の広さを知る散歩
火を噴いて山は散歩も許さない
追憶の小道トトロに会いに行く
ときめきの心もらえる散歩道
今日もまた生きてる証し散歩する
生きてますさっそうと履くスニーカー

富子

兼題「くぐり」 江見 見清 選

文学の森の散歩で知る明治

宇宙への散歩の夢を見る昼寝

イスラム国ぶらり散歩は出来ません

外出が許され広い空歩く

通帖持つて妻は散歩に出たまんま

お散歩のお供はいつも介助犬

逝きたいわまるで散歩にゆくように

天国への散歩はしばし辞退する

軸

散歩から貰う宇宙のエネルギー

天

散歩から貰う宇宙のエネルギー

軸

天国への散歩はしばし辞退する

軸

散歩から貰う宇宙のエネルギー

天

散歩から貰う宇宙のエネルギー

軸

天国への散歩はしばし辞退する

軸

散歩から貰う宇宙のエネルギー

天

散歩から貰う宇宙のエネルギー

軸

天国への散歩はしばし辞退する

軸

直樹

寿之

宏子

洋

文代

恵

日の出

奏子

舞夢

万紗子

順子

敏治

見清

舞夢

ダン吉

楓楽

光久

としお

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

朝子

同じことまた言うてはるさあ逃げよ

くどいけど父の小言は的を射る

くどいなあハイは一つでいいのです

義理チョコと何度も言つて渡される

キムタクに似てても嫌いくどい人

くどいほど言うものでない美辞麗句

たぶん嘘だらう弁解くどすぎる

補聴器にくどい話がかぎりつき

認知症かしら話がくどくなる

言にくいこと直球で願います

くどくどと語彙を並べて陽が沈む

ねちねちと値切り上手と売り上手

アイメイクくどくてみんな狸顔

じいちゃんも親父もボクもくどい酒

来世も一緒よきつときつとよね

くどい賛辞けなされてたと後で知る

採めた日のおかずにくどい味のせて

くどなつた夫を置いて旅に出る

くどいわね逆さにするよ砂時計

くどくても平和は良いと言いつつ

くどい程口説かれましたもう離婚

くどいとも言えず聞いている誉め言葉

口ずさめる程に流れるコマーシャル

多数決してもだがねとむし返す

はあいハイもう何回もききました

はあいハイもう何回もききました

はあいハイもう何回もききました

はあいハイもう何回もききました

加お里

雅枝

武彦

あかね

桃花

扶美代

楓楽

昭

セツ子

良子

森子

洋

紀子

まつお

楓楽

文代

裕之

月子

瑠美子

はこべ

舞夢

真理子

満知子

好

葉子

葉子

葉子

葉子

問うたのが仇うんちくのくだいこと

正座して覚悟を決めた妻の愚痴

くだい程続く耳鳴り生きる音

くだいから猫にもうつる生あくび

妻の激頭上を通過するばかり

言い訳のくだい人ほどよく遅刻

出たか乗ったか降りたかと娘のメール

恋しいと夜更けのスマホから悲鳴

くだいと云わず語っていた背中

唇が乾くくだいと言いきすぎた

くだいと云われ今夜も千鳥足

同意書がくだくて怖いオペ前夜

くだい味何を煮たのと尋ねられ

佳

くだい程愛食べ乳房丸くなる

序でだよいでだからね母が来る

くだいほど日本領土と言うてある

美しい百合がこれでもかと匂う

三菱東京UFJ銀行

くだいよりボカリ拳固の方が良い

人

くだくてもいわなきゃならぬ母だから

地

その話聞いたと言えぬ社の訓示

天

それ以上いうと手毬は弾まない

軸

くだいようですがそれから長い

蕉子

兼題「とんとん」

奥田みつ子 選

美智代

ふりこ

蘭幸

則彦

美津子

朱夏

英夫

朱夏

岳人

誠一

ひろし

郁夫

とーな

修

真理子

保州

淳司

美津子

誠一

富美子

アルバムにどんどん迫る走馬灯

国債をどんどん刷って穴埋める

頭のこして背丈どんどん伸びる孫

どんどんと毛が生えていくコマースヤル

坂道をころげるような記憶力

どんどんと昭和が遠くなつてゆく

ピンヒールどんどん先を行く若さ

雪道で邪気がどんどん沈下する

討論会どんどん声がかくなる

羽根生えてどんどん金が出て行つた

少子化の波にどんどん荒れる森

愛犬がどんどん先行く散歩道

どんどんと右へ傾く日本丸

飲むほどに自慢話が先太り

アナログの僕をいつでも置き去りに

日本語がどんどん荒んでくる不安

登るほどどんどん遠くなる民意

名優逝きどんどん遠くなる昭和

核汚染に地球どんどん狭くなる

豆の蔓挑めよ天を掴むまで

たすき受けどんどんひらく前を追う

どんどんとお金が貯まる死ぬません

疑心暗鬼どんどん深くする噂

健康器具どんどん買って何もせず

記憶みなどどんどん美化をされ消える

どんどんと進む未来を夢に盛る

武臣

雅明

好文

篤

篤

キヨミ

房子

ふりこ

まつお

月子

美津子

克己

武彦

英夫

ダン吉

扶美代

誠一

隆彦

敏治

奏子

葉子

舞夢

アキ

ひろ子

見清

忠子

初詣神楽太鼓で気をもらう

無抵抗知ってドンドン攻める妻

キャンプリンそれいけどんどん今年こそ

外来語どんどん増えて闊歩する

灰色の日々がこの身に降りつもる

認知症どんどん僕を追ってくる

どんどん来い試練で心磨いてる

どんどんと雪の下から春がくる

駅三ッ少女に仕上げたり

歳月は駆ける傘寿の足鈍る

一言がどんどん謎を深めてる

疑い出すとどんどん孤独になつていく

追い越してどんどん先をゆく若さ

口以外どんどん老化する後期

佳

助言得てどんどん迷い深くなる

絶え間なく雨を招いている記憶

黙つてるとどんどん募る愚痴不満

どんどんと忘れて今日も元気で

どんどんとメッキが剥けていく気配

人

電子機器どんどん使う子等の知恵

地

影法師どんどん僕の先を行く

天

八十路の恋どんどん若くなるこち

軸

どんどんと親を追い越す子の育ち

妙子

和夫

求芽

光久

真理子

たもつ

セツ子

蘭幸

はこべ

希久子

わこ

わこ

扶美代

誠一

楓楽

あきこ

則彦

靖鬼

義

雅枝

柳弘

理恵

兼題「真似る」

坊農 柳弘 選

兼題「北国」

小島 蘭幸 選

あの頃はイナバウアーも真似できた
保 保 真似している内は師の影越えられぬ
紀 乃 口振り仕種ママそっくりのおまご
かずお 山頭火あなたの真似をしてみたい
美 勝 真似ごとかから会得してきた芸の幅
月 籠 上品な真似して舌を噛みました
修 真似しているうちに師匠も越えられる
一 親を真似トンビはトンビなれぬ驚
晶 説教が好きは親父に似てしま
理 自分流妥協はしない気持ちよ
克 春のスカーフちよと蝶々になってみる
森 デフォルメが過ぎた物真似趣味なり
裕 アメリカを真似て自由と武器輸出
進 嫌がっていたのに真似る父のクセ
かずお 真似て真似て真似て身につく芸の道
克 己 猿真似といわれオリジナリティーがない
瑠 見よう見真似で妻になり母になり
美 子 ロボットの真似が出来たらほんまもん
敏 治 どうしても影の部分が真似られぬ
扶 代 ジャンギヤバン真似たコートは古着です
六 点 壇蜜を真似たつもの横すわり
宏 子 泣くまねの指のすき間にある打算
武 彦 嫁姑なぜか似てくる生返事
晶 子 真似てから創意工夫のお家芸
満 知 子

先ず親を真似て始まる子の個性
真似ているうちにわたしの顔が無い
黒 兎 真似事では会得出来ない侘びと寂
朱 夏 壁ドンを真似て食らった平手打ち
克 三 九官鳥親父の小言繰り返す
進 玄 也 真打ちの芸を袖から追う前座
淳 司 真似るだけ彬遠い人である
ダン 上達の土台は模倣趣味の会
吉 こんな風に老いたい人がいる句会
隆 つけまつけ売れて見分けのつかぬ顔
彦 Monroe を真似てギツクリ腰になる
楓 模写の絵はみごと自分の絵は描けず
楽 奏 子 師匠越す古典落語の味探る
恵 五月 佳
哲 男 きみへ傾く時間が真似になってゆく
あきこ 腹を切る真似で約束して別れ
哲 男 人間を真似る私の妥協癖
ダン 吉 体系を除きモデルの真似をする
吉 似てないつもりでもしゃべり方がそっくり
黒 兎 人
葉 子 あかんでえお礼はコピー出来まへん
とーな 地
蕉 子 伝来の味で信用つなぎとめ
富 子 天
かたくなに一子相伝守り抜く
善し悪しを親の背中を見て真似る

地から降る雪を奏でる津軽三味
笑ろてもやっぱり寒い北の国
白い肌きつと秋田に違いない
北国の春も花咲き鳥が鳴く
北国の情けのしみているこけし
北国からの賀状は雪のにおいする
その先の修羅は語らぬ北の国
北国の男無口でB型で
零下二十度北の孫からメール
北国を出てからボクの妥協癖
チベットでも流れてた北国の春
豪雪に耐えてふるさと愛しぬく
心の傷いやしに來いと北が呼ぶ
さんざ降る雪を味方に生きている
しはれても人温かい北の旅
北の国今は静かな波の音
北限の狼が教える忍一字
北国の氷柱がふんと眩いた
これが北国もみじの上に雪積もる
北国のポスト諦めてはいない
北国行きの窓の灯りに憧れる
北国のまつり鮭も蟹も踊る
雪マークつけて北国らしくする
流水とクリオネを見て蟹せせる
タンチョウが舞う北国に春の音

遠野 万紗子
とーな 弘一
洋 宏造
柳 弘
楓 楽
英 夫
ダン 吉
勝 弘
寿 子
修 子
ダン 吉
隆 彦
良 子
誠 一
肇 葉子
義 扶美代
希 久子
宏 造
哲 男
光 久

マッサンの第二のふる里は余市
 神々も雪には逆らわぬ掟
 森羅万象はほえむ北の国の春
 北国の夏は演歌になりにくい
 自問自答雪国の雪昏くなる
 生きろ生きろと北の郷から吊し柿
 リングの花咲く頃おいで北の国
 北国の駅の名数え亡父を恋う
 雪五ミリ北の厳しさ知る都会
 シベリヤの苦勞はつりと父の酒
 芽吹くまで仮設の人よ風邪引くな
 ぼっばやは逝つて新幹線が来る
 ためらいの半音を聞く北の旅

住
 シベリアの凍土で果てた叔父想う (安)
 北国の春は歡喜に満ちている 和 夫
 流水接岸ふるい詩集を読み返す 玄 也
 叶うなら北の大地の樹木葬 朱 夏
 阿寒湖の氷の上で見た花火 隆 彦
 美智代

人
 母と猫住む北国へ長電話 富 子
 もがりぶえ襟裳岬で聞いている 良 子

天
 雪国を出てゆく敗北のかたち たむらあきこ

軸
 わたくしを待つて北国の桜

いさお
 奏子
 哲子
 まつお
 あきこ
 アキ
 哲子
 アキ
 ク己
 武彦
 はこ
 富美子
 敏治

句 会 燦 燦

1 月句会を読む

岩 崎 眞里子

今年は大雪警報付き「明けましておめでとう」だった。やつと青空を取り戻した頃、次の作品にドキッと立ち止まった。

七十年戦争なしを祝わんか

ささやかな幸福窓で見る初日

新年早々柳友を送った心が、人質報道に触れて更に重くなつた。せめて年の初めに、戦争の無い世を……と真剣に祈つた。

雪道に昔の恋が落ちてゐる

セコムしてますか恋人はいますか

雪の白さには来し方がたつぷりと含まれている。セコムし過ぎて敗れたあの時の苦さ悔しさも。勝弘氏の『逢いたいなサチコとミヨコあやめちゃん』に大笑い。何だかもっと居そう……

いっばしの振りする半熟の卵

職場ではクリームパンの位置に居る

天仰ぎファイトファイトの冬木立

クリームパンの位置は中堅で、ファイトファイトはベテラン。でもみんな半熟卵は大好き。だって人間、時々半熟卵だから。

冷蔵庫に自分の部屋がある卵

ピカピカに磨いて捨てる鍋ヤカン

そういえば我が家にも卵氏の部屋がある。これは凄い発見。また捨てる前に感謝の磨きをかける心にもジーンときて、廃車の日、車を丁寧に拭いてお酒をかけていた亡母を思い出した。

よく笑いよく動く母LED

寒月を仰ぐひとりをお生さる

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

確かに母は、明るさも耐用年数も消費電力もパワーもLED。懸命に生きている人はみんなLED。だから凛と独りを生きることが出来る。厳しく美しい寒月もLEDのように清々しい

一歩

セツ子

葉子

義

恵

千枝子

眞理子

まつお

朱夏

美津子

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

ヨシエ

をどけぬ城

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

五線譜に跳る少女のラブソング
廃線をひとり歩いているのです
なだらかな曲線欲しい老いの坂
ハヤブサは死線を超えて大宇宙
一線を画すと見えてくる本音
思いつくしつかり胸に包みこむ
マフラーで頭包んでにわか雨
小細工もつつみ隠しもない嫁で
大風呂敷包みきれない人の口
亡妻の目に何時も包まれとるような
凸凹もまあるく包む母の愛
我は人恩は決して忘れまい
ネクタイの結び方から忘れてく
暗証番号一瞬白くなる怖さ
夢中になると歳も病氣も忘れてる
日に三度飲む葉さえ名を忘れ

淑子 蘭幸 汎美 節生 寛 房恵 栄恵 敬子 規代 静風 昭紀 半徳 輝恵 慶子 幸子 力

忘れない原風景は亡父の海
天高し忘れることのありがたさ
日本語を忘れそうだと娘の電話
川柳のおかげ子育て頑張れる
コンビニのおでんと決める独り者
ペダル漕ぐ冬將軍に負けないぞ
夢ひとつ抱いて膨らむ未成年
五十回忌父の面影雲になり
母の色私の色になる三十路

和歌山三幸川柳会

武本

地の塩になれると信じボランテア
信じてた脳が時どき家出する
段差などないと信じて蹴躓く
信じれば味方いっぱい居る周り
あの時のあれが愛だと信じよう
信用がずつしり両の肩に乗る
神様がいと信じてまた悩み
賛美歌のメロディー神を信じさす
僕のババ世界一だと信じる目
信じる人いるから詐欺は止められぬ
店先の鰻に郷を聞いてみる
この道信じ明日も飲む葉
信じてる方へ傾くやじろべえ
開店と同時に行列破裂する
行列の先にはきつと良い話
パレードの先頭にいる孤独感
余白あるカルテが棚に列をなす

千代美 比呂子 笑子 歩美 栄香 厚子 あゆみ 初音 史子 碧報 稔 ひろ子 昭枝 八重子 美羽 富香 竜 義泰 隆昭 みね 千鶴 幸子 美子 美代子 起世子 宏夫

脱皮してもう行列に並ばない
ブライドをかなぐり捨てて並ぶ列
長蛇の列に忍耐力を試される
生きてゆく絆見習う蟻の列
モノクロの記憶に並ぶ戦中派
一張羅を身に着け競う秋の山
この子らの平和を祈るもみじの手
草野球もみじ一枝連れ帰る
輪唱のもみじ校舎を駆け抜ける
遠出するもみじマークが気に掛かり
ふたりして見てた夕焼山もみじ
空撮のもみじの山のカーブ道
味付けをされた噂が届けられ
原発の安全届くまで叫ぶ
有頂天やがて天まで届く鼻
冷える日にコトンと届く喪の便り
行き届く嫁さんちよつと煙つたい
速達で届く師走の忘れもの

南大阪川柳会

津守

柳伸報

柳右子 とーな タカ子 正春 東風 楓楽 歌留多 博 幹子 純子 菜摘 当代 次根 夢子 保州 章子 俣子 絹子 みつ江 弘子 准一 義雄 昇 智三 よしこ 和子

武力での手助け御免平和主義
臓器提供身内助けるためになら

赤い羽根助ける気持入れておく
迷った時ひと言母のアドバイス
人助けだと思ふなら酒注ぐな

本当の助っ人は世辞など云わぬ
汗以外僕を助けるものはない
助かったいのちだれかを助けねば

助けてと叫びたい日もある介護
階段を踏み外してから不整脈
エリートは出世階段駆け上がる

階段を踏みはずし平で生き抜く
螺旋階段こは思案のする所
免税の坊主が揮毫税の文字

泣きなさい涙が心軽くする
たかが一票せど一票軽くない
軽い気のジョークに尾鰭ついてくる

すぐ横の軽い軒にほっとする
ノール賞軽い眩暈の中で聞く
募参り心の重荷軽くなる

懐も軽いが脳が減茶軽い
土鍋囲む今日で三日も同じもの
冷え込んで忙しくなる鍋奉行

音痴だが第九の列に並んでる
自分史の余白に秘かなる余熱
いつの世も税の一字がのしかかる

国和
なぎさ

ルイ子
直子

更紗
ダン吉

一歩
栄子

庸夫
勝弘

忠昭
志華子

柳伸
あや子

あさ子
弘子

シマ子
和雄
克己
集一
恭昌

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

今日もまたカラオケいのちマイク持つ
してみると酒は命の柔軟剤
コップ酒の中で命かけ回る

真つ二つのりんごの中にある命
切り取り線あつて命が愛おしい
ちっけな我が命にも使い途

画用紙に青い魚を泳がせる
余命表微笑給う円空仏
生命線細字のペンで足している

指切りでもらった命だと思ふ
生きている自分の持ち場探してる
育休のパパがてこずるオムツ替え

突然の指名でマイク持たされる
拉致家族目から離れぬ地平線
ドカ雪が我が家の足を摘め捕る

ゆず浮かべ長湯している窓は雪
空に浮く君が描いた羊雲
青空に貴方の笑顔浮いて消え

浮草のその生き方もいいだろう
鯀鯀がこの世見たくて浮きあがる
水すまし水の怖さを知っている

友だちが欲しいと石が浮いてくる
白羽の矢いつ来るのだろう化粧箱
上げ底の銘菓も祝う結納日
我が家宝宝石箱で就寝中
玄関を出てから続く長電話

冬道
隆樹

一呑
龍馬

美鈴
風来坊

芳生
氏加子

則彦
柳子

規子
洋子

慕情
ひとし

青竜
小とみ

京子
一湖
呑舟
霜石
黙人
井蛙
花匠
重虎
つとむ

鈴木 公弘 選

ピンク服着ても男子と間違われ
たましいを持つ人間よしんとせい
この指に止まれと言えは人は去り

ため息をついてブライド呼び起す
おばちゃん長い話に立ちくらみ
老人会テキパキしてはいけません

時価と言う料理に酔いがまわらない
接種後に待合室の風邪もらつ
美人の湯結果保証と表示なし

へそくりが残つてないか本を振る
(編) 則彦 忠太

佳句地十選 (2月号から)

大内 朝子 選

いい風だ踏み出してみる賭けてみる
ストレスが適度にあつて生きる欲

真の友苦しい時に来てくれる
ダントツの手料理が待つ老母が待つ
子は去るが幼き臓器生きて行く

まっすぐに向き合つ心開くまで
おかげさま自然に口に出る齡
ゴールまで自分の足で歩きたい

失望の中に埋もれている希望
面取りをしてからふわり蹴り返す
恵子

定年後誘いがあって髭をそる
天候不順脈拍不正俄雨

雪しんしんストープ開むジジとババ

雪の嵩墓標を包む春彼岸

まわりくどい話につける味の素

身の毛立つ思いの二つや三つです

火遊びが浮気本気と化けてくる

さそり座の運を器用に潜り抜け

孫が来て今日も一日オノマトペ

高知川柳社

小川てるみ報

同じ釜の飯であつても運不運

介護する同じ目線でものを言う

同じならにこにこ生きて風になる

同類項括れば疑問符が解ける

同じ傷抱えた友と腐れ縁

同じ風受けて高さの違う風

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

時どきは聞こえぬふりをしていよう

喜寿すぎて足腰達者口元気

朝露に光るクモの巣虹を編む

新調のスーツが巣立つ春の駅

巣に帰る子を持ちわびる母が居る

心配はしない後継ぐ嫁がいる

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

身を飾るより一善の積み重ね

初枝

きよし

雅城

ふさあ

花峯

和香子

一花

五葉庵

龍人

哲史

ふき

千鳥

てるみ

京子

陸宏

初恵

いさむ

放任

弘

よしみ

ひかり

茶子報

弘子

茶子報

弘子

母の味記憶を辿り葉を漬ける
ロボットと繋がるだろうか糸電話

瞬間に口を塞いだシャネルの五

注連縄を外しきようからダイエット

ギクシヤクとロボット風になつてきた

海山がずばりずばりと物申す

忠義心ではロボットに負けている

ヒーローは鉄人二十八号だ

飾られた弁当母の愛を見る

息子からずばり言われて腹が立つ

目で食べて味わっている日本食

ずばり言う人の後ろでいい気持ち

星々が飾ってくれる過疎の村

ロボットが末期高齢介護する

人気者「ダメヨダメメ」これも芸

ロボットになりロボットに介護され

ロボットが人間つくるかも知れぬ

真つ直ぐな瞳ずばりと心射る

ずばり聴く問診ナース喧嘩腰

ロボットは素直職を嫌つたり

飾らぬと外へ出られぬ歳となり

行く末はロボットに職うばわれる

魂を入れたロボット反抗期

本当に紳士ですから手も触れず

見栄はつて飾ってしまう誕生日

和子

すみれ

孔美子

茶子

完司

石花菜

盛桜

美ツ千

鈴

実満

幸恵

くにこ

芳光

いさお

蟹郎

螢

ひかり

幸代

満

咲和

恒

かおる

みさ子

小鹿

あげまんの妻に出来る来る青い鳥
やがて来る後期に向けて四股を踏む

盛大な葬儀だ義理か人徳か

徳積んだ人の皺には影がない

反論はあるが頭下げておく

来る来ない恋の点滅待ちぼうけ

初詣鶴舞う沢の夫婦連れ

来るものは拒まず受ける神仏

貧乏神また来年も来るといふ

いい子感春の音符へ蝶が来る

鶴よりも長生きしてる長寿国

八十二膝と腰からガタが来た

三面の表に出ない裏事情

事情など聞かず母のおでん鍋

グループのために耐えてる徳儀

同情をされる事情を持つている

美辞麗句十分距離をあけて聞く

墨染の衣にたたみ込む女徳

掃き溜めに鶴は私のことらしい

席ゆずる少女の徳の光つて

百の窓百の事情の泣き笑い

うれしさをそつと運んで来るメール

鶴を折る母と止まっている時間

折り鶴の文化でつなく世界の輪

もうへとへとツウはあの世へ参ります

和之

倫

眞澄

和夫

貫一

ふりこ

秋泉

紀雄

ばつは

日の出

賛郎

博一

盛隆

辰雄

次郎

信子

完次

理恵

勝弘

保子

國治

恵美子

柁子

比呂志

小春日の静かな午後に来た計報
ボランテア明日は我が身の徳を積む
摺り足で修羅を運んで来た女
容赦なく仮設に冬がやってくる
求愛の鶴の気品を見ましたか
人徳があるといわれている無欲

川柳塔さかい(大阪)

村上 玄也報

みんな揃い幹事一人がまだ来ない
平然と負けて刃を研いでいる
令夫人意外や意外きょうざ好き
そんな事くらいで私音を上げぬ
片意地に生きた証の国訛り
マドンナは隣の組の宇宙人
不揃いの野菜地方紙着て届く
不揃いのキュウリ有機という誇り
三代代揃いビデオの日の出見る
礼服で行こう親父の義理がある
音を上げぬ草踏まれても蹴られても
しぶとくてしつこい国に囲まれる
細胞に負ける気は無い桃の花
礼深く慇懃にして義理を欠く
理由あって揃わぬ膳に父嘆く
揃った足並みみだれ出す老後
反核をしぶとく叫ぶ被爆国
しぶとさ妻にかればただのアホ
祝い酒しぶとお方嫌いです
しぶとさは親そっくりと母が言う

成子 柳弘

恭昌

良一

朝子

玄也報

さくら

唯教

健吾

月子

和夫

憲彦

誠一

好

和幸

雅明

光

時雄

みつこ

愿

世紀子

かりん

ひろ子

清

舞夢

日の出

一族が揃う祝箸が踊る
重庄に耐えて羽生の金メダル
三匹の猿を揃えて色が無い
此処が好いしぶとく同居拒む母
しぶとくてさらに図太く手に負えず
ご馳走が揃うて体調を崩す
へビー級紫煙くゆらす日に三箱
新学期ドキドキしてるクラス替え
百歳でまだ年金をもらてはる
一クラス七十人のあの戦後
レシビなど要らぬ手づくり餃子です
手術台囲む家族に励まされ
季の順に梅桃桜揃い踏み

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

温もりを上手につくる品の良さ
楽しそうに見えぬ夫婦のツア席
パソコンも手探りのまま進歩せず
トンネルが時々切れてリニアカー
ハチマキへ菌を食いしはる寒稽古
飛んでみる助走ばかりが長くなり

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

この国を外から見つめ惚れ直す
我が家にも国境らしきものがある
たましいの奥へどこかぬ国の策
基地化より沖縄独立国になれ
ずうずうしい国が珊瑚の盗み食い

蕉子

安代

五月

澄空

素願馬

ゆみ子

敏治

八千代

としお

清晋

俣子

玄也

天笑

雅美

美千代

遡行

まみ子

百合

かつ子

珊瑚盗るマストに揺れる五ツ星
帰省して話す時には国なまり
国引き神話を西ノ島が語る
侵略に動き遅いぜこの国は
我が青春満州国に捨ててきた
天国は誰も行ける謎の国
浅学の叫びを聴いてくれた本
温暖化地球が叫ぶ助けてと
叫んでももう少年に戻れない
風に叫び父の翼は耐えてきた
赤ん坊生きているぞと泣き叫ぶ
税金にせめてたてられて火の車
差し押さえ来て赤貧を泣いてくれ
外税に勘違いしたお買物
消費税上げて使うな機関銃
税の字を縁無き貫主様を書く
生きるのに税のかからぬ息をする
果てしない宇宙の隅で生きている
好きですと言えず果てには人の妻
受け止める俺が育てた果てだから
親の脛かじられ果ては施設ゆき
飽食の果てにおクスリ七種類
人間の果ては仏という安堵
新しいいのちつないで果てる鮭

はびきの市民川柳会(大阪)永田

章司報

ひと仕事終えて楽しむモカの味
新幹線払い戻しはない遅れ

紀の治

陽之助

芳光

義人

重忠

美美子

重利

紀美恵

石花菜

美ツ千

滋

久芽代

野蒜

龍枝

幹啓

玲坊

貴恵

たけ代

悦子

道子

清

完司

三津子

くにこ

美代子

ちづる

気まぐれな味もわたしの得意技

薄味の男がひとり気にかかる

命より大事取りに戻って逃げ遅れ

遅遅とした外交恨む拉致家族

客筋を枕で読んでいる高座

窓際の椅子で味わう孤独感

切れ味のするといシユート投げている

カニ風味今夜はこれで我慢しよう

点滴のお陰で今は元気です

おふくろの味を見せまます大根で

気持ちよく働いた日は飯うまい

娘と孫に年玉袋数ふ幸

久しぶり愛車に乗ればオイル切れ

出しよりも野菜が味を出している

生き様に味が出てきて男前

一度たりとも食べていません恋の味

ちよぼちよぼの懐具合割勘で

客も減り師走の町に雪が降る

ちよぼちよぼと乳歯が覗く孫の口

俺お前ちよぼちよぼ同士凡夫婦

手遅れの美容体操しています

行くとも来る人もないお正月

年賀状味わいある句添えてある

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

九条がきつと平和の礎に

ばらばらの家族束ねる縄を拘う

陰日向なくノルマを熟す蟻の列

高 驚

紀 雄

恵

みつこ

ダン吉

ひろすけ

久仁子

庸 佑

泰 子

真 一

かつ美

アヤコ

千鶴子

猿 杏

美 喜

敏

喜久子

雄 太

いさお

フジ

洋 一

高 驚

六 点

光 男

章 司

ひとり降り二人が残る縄電車

幸せの欠片集めて日向ぼこ

縄張りを取り合う妻と生きて吉

マジックで消えて慌てるお年玉

寒い夜は俺を呼んでる縄のれん

袱紗から一足早い春ふわり

この縄で縛りたい人一人いる

手を合わす米の副産物に縄

空想を真つ赤に染めたのは愛か

約束のきつとに火照りだす小指

川柳塔唐津(佐賀)

仁 部

四郎報

年毎に妻が領土を侵して

雪虫の舞いと見紛う春の雪

猫泣かせ骨のずいまで捨てられず

前列で居眠りできぬ講演会

富 柳 会(大阪)

古 田

千華報

てのひらの凹みにひとそと愛ひとつ

轟々とてのひら削ってゆく雪崩

ごめんねが口の端まで来てるのに

振舞の視野に燃えてるもの一つ

振舞が親の躰を光らせる

隙見せぬ立ち振る舞いにある打算

挙措動作ときどき剥げる金メッキ

二度とない私の今日をおもてなし

人混みで内緒を風に盗まれる

目標を見上げてまずは根つ子張る

常 男

寿 之

慶 子

安 男

清

加央里

耀 一

朋 子

森 子

欣 之

蜂 朗

高 明

節 子

實

美代子

アキ

伸 雄

登 子

澄 子

仁

未知

かこ

日 木

反抗期太くなり出す道根つ子

平成の根つこに腹べこの昭和

根気よく続けるだけがとりえです

ニュートンの昼寝林檎の樹の下で

自衛権民意を問わず根をおろす

心地よい富田林に根をおろす

マンホールの蓋盗まれてから闇夜

半分こに憧れている一人っ子

蝶結び半分程を期待して

半月の下で囁くラブコール

残照は饒舌半分は未練

てのひらの襷に隠れていた生命

男でも女でもいい呱呱の声

中庸の哲学悟りだす老後

しっかりと繋ぐ後半の縄飛び

千夜一夜夢は序の口まだ半ば

ブライドを半分捨てた日の酒よ

根深いものが焼香順にあるという

わたくしの根つこに飢えと郷土愛

ご先祖の根つこ辿ると海に出る

根つからの人好しですよく転ぶ

死神を盗みに臨終の見舞い

泣かんでいい盗られたタイヤは百均や

端つこのあやうさ芒ゆれている

ひらひらと盗んだ蝶の片えくぼ

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

いとし子は命に替えてでも守る

高 驚

欣 之

よりこ

一 筒

一 文

和 子

朱 夏

佳 子

奏 子

武 人

暢 夫

壽 峰

淳 司

寿 之

よしみ

祐 子

いさお

葉

早 人

富美子

安希子

美 子

は な

侑 子

森 子

朝 子

葉替えましょかですまされた不安 (矢)五月

替え芯が次々名句生んでいく

アナと雪吹替えの歌素晴らしい

価値同じ中味かえても意味がない

鬼の面恵比寿に替える生き上手

遺言状そつと入替え大騒動

大きな目の夢にハシゴを掛け替える

さあ今日も縁起直しの飲み会へ

縁起物買いたい見たい集めたい

初夢は七福神にハグされる

身の丈にあう茶柱が番茶から

良縁が叶いダルマに目を入れる

若者は時代を映す日本を

バーゼンロード父がガタガタ震え出す

ハルカスの展望台で初日の出

新成人弾んでいるよ背中まで

背負ってはよろし春待つランドセル

元旦に柱時計の電池切れ

聞こえるように聞こえぬようにひそひそと

湯豆腐がひそひそ話盛り上げる

ひそひそを拾い集めて陳情書

ひそひそとうまい話に裏がある

五百羅漢もささやき合っている枯れ野

ひそひそと孫お年玉見せ合っている

ひそひそと言うな私認知になつてない

悲しいねひそひそ話通じない

寒いあなたまらんあなたと団子猿

孫受験滑るは禁句我が家では

長柳会(大阪) 坂上

淳司報

自慢なら誰にも負けぬ子沢山

恋愛運良好とある子の笑顔

地位名誉お金もないが元気です

讀え合い競う自慢の趣味仲間

願掛けは三日ともたぬ断酒デー

鈴鳴らし誓願成就辻地蔵

レジェンドの葛西は挑む鳥になる

古希の坂英語のいろは事始め

惚れた二人に心が迷い両天秤

褒められてコツコツ励む利発な子

めくばせで僕を動かす妻がいる

寝顔の子頑張れパパと言っている

徳積んで挑んで見よか白寿まで

後世に誇る九条残したい

五人掛けすんまへんなど六人目

夫には内緒待ち人来る神籤

あかつき川柳会(大阪) 山本

昌代報

落ちません私は飛んだ椿です

冬木立色の無い街小雪舞い

飛ぶ鳥を落とした夫を介護中

若さ追う足を鍛えるウォーキング

こころ一番勝負の赤で攻めてゆく

十二色どの鉛筆もよくしゃべる

背景の色にわたしが目立たない

色即是空そんな境地にまだなれぬ

真つすぐに進み挫折をくり返す

妻の愚痴正月だけはお蔵入り

晦日蕎麦半袖で食う三杯目

新同人の異色二十代がいる

正月もビーボビーボとご苦労な

通学路寒くないのか半ズボン

どこからかやさしい声が飛んで来る

菜の花の黄色がバツと照らす春

若さにはどんな化粧もかなわない

水仙の白さ寒さに立ち向かう

元旦も必勝誓う熟はじめ

漢字の名ひらがなに変え飛ぶつもり

国挙げて老いの懷狙われる

定年へ自分の色で生きてゆく

遠のいた怖さ知らずの若き日々

初日の出神の原点かも知れぬ

若返る葉できても間に合わぬ

圧勝は知事に県議に自民なし

改憲など国民ゆるすはずがない

声がする九条死守と鶴彬

九条に色をつけてはいけません

身を切れと叫びちゃつかり助成金

黒田さん男気あるぞカーブ女子

頭上はるかアベノミクスの論吉飛ぶ

銀世界世の不条理を埋め尽くせ

糸満と長崎二輪そつと散る

風刺画へ水でつぽうで向かうべし

喜八郎

大輔

穩夫

克己

紅絵

忠昭

廣子

堅坊

康信

シマ子

義泰

ふさゑ

敏子

秀夫

花笑

隆昭

健二

九条男

美智子

信二

樂生

峯二

和

一志

英夫

とーな

たもつ

川柳 大阪

山崎

珠生報

得か損しみじみ思う美人得

しみじみとふる里思う母思う

九条を曲げて平和はけつたいや

けつたいな服装身につく年のせい

初春に尻を叩かれまた一年

ピカドンにアメリカどんな詫びをした

別腹の敵の餅が呼んでゐる

海辺にも春の光が浮いている

お迎えが来ても気合いで追い返す

初詣で下鴨神社雪に泣く

元旦に凶のみくじで防護術

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

戎さん無視しないでこの私

歯車にのるネクタイを締め直す

僕の夢伸ばしてくれた地平線

あの果てにどんな思いが拉致が栖む

自分との約束交すお正月

駱駝ゆく月の沙漠の地平線

地平線の果てまでサソリ座の一端

あつさが好きねちねちは大嫌い

鍋奉行世代交代した安堵

突き合わせ角丸くしてお正月

挑む気も松をとるころ消えている

地平線あの上あたり楽園か

成せば成る母の言葉に挑む朝

挑まれてだめやダメヨと首をふる
陸と空やがて一つに地平線
痛くもない腹探られてゐる不思議

アベノミクス庶民はあつさり却下され
今年こそ挑んでみようクツキング

地平線の向こうにきつとある希望
人の輪が恋しい冬のひとり鍋

地平線見える国へと旅に出る
もの言わずあつさり論吉消えました

ぼつぼつと行く足どりも明日がある
散歩でき徘徊などでありません

地平線太陽沈み今日を切る
限界へ挑んで伸びる豆の蔓

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

過疎の村富士にも負けぬ初日の出

元朝の日の出ごつくり飲み込んだ

万物に感謝しながら陽を拝む

日は昇る老いも若きも胸を張れ

初水日の出輝く薨の水

だんだんと漲ってくる欲と皮

やる気だけぎんぎんに漲らせ

頭の毛が立つ漲ってくる力

あの頃はなあと漲る若さかな

万物を清らかにする雪の精

焼酎で清めて回るテリトリ

清らかな流れがあつた今暗渠

深く気高く清く散る美学

あさ子
千恵子
ルイ子

榮子
縣子
朝子

直樹
五月
志華子

高志
弘委智
集一

次男
石花菜
智恵子

萩江
英子
重忠

由紀子
雄大
瑞子

鬼一
完司
けいこ

悠子

清らかに八十路生きたし初暦
ワッショイが来ると泣きやむ赤ん坊
ワッショイと氣勢を上げる年男

ちぐはぐなワッショイやつと息が合う
ワッショイと孫持ち上げる力瘤

ワッショイと御神輿担ぐ千鳥足
軽トラが神輿を担ぐ過疎の村

白足袋が競つて蛇行ワッショイ
朝焼けの雲は阿弥陀の御来光

受皿は合掌心のおもてなし
芽えている歌劇見た夜のお星様

あの星と決めて想いを打ち明ける
冬銀河ロマンの旅にひたるなり

物思うゆえに星降る夜は愛し
恙なく二人で雑煮食べている

査定では我が家の泊り五つ星

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒免報

爺ちゃんのスパルタ式に孫は逃げ

青い灯が世界を変えた授賞式

就活の仕上げは晴れて入社式

今日だけは讚美歌うたうウエディング

百歳まで噛んで食べたい歯を磨く

頭にも磨きをかけてるカルタ取り

美しく国を磨くと空手形

炬燵にみかん洋画で磨く語学力

酔芙蓉
玲坊
康子

日出子
茶子
紀美恵

風露
祐子
照彦

哲子報

藍
哲子
義子

年代
いわゑ
みつ子

正子
長一
郁子

正代
堅坊
信男

勝

春代

個性を磨きオンリーワンを目指してる
テロにサギ窓を磨けど見えぬ明日
爺婆はあんころもちで仲直り
アーメンと誓った夫婦遍路旅
健康の他は願わぬ歳になる
毛筆で書いた賀状も希少価値
催促の二三度あって返しゃいい

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子報

美智代
黒兎
純子
順子
桂子
柳童
守啓

見送りの出来る患者にホッとする
進入禁止ロープ一本威厳持つ
心から感謝してます仏花換え
青い空いっしょに眺めなお青い
眉毛すくすく老いてゆく老いてゆく
川柳ささやま(兵庫) 北澤 桐民報

菜美
安子
一眸
遊子
公弘

鮭遡上句い忘れぬ母の川
職退いてあつさり妻の軍門に
しなやかに刺すライバルのブレッシヤー
震災後シンプルすぎる街になる
添え書きへ先ず目の走る年賀状
圧力に耐えて遅めの花咲かす
ゆるキャラが夢をかついで町おこし
成人式日本人形闊歩する
覚えてるはずの故郷で浦島に
満足に満足できぬ人もいる
七十年平和な雲よありがとう
人形みたい畏まってる見合い席
技能士のこけしもらって高くつき
森の精キノキオおどる朝ちかし
圧力を感じています姑さま
圧力ははね返します発芽中
引き際を知った男にある美学
鳥谷がファンに応えるブレッシヤー
連も糧も覚えています星流れ
指人形ホームの空気丸くする
尋常科サイタサイタは忘れたい
妻と母氣圧の谷でつむじ風
首のない人形がいる玩具箱
脱脂粉乳忘れたいのに覚えてる
違和感を覚えその場をそとと去り
母生きていたらと思う虎落笛
圧足らず小便小僧枯れたまま

キヨミ
秋果
淑子
宏造
洋次郎
浩司
千賀子
利子
りこ
じろう
いわゑ
わこ
弘子
紀華
みよし
文香
茂

この小川昔魚が泳いでた
年金が瘦せるほどには瘦せられぬ
何はともあれシニア料金ありがたい
女の勘寒く誤作動してしまふ
頑丈な鼻柱がよく折れる
すくすくとほくそ笑んでる庭の花
占いに凝って家族に嫌われる
心からお疲れさんという別れ
まずいです神を畏れぬ戦争は
夕暮れて今日の仕事にさようなら
ふるい立ち行くに決めたが吉日だ
留守番の子らはのびのび羽のぼす
満月がわたしを美女に仕立て上げ
まだいける立つて靴下はけたもの
ひとり膳特価のサンマ買ってくる
生きる耳聞かねばならぬ嫌なこと
自動ドア瞬間チェックしたような
山動くちよつと立ち位置変えただけ

純宏
和之
陽子
葵
真帆
一聴
恵美代
章子
美恵子
寿々子
紫音
亜矢
華蓮
昭子
信子
嘉子
敦子
和郎

火の車頑張り切った家族愛
百までの指折に背をシャンとさせ
遺言を書いてかれこれ十五年
花生ける心を正座させながら
堀越しの人影恋し冬日向
ちよつと無理今更ばつと散るなんて
古里を踊り尽くして車椅子
生きている事が嬉しいお正月
人生は死ぬまで誰もが初体験
青空のキャンパスに書く雲の技
一日に一度は心に鞭を打つ
西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

久子
美緒子
哲男
稠民
多美子
真由
可住
かほる
幸子
照代
美智子

盛夫
恭子

武臣
美津子
美籠
奮水
哲男
朋月
千代
光子
武彦
比ろ志

脳の奥縄文の美は今もなお

伯備

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

断捨離が出来たら行ける向う岸

房子

カレンダーの丸は体調よい証

智恵子

朝昼晚いつの薬かわからない

昌紀

和服着る妻におんなが満ちてくる

久仁雄

どん底を舐めた証の円熟味

光久

消せぬ罪赦してもらう他はなし

たもつ

本人であつても証求められ

加お里

息に息かけて残り火確かめる

美智代

私を証明してる笑い声

千代

こだわりの証に句読点を打つ

希久子

古い候ふ脳から文字が転げ落つ

義子

お人好しの証しばかりがあちこちに

みつ子

満足の証のように舞う枯葉

いわゑ

母の愛味噌汁に具を入れるすぎる

楓楽

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

喜代志

いい人も見方変えれば悪いヤツ

和美

やはり行く行列出来るラーメン屋

勝彦

もう春の角度でキリン首上げる

一子

直角な町たおやかに京言葉

信二

建売はアングル変えて広く見せ

幸子

敗戦から四年岸川できた頃

ダン吉

手当てなどないが楽しい趣味の世話

隆昭

年輪を積んでも取れぬ人の欲

大輔

いい友がいたから続く趣味の道

忠太

アングルを決めて足踏み待つ初日

英夫

そして今楽しんでます趣味の海

ひろ子

お笑いの話芸に生かす円熟味

ふさゑ

栄えてた跡も残さず枯木立つ

益男

人間はどうまく化けられない狐

義泰

親芋に子芋孫芋みな元氣

みつ江

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

敬子

孫が来た我が家の財布羽根が生え

泰子

一・七あの日も梅は咲いていた

敬子

梅一輪いちりんほどの夫婦愛

薫

美酒一献お節は出前羽根伸ばす

一幸

百年の命の姿梅盆栽

みちる

新春や鶴が羽ばたく軸の中

やすの

梅はまだかせつかち夫に芽もしほむ

あや乃

飛躍したいと翼願つている羊

克衛

風に舞う鳥インフルの羽根悲し

昭好

梅一輪咲いたが一句浮かばない

勇太朗

羽根のばしめかたが増えた寝正月

陽陽

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

寿子

筋道を通す大人で明日へ向く

小雪

自画像の目が濃く深くなり大人

准一

大人です知らぬ振りする思いやり

日出男

大人にはいつなるのかと子に聞かれ

あきこ

水すこし濁して大人なのだろう

僕の自転車僕と同じほど喋る

道夫

愛される車時には刃にも

秀子

すがりたときもあろうに一輪車

保州

懸命に風を切つて一輪車

克子

チャンスだと思つて石にかじりつく

ほのか

幸せのシャッターチャンス逃がさない

よしこ

チャンスなら何度でもある生きてれば

大輪

あきらめずチャンス待ちする粘り腰

めぐみ

義理で書く顔も忘れた年賀状

佐一

来年から止めますとある年賀状

英子

生きてきた重さをせて書く賀状

紀久子

静かな雪の正月賀状読む

和香

元氣そう賀状の達筆姿えてない

富美子

差出人不明の賀状私です

紀子

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

武彦

ふつくらと黒豆煮えて喪が明ける

千賀子

念入りに明日を歩く靴磨く

加寿子

初詣で神楽の笛に福が舞う

美恵子

光りにも陰にもなつて母の愛

文香

頑張れば苦勞の汗も光りだす

利子

スポーツライト浴びると元氣でる役者

盛夫

ふわふわの愛が育てたドラ息子

洋弘

老いてなお浮つき態度直らない

茂

離れない神戸に光ある限り

浩司

「今年こそ」また繰り返す弱い意志

武臣

土石流不安は地名の文字

初句会決意新たに頑張ろう

退院日命の重みかみしめる

日本に生れて感謝初日の出

つむじ風吹いて話はまともらず

大雨も降り方により地獄絵だ

口笛の上手な人に惚れた春

船の汽笛こだまで送る神戸港

初老にて口笛吹けど鳴らぬ口

天の句に口笛吹いて帰る道

一芸に心をこめた我が余生

ふわふわの心さとした父の喝

ふわふわと飛んで惑わす杉花粉

ふわふわと生きていくのもいいものだ

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

ばらばらに住んでも届く母の笛

ひらめいてときめきもまた一瞬に

メダル手にオリンピックの底力

山彦は別れた姉の声みたい

山彦はもう還らない陽が沈む

雑草に学んだ強さにぎりしめ

見栄を張りハイと言ったが重すぎた

雑草の名前がさつと出てこない

一瞬のひらめき今宵は十三夜

裏の裏相手の持駒金と銀

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

冬籠りまたカミさんと小競り合い

石花菜

順子

夏子

じろう

邦子

道子

和宏

妙子

忠貞

繁義

弘子

光久

能子

ちよえ

安子

澄子

ハル子

はるみ

恵美子

英子

かつ子

好榮

昌

飲んで寝てまた飲んで寝て三が日

うまいこと歳をとってるどの顔も

遠くからみているだけの山でいい

自分史の中味は自分サイズの絵

浄土まで運べるものは何もない

あたためておこう大事な希望の芽

鞘だけは立派な刀差している

人肌がいいのはお酒だけじゃない

原発に五臓六腑を見せられる

湯加減をシッポでみている日本猿

分別というものがあのお友達

五割引き 春が来るぞとウインドウ

老骨もネジを巻いたらまだ動く

プロフィールごまかしておく初対面

熱心に聞いて断るいい話

知らん顔分かった振りの遠い耳

初夢はガラスの靴を履いていた

値上げして中身減らして知らん顔

熱心に思い描くは黄泉の国

問題は中身が勝負ブリを競る

老い独り腑抜けになった冷蔵庫

搦いた餅運んで欲しいお月さま

曾孫抱く力もなくして覗き見る

仏教の戒律ぬるいのが取り柄

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

梅干しで今日を乗り切る朝ごはん

昌枝

紀の治

芳光

小鹿

くにこ

照彦

楓花

麦青

大鯰

野蒜

鬼一

美ツ千

幹啓

熊四郎

たえこ

らんまん

雄大

風露

けいこ

由紀子

蟹郎

重忠

久子

仁美

完司

枯れそうな私に朝が来てくれた

おひとりの朝ゆつくりとパンを焼く

主婦の寝ぼう家族みんなが遅刻組

毎日が特別な朝日が昇る

舞う雪に来年の幸問うている

延びる会議に積もる雪消える雪

ツイッターでハワイへ雪を送ります

屋根の上スノーボードのすずめたち

アメリカの後ろをついていく日本

日本の行方案じるこのとり

つっこんだ手がかきまぜる日本海

日本の子の夢瘦せていく不安

日本語もアイロン当てて確かめる

薄れ行く日本のしきたり恋う大正

四季がある日本大好き初詣で

LEDでビカビカしてる日本じゅう

ありがとうとは美しいにつぼんご

黙々と圭は日本を塗り替える

ワックスをかけて地球を光らせる

ビカビカに磨いて今日の靴送る

ビカビカの物何一つない元気です

鍋みがく心の中もビカビカに

ビカビカの自転車ぶつけどまっとう

ビカビカの話を耳が立って来る

溶かされてきれいな骨になっていた

年金がスタンドバーで溶けていく

幸

玲子

治代

哲子

柳歩

幸子

博子

久絵

寛

芳山

知恵子

草庵

ちかし

とも子

左余

静枝

輝山

ゆき

禮子

美智子

桂子

ミツコ

邦代

紗季

ちえこ

畔

弘充

ホイッスル鳴って溶け出す蟬り
ぬるま湯に程よく溶けてゆく野望

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

サブリメント健康よりも値が勝負
握り箸祖母の目に付き論される
どっこいしょ老々介護が強い合う
一本のタクトロマンをかきたてる
大安がどっこい前に歩ませる
将棋一番孫を負かして見直さる
杳杳の海の彼方にあるロマン
少数派民意に問うと云う手法
外は雪夢二のゆめに触れてみる
どっこいしょ口だけ動くご老体
「仲良うしいや」夫亡くした友が言う
躰いて思い出してる亡妻の愚痴
そっけない振りだからこそ信じたい
はやぶさ2宇宙探査に見るロマン
抱負などにも無いけど初春が来た
悔い残るその場凌ぎに言うイエス
検診前うなぎ肉エビ食べておく
判断が甘くて風に逆らえず
幽玄の世界にロマン溢れてる
アルバムに幸せを問う人がいる
初句会先ず天神へ初詣
ふる里にデッカイ夢を置き忘れ
昼限定老いのロマンが咲くベンチ
判官びいきなのでいつでも野で吠える

たけし
浜丘

幹治
庸佑

雀舎
美佐子

武彦
ヨシエ

健二
佳恵

歌留多
美津子

堅坊
久子

正彦
千鶴子

則彦
玲子

靖鬼
葉子

巴子
耕治

茂
宏子

見清

月へ行くロボットに問う余命表
ついて来ぬ体に向う顔になる
チケッと二枚ちつちやなロマン抱いている
ランドセル質問したいことばかり
ハンカチを落した恋のプレリユード
どっこいはい自分の元氣出す呪文
紀華
求芽
五月
とーな
きらり
美智代

岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

川柳の縁で恋が芽生えたり
政治にも春芽生えたる俺の票
真冬でもビールたぐあんあればいい
悪女にもなれず大根煮ています
大根も風雪に耐え甘くなる
水引のかかる金封重みある
賞状より金封の方望んでる
堂々と金一封で肩並ぶ
金一封ドンと百万してみたい
来客もなく座布団大欠伸
座布団の代りに膝を御貸しする
たましいのある座布団だ暖かい
座布団に酒一合をのませてる
座布団に善意を置いて無人駅
座布団へちんまりと座す母百寿
川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報
逃げ道をつくっておいて叱る母
子を抱く日夢に刻んだ拉致家族
秘め事のベール剥がせぬ北の国
蟹郎
幸安
圭一郎
一瑤
菖子
節子
たぬ
重忠
天翔
敏子
茶子
一粋
雅女
弘子
美恵子
博泉
麗峰
壽峰

夢一つ加えて一つ消えてゆく
酔うほどにオープンになる裏話
今年こそサルマにでかい眼を入れる
夢の中長生きしろと黄泉の友
芽吹く日へ裸木夢を溜めていた
何もかも曝してデンと動じない
母ちゃんの目玉の中に僕がいる
レットイットゴー春の選抜マーチ曲
隠し事しないで話し合えば済み
オープンをされた途端に興味失せ
ヒヨコから育てたという目玉やき
九条を目玉に日本の平和
何事もオープン家族仲が良い
今年こそ目玉の景気隅々に
正面で向き合い心開かせる
輝いたマララの風を呼ぶ瞳
年頭に七十億が紡ぐ夢
言い訳が追いかけて来る目の動き
初漁の網にかかったでかい夢
心の眼開き善悪見極める
鳥インフルにオープン過ぎる大空よ
お静かに夢が生まれるところで
全快を祈る深夜の百度石
目玉にはならないけれど窓の月
修
郁夫
弘一
高鷺
茜
鈍甲
かすみ
高志
忠央
銀杏
朝子
ルイ子
秀雄
仁
洋
祥昭
柳弘
寿子
賢子
堅坊
喜八郎
栄二
恵子

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

のし袋昔は鮑の肉を付け
のし袋のなか健さんの駅がある
半蔵門
美子

熨斗袋なんていらぬありのまま

成人式大ぶりになる熨斗袋

小切手でドンとはずんだのし袋

春に産まれるお腹の子へもお年玉

何もいらん笑顔が熨斗や逢いにきて

ありがとう感謝がつまるのし袋

百歳の母に賜るポチ袋

赤ちゃんの拳開けはのし袋

ひ孫の名書く楽しさお年玉

百歳になると国からのし袋

達人は障る丈でも中身知り

水引きが涙を誘うのし袋

節目には母の小さなし袋

友達に渡す大事なし袋

のし袋論吉のはずが英世さん

花好きな友に季節のし袋

春がきてはちきれそうなのし袋

誕生日宿泊券ものし袋

世界への平和を包むのし袋

のし袋中身弾ます仕事ぶり

紐銭で産着飾って宮参り

祝宴に招待されてのし袋

のし袋貰えば鬼もにっこりと

のし袋一期一会を大切に

京都塔の会

榎本

宏子報

大の字で眠ってみたい棺の中
寄せ集めの顔ぶれで飲む縄のれん

心平太

アキ

美代子

いさお

みつこ

弥生

扶美代

信二

一歩

紀雄

武義

武志

婦美枝

雄太

英夫

喜代子

一文

アヤ子

キーキー

フジ子

絹枝

庸佑

雅枝

瑠美子

耳鳴りの奥に集めている疑問

集合の笛にもだらり反抗期

値は同じボリウム減ったハムチーズ

毒盛ったニュースボリウム上げて聞く

予防注射お年だからと勧められ

かき集めたのに一円だけ足りぬ

字足らずも字余りもある私小説

霧閉気に負け食べ過ぎたバイキング

早々と予防接種し流感に

聴力に合わせトーンも高くなる

古文書の筆跡で見る人となり

年末のゴミに秘密も集められ

流感が私の前後行き来する

止まらないボリウム増した口げんか

ボリウムを少し落とせと肥えた医者

耳元へ吐くボリウムが骨を抜く

集積の書物がゴミになっている

美しい落ち葉集めた亡妻の秋

手作りのお節で子等呼び寄せる

墨の字がぐいぐい私せめてくる

川柳さんだ(兵庫)

田中

章子報

義理も良い生きていますと賀状書く

本人の写真が見たい年賀状

武骨者賀状も「春」と一字だけ

今年まだ生きてますかと来る賀状

盃はまだかスルメが焼けている

盃でビールを受けて疎まれる

文代

弘之

益子

啓子

満子

葉子

宏子

かずお

忠子

みどり

求芽

見清

保子

弥生

五月

欣之

肇

堅坊

美津子

ふりこ

晶子

恭子

野薫

幸香

武彦

徹

父の盃お祝いの膳の真ん中に

盃をかわす親しさ増してくる

愁傷の涙おとした通夜の盃

郷愁にかられルーツへ足が向く

家系図は光源氏の浮気筋

震災のルーツを手繰る命の灯

隠しても先祖が分かるDNA

そういえば父とおんなじ歌が好き

飛切りのあなたの笑みに酔いしれる

三次会やつと酔うたと言う相棒

ほろ酔いの勢い借りて告られる

金婚の祝杯に酔う幾星霜

ややこしや笑い上戸に泣き上戸

はるばると来て寝て食べてゲームだけ

転動ではるばる来たぜこの兵庫

腹の立つ時はだまって草をとる

買うてんか勉強しとく初売りや

いい夢を見ている時は主役です

ノルウェーとカナダが晩の膳に乗る

がんばっているのにがんばれと言われ

授かった命に母の座を貰う

黒星が続いて目立つテーピング

外人客ピカピカトイレウェルカム

ラジオから流れる声にハッとする

お雑煮もスーフカップで飲む独り

風刺画にテロとは心の狭い神

元旦に決意表明などするな

ご先祖様引つ越しですよ花の墓

ヨシエ

蔵子

茂山

光久

見

一子

祐康

ひとみ

宣子

順子

美籠

婦美子

正和

美智子

隆

聖也

つな子

廣子

耕治

章子

靖鬼

雅尚

雅司

喜久子

淑平

修平

忠夫

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

ひとりばち氣力を糧に生きんかな
八十路きて発展途上の趣味ひとつ

志華子
恭昌

川柳あまがさき(兵庫) 加川

靖鬼報

頑な氣持をほぐすみつをの時
かすり傷おれが割れていたと言う
ちよこちよこ花の芽土を持ち上げる
またひとつ減っていました吊し柿

野鶴
耕治
りこ

母の歳越えて高期を謳歌する

キヨミ

ちよこちよこ来ては詮索いやな姑

千代子

札束を積まれて迷う同居婚

晶子

夢で乗る電車の駅は里の駅

初音

天神のおれなつかし童うた

咲貴

ちよこちよこ世世払いと孫無心

里江

過去未来仕切り直しの初日の出

洋子

こっそりと札束溜めて宇宙旅

幸香

寂しげに木立ちをゆする虎落笛

柳明

初めてのは娘の料理替める父

よしひさ

ニイハオの習い始めは六十五

千代美

氣にいった値札見直し諦めた

五月

切り札を手にしにんまり時を待つ

健二

始まりを吸い込んで行く朝の駅

つな子

正月の喧騒去つてまた二人

つね湖

初日の出テレビから見ると富士の山

和子

目的を持って歩幅も広くなる

祐康

まっさらな明日へ助走を知り返す

雪葉

キッチンのおかずは知れている

靖鬼

一・二七しらべ悲しい春の海

紀乃

絵筆持ち始めてみよう旅ごよみ

晴美

純

正和

見清

かずお

宏造

比ろ志

美籠

哲男

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

ひとりばち氣力を糧に生きんかな
八十路きて発展途上の趣味ひとつ

志華子
恭昌

川柳あまがさき(兵庫) 加川

靖鬼報

母の歳越えて高期を謳歌する

キヨミ

ちよこちよこ来ては詮索いやな姑

千代子

札束を積まれて迷う同居婚

晶子

夢で乗る電車の駅は里の駅

初音

天神のおれなつかし童うた

咲貴

ちよこちよこ世世払いと孫無心

里江

過去未来仕切り直しの初日の出

洋子

こっそりと札束溜めて宇宙旅

幸香

寂しげに木立ちをゆする虎落笛

柳明

初めてのは娘の料理替める父

よしひさ

ニイハオの習い始めは六十五

千代美

氣にいった値札見直し諦めた

五月

切り札を手にしにんまり時を待つ

健二

始まりを吸い込んで行く朝の駅

つな子

正月の喧騒去つてまた二人

つね湖

初日の出テレビから見ると富士の山

和子

目的を持って歩幅も広くなる

祐康

まっさらな明日へ助走を知り返す

雪葉

キッチンのおかずは知れている

靖鬼

一・二七しらべ悲しい春の海

紀乃

絵筆持ち始めてみよう旅ごよみ

晴美

純

正和

見清

かずお

宏造

比ろ志

美籠

哲男

事務所便り

販売品に関するご案内

事務所では投句用(愛染帖・一路集・
初歩教室・印象吟)の「川柳塔社用箋」
を一冊二百円、三冊送料込み千円、小冊
子「川柳しませんが」百円(送料別途実費)
「路郎読本」二千五百円(送料五百円)で
販売しております。お申し込み頂ければ
即日お送りします。着後、同送の用紙で
お振込み下さい。

尚、二十六年版の合同句集(送料込み
五千円)も若干、事務所に残部がございます。
同様の販売は月例の句会場(HA
ウィーナ)でも受付で販売しております。
どうぞご利用下さい。(山岡富美子)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸 和 田 川 柳 会	14日(土) 12時30分開場 財布・笑う・ゆったり・ムード	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川 柳 塔 打 吹	14日(土) 13時締切 手紙・舞う・それでも	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川 柳 ねやがわ	15日(日) 13時締切 辞典・解説・順調・自由吟	寝屋川市産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	15日(日) 14時締切 三度・差障り 席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	16日(月) 13時50分締切 投資・ちぎる・ずっと・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩 5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	17日(火) 13時30分締切 出発・スタイル・咲く ふわふわ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川 柳 塔 すみよし	21日(土) 14時15分締切 善意(連記)・ネット・別れ	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂燕子
川 柳 塔 みちのく	21日(土) 17時締切 憧れ・ぐらぐら・椅子	弘前市桶屋町4-7 「居酒屋とんぼ」 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦
はびきの 市 民 会 川 柳 会	22日(日) 14時締切 桜・血管・目覚め・プレート	陵南の森公民館 近鉄「高鷺」駅北東 徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	22日(日) 13時30分開場 発作・オレオレ・信じてよ	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	23日(月) 18時開場 一呼吸・待つ・リッチ・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	28日(土) 12時30分開場 足・動く・年金	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
京 都 塔 の 会	30日(月) 14時締切 ショック・ころころ・型	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	7 日(土) 14時締切 縁起・巻く・たまたま・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
富 柳 会	7 日(土) 14時10分締切 笑・瞬間・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 川柳とんだばやし富柳会 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7 日(土) 14時締切 ぬるぬる・焼く・たおやか	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 社 吟	7 日(土) 13時45分締切 敵・鳴る・迷う・ズバズバ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川 柳 会	8 日(日) 14時締切 老舗・瓦・透かす・雑詠	八尾市淡川町 安中町集会所 1F JR八尾駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8 日(日) 14時10分締切 兼 題=占う・糸・ニュース 課題吟=さえ(助詞)	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8482 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 泉原道夫
西宮北口 川 柳 会	9 日(月) 14時締切 財産・添う・そっくり 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池町10-18-104 福島弘子
ほ たる 川 柳 同 好 会	10日(火) 13時30分締切 楽・飽きる・折句=さ・か・な	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒児
川 柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 丸い・線・ベット・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5-20-14 加川靖鬼
あかつき 川 柳 会	13日(金) 14時締切 咲く・時・両手・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川 柳 塔 な ら	13日(金) 14時締切 誘う・品・曲者	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳大阪	14日(土) 14時締切 ピンチ・技・感謝	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区本通4-11-6 山崎珠生
川 柳 塔 さ か い	14日(土) 13時開場 しびれる・別れ 折り句=きまり	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也

柳界展望

★平成26年度大山滝句座
年度賞決定

新春のどの街角も寒か
つた 新家 完司

★第33回没句川柳供養大
会は12月21日、鳥取市新
日本海新聞社本社ビル5
階大ホールで開催。参加
者170名。同人天位。

冷めた目が笑いの渦の
中にいる 両川 無限

一目惚れ僕を睨抜けに
したエクボ 両川 無限

総合成績

2位 両川 無限

4位 新家 完司

☆木本朱夏さん(副理事
長・和歌山市)は2月5
日(木)、大阪府高齢者大学
校エッセー文学科に於て
「川柳人間模様」を講演。

▽御芳志お礼△

新同人紹介

お
大
島
ともこ
一岳人・直樹・富美子・淳司推薦

○鴨谷瑠美子さん(参予・
藤井寺市)より切手拝受。

▽新誌友紹介△

広島市

松尾 信彦

小島 蘭幸

寝屋川市

紹介者

岡山市

紹介者

岡山市

紹介者

今治市

紹介者

鳥取市

紹介者

寝屋川市

紹介者

新家 完司

新家 尚世

高田 博泉

藤村 亜成

籠島 恵子

鳥取市)は12月6日逝去。
享年九十一。

■土橋はるおさん(同人・
鳥取市)は2月2日逝去。
享年八十三。

▽お詫びして訂正△

▼1月号P14上段3行
目、若い二人→若い二人、

P91上段16行→17行目、

まして川柳塔本社の句会

は、先生方や諸先輩の秀

句を直接聴けて本場に勉

強になる→重複につき削

除。

▼2月号P9上段3行

目、政治家が賭博を開帳

するという→賭場

常任理事会2月5日(木)

①同人・誌友拡大策②同

人推薦文書について③第

21回川柳塔まつり④第3

報

近藤佳子さん(同人・

報

近藤佳子さん(同人・

現代川柳ヒストリア+川柳フリマ ご案内

日時 5月17日(日) 13時～17時

場所 たかつガーデン 3F
近鉄上本町または地下鉄谷町9丁目下車
〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町7-11
川柳フリマ 出店料 1,000円

タイムテーブル

14時～14時30分

展示解説「雑誌でたどる現代川柳の歩み」

14時30分～15時30分

句集紹介・作者サイン会

田口麦彦『新現代川柳必携』他

16時～17時 対談「川柳をどう配信するか」

天野 慶×小池正博

連絡先 小池正博 TEL/FAX 0725-56-2895

回誌上大会・今後のスケ
ジュールとボランティア
募集⑤定例確認事項⑥各

部報告事項
次回3月5日(木) AM10時

一岳人・淳司・直樹・富美子推薦
松本昌

藤塚克三

一岳人・淳司・直樹・富美子推薦

第39回 全日本川柳2015年千葉大会

日時 平成27年6月14日(日) 午前9時開場
会場 銚子市青少年文化会館大ホール

〒288-0003 千葉県銚子市前宿町1046

TEL 0479-(22) 3315

交通機関

JR銚子駅からタクシール5分

銚子電鉄観音駅(銚子駅より2駅目・4分) から徒歩5分

共催 銚子市 文化庁・千葉県・千葉県教育委員会ほか

後援 銚子市 一般(高校生も含む) 部門

宿題 第一部 4月15日締切(当日消印有効)

事前投句 一般(高校生も含む) 部門

「スタート」久崎 田雨選 「鉛筆」千葉 絹子選

「誘う」鈴木 順子選 「酒井 青二選

「スタート」池 森子選 「えんぴつ」酒井 青二選

「自由を作る」江口 信子選

専用用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句を記入、各題

二句無記名。封筒の裏面に住所、氏名明記。

投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛に

郵送または郵便振替口座へ送金のこと(当日消印有効)。

小中高生は投句料無料。

投句先 〒530-0041 大阪府北区天神橋2丁目北1-11-905

一般社団法人 全日本川柳協会 宛

TEL 06(6352)2210 FAX 06(6352)2433

郵便振替口座 009701913575

宿題 第二部(当日投句・11時10分締切)

「沼」赤松ますみ選 「吠える」齊藤由紀子選

「地」金子美知子選 各題二句、当日配布の句箋に記入。

第二次選者 久保田半蔵門 雲石 隆子 赤井 花城

参加費他 佐藤 美文 島田 駱舟 森中恵美子

表 彰 四、〇〇〇円(参加費二、〇〇〇円・昼食他二、〇〇〇円)

(1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダル

全日本川柳千葉大会実行委員長 津田 暹

〈表彰式典・前夜祭ご案内〉

◎表彰式典 平成27年6月13日(土) 午後5時半

(川柳文学賞・功労者・大会連続出席者・平成柳多留入賞者

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場

会場 犬吠埼ホテル

銚子電鉄犬吠埼駅(銚子駅から17分)下車 送迎バス2分

〒288-0012 千葉県銚子市犬吠埼9575

TEL 0120-(31) 5489

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)

大会・前夜祭の問い合わせ先

〒263-0016 千葉県千葉市稲毛区天台3-1-302

中島 宏孝 方

全日本川柳2015年千葉大会実行委員会事務局 宛

TEL FAX 043-(253) 7870

大会・前夜祭参加費の送金先 4月15日(必着)

郵便振替口座番号 00160061486130

全日本川柳千葉大会実行委員会 宛

〈宿泊・観光ご案内〉

宿泊 (一泊朝食付き・お一人様・税金・サバイバル料込み)

ホテルサンライズ銚子・銚子プラザホテル

ホテルニュー大新・犬吠埼ホテル・パティホテル千葉

観光 A 銚子市内一周コース

6月13日(土) 午後1時40分〜午後5時 4,500円

集合場所 JR銚子駅 午後1時40分

募集人員 40名様(最少催行人員20名様)

B 「伊能忠敬記念館・成田山コース」(到着東京駅)

6月15日(月) 午前8時30分〜午後4時 8,800円

集合場所 犬吠埼ホテル 午前8時30分

募集人員 JR銚子駅 午前8時50分

40名様(最少催行人員20名様)

宿泊・観光の申し込み、問い合わせ先 (関東武トラベル

担当 古田・岩田 TEL 04(7144) 2981

編集後記

★水の渦想いの渦も春に
なり 薫風

★二〇一一年三月十一日午後2時46分。私は自宅でパソコンに向かっていました。テレビ画面を流れる地獄に吐き気がした。風化させてはいけない時間を、単なる記憶の一頁にしてはならない。「お前は

ワード島の豊かな美しい自然の中で、善意の人々とアンが織りなすドラマの数々。殺伐とした事件や陰謀はなく、ほんのバラの棘ほどの悪意が時にきらりと光り、人によれば物足りないかも知れない。しかし今、私たちが生きている世界はいかに事件・事故・陰謀で血塗られていることか。

この震災で何を見た」放射能が降っています。静かな夜です」震災直後にツイッターに書かれた福島在住の詩人 和合亮一「詩の礎」(徳間書店)から。

★たかだか一〇〇年前に書かれた『赤毛のアン』の時代から、世界は大きく変貌。イスラム国に拘束されていた日本人2名がテロの犠牲になった。たまたま私は周木律著『アールダーの方舟』(新潮社)を読んでいた。

★昨年のNHK朝の連続ドラマ「花子とアン」をきっかけに、モンゴメリ作『赤毛のアン』を愛読している。男の子の手伝いが欲しかったマシユウとマリラの兄妹に、間違えて送られた孤児・アンの成長を描く全一〇巻。

★本書を貫いているのはキリスト教・イスラム教・ユダヤ教などの教えだ。

★カナダのプリンスエド

一〇〇分de万葉集

先日、NHKのEテレ「一〇〇分de名著」という番組で、「万葉集」というタイトルの講義があった。

それによれば、万葉集は、ほぼ紀元六三〇年ごろからの一三〇年間に創られた歌を集めたものである、とのことである。

この期間は、「万葉仮名」ともいわれるように、日本語の書き言葉が整い、読み書きが広く行われるようになった。すなわち、「声の

文化」から「文字の文化」へと転換を遂げた時代である。

それとともに、「自意識」がめばえ、歌は「集団の声」から「個の声」になり、歌の内容も、客観的描写から主観的描写へと移っていったということである。

川柳のルーツをたどれば万葉集に行きつくはずであり、暇ができれば、すでに十分暇であるが、「万葉集」を通読してみたいと思わせてくれるような、興味深い内容の講義であった。(今井 弘之)

ひとつと

大方の日本人は初詣では どう思うだろう。

神社、結婚式は神式またはキリスト教、お葬式は仏式・・・。仏教系の幼稚園でさえクリスマスと画サイトに投稿する少年。飲食店のアルバイト店員が、冷凍ケースに入り、ピザで顔を覆うている動画、USJで迷惑行為をくり返し、それを「偉業」とネットで自慢する大学生(高い授業料払って何を学んでいるのだ) 〇一連の非常識な行動

はネットの普及で日本人の幼児化が進んでいるのか、ネット社会で目立ちたいという幼稚な願望なのか(分かん)

〇他人のネットに侵入し思い通りに操るサイバー攻撃、小説かテレビの話かと思えば、今や現実：何をどうすればそんな事が可能なのか、さっぱり分からないが、警察にはサイバー攻撃専門の刑事がいるとか：(まつお)

「一億総白痴化」と嘆いた大宅壮一氏。現在のインターネットの普及を

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)」

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「旗」(3月15日締切)

5月号発表

古久保和子 選 — 共選 — 牧野 芳光 選

B

A

B

A

地名

市都
県道
府
姓雅号

地名

市都
県道
府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	 	

○ ○

年 年

月から半年
月から一年

5000円
9800円

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 009804-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

5月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄「旗」 (2句)
インスピレーション「2句」
一路集 (3句)
初歩教室

「主 婦」
「素 通 り」
「さばさば」
「弁 当」 (3句)
小島 蘭 幸
西出 楓 選
新家 完 司 選
牧野 芳 光 選
古久保 和 子 共選
大西 泰 世 選
兩川 洋 々 選
梶谷 和 郎 選
小林 久 担
山口 光 担
山口 久 担

6月号

檸檬抄「リクエスト」
一路集「化石」「続 く」
「あべこべ」
初歩教室「スマート」

第33年度 夜市川柳募集

第10回「勘」黒川狐遊選
ハガキに3句 3月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料86円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇一五年(平成二十七年)三月一日発行
発行人 小島 和 幸
編集人 木本 朱 夏
印刷所 美研アト
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六六七九三三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二一九八四七九番

本社3月句会

とき 3月5日(木) 13時開場・13時40分締切
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし 「笹本英子の生涯」
兼題「具 合」
「具 合」
「苦 い」
「コック」
「迷 う」
「王 者」
西出 楓 氏
河内 月 子 選
堀田 正 和 選
太田 扶美代 選
池田 森 子 選
村上 玄 也 選
小島 蘭 幸 選
会費 1000円
投句料 500円 (切手可) (各題2句以内)

本社4月句会
7日(火) 午後1時から
兼題「船(舟)」「鮮やか」「ぴちぴち」
「探 る」「灰 色」

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌級込みの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙級込みの投句用紙を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

オニザキのプレミアムロースト

つまみ

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、
香ばしい薫り。舌と記憶に
しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすくな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>